認し、その療法として外國旅行を申出て見た。返答は私の提議に一致しなければならない、それで私は急いでマリアに此醫師の診斷を傳へた、それに對しては如何に彼女でも異議を申立てる譯に行かないのだ。——

『醫者がさうしろと云つてるのだ！』

此言葉は、自分のしたい事を醫者に頼んで云はせる時に、彼女が之れまでよく使つた慣用の文句である。

彼女はそれを聞くと顏色を變へた。

『あたし國を離れるのはいやよ。』

『お前の國？——それはフィンランドぢや無いか！　それに、シュヴェーデンに居たつてどうせ同じ事ぢや無いか——此處にはお前の親類も無く友達も無く劇場も無いんだもの。』

『それでもあたし行き度く無いわ！』

『何故さ？』

一寸ためらつた後、彼女は續けた。——

『あたし何だかあなたがこはいんですもの！　あなたとたつた二人切りになるのはいやだわ！』

『お前は自分がしつかり手綱を握つて居る小羊をそんなにこはがるのかい？　まさか本氣でそんな事を云ふんぢやあるまいね。』

『あなたはひどい人なんですもの、あたし誰にも守られずにあなたと一緒には居れないわ！』

此女は情夫を持つて居るに相違無い。それで無ければ、私に不品行を發見せられるのを恐がつて居るのだ。

そんならおれは彼女を恐れさせて居るのだな——まるで犬の樣に彼女の足下に蹲踞つてゐる此おれが、獅子の如き立髪を鋏の下に刈取らせて、馬の額髪を以て滿足して居る此おれが、彼女の危險なる情夫共との戰に用意せんが爲めに、口髭を上に捻上げて折襟を着けて居る此おれが！……

彼女の此畏怖が私にそれ以上の畏怖を與へ、同時に私の疑惑を新たにした。

『此女は、殘して行き度く無い情夫を持つて居るに相違無い、それとも又自分の審判を恐れて居るのか……』と私は思つた。

何時終るとも知れない爭論の後、彼女は遂に、少くとも一ケ年以内には歸國する事といふ約束を無理に私から取つてしまつた。

私はそれを約した。

生きんとする意志が再び私に戻つて來た、そして歸國後の冬に出版する筈の一卷の詩集を完成する爲めに仕事にかゝつた。

そして此盛夏の頃、私は新たなる勇氣を以て歌つた――私は特に我が渇仰する婦人を歌つた、彼女の青いヴェールは我々の初めて相見た日にその麥藁帽に飜つて、其後嵐の海に乘出す毎に必ず我がマストに高くそれを掲げた、あの婦人を歌つた。

或晩私は小人數の集りに於て此詩を友達に讀んで聞かせた。マリアは敬虔な面持をして耳を傾けて居た。讀み終ると、彼女は泣出した、そして起上つて私の顏にキッスした。

此點に於ては勝れた女優である彼女は、私の友達の目を欺いて、夫を愛する妻の役割をうまく演じて見せたのである。すると此單純な男は其日以來私を、斯くも愛すべき妻を天から惠まれたにもかゝはらず、嫉妬をする馬鹿者だと思ひ込んでしまつた！

『君、細君は君を愛してるよ！』と此若い男は私に確める！

そして四年後に至つても此男は此シーンを私の妻の誠實を證明する一つの事實として記憶して居た。

『僕は誓つてもいゝが、少くともあの瞬間に於てはあの人はありのまゝの眞情を吐露したものに相違が無いと思ふよ。』と彼れは繰返す。

『さうだ、自分の良心に責められたといふ點に於ては眞情を流露したものかも知れないね！　あんな賣女の樣な女をマドンナに化して歌つた僕の愛の前には、どんな女でも頭が下るのは當然だよ。それだけは僕も信ずるよ！』

日がすみ

彼れは荷物が殘らず積込まれて居るかどうかを氣づかはしげに見廻した――人間や荷物でごたごたに混雜して居る後甲板の眞中で、それが分りでもするかの如くに。

汽船が製粉所の前を通過するまで、彼れは何か知られぬ罪を犯して居る人の樣な氣がした。と、強烈な太陽の光が彼れの目を眩ます。海面は無限に遠く擴がり、靑みがゝれる山々は不可思議な魅力を以て人の心を誘ふ。そこには乳母車が有る、骨を白く塗つて靑い幌のかゝつて居る方のだ――もう一つのでは無い――彼れはそれをそんなによく知つて居る――靑い幌の上には小さな牛乳の汚點が有るのだ。それそこには一等善い部屋から持つて來た大きな肘掛椅子とソファーとが有る、それから、草花の鉢が付いて居る浴槽も。みんな埃だらけになつて居る樣だ、あの貧しげな道具が――何しろ一冬の間濛々たる煙草の烟の中に閉籠められて居たのだからな。……あすこには、未だ夜の長い春の初頃、天竺葵がランプの光を浴びて机の上に在つた、そして其處に有る肘掛椅子は其机の右手に在つたのだ、そして彼れが仕事の手を休めてペンを紙の上にうろ〳〵させながら顏を上げて見ると其椅子にかけて居る人がひそかに、親しげに、勵ます樣に、につとうなづいて見せるのであつた。然し其椅子にかけて居る人が居ない時には、彼れは疲れた目を何處に休ませたらいゝかとうろうろ部屋中を見廻した後、其處に在る其ソファーの更紗の花模樣の上に目を落すのであつた。……だが、そんなに澤山の目が部屋の中を覗き込む、そしてランプがあか〳〵と燃える。あゝ！　あゝ！あれは後甲板に照付ける日光だつた！　そら、そこに去年から見覺えのある二つの目が――何とまあ蒼い事だらう！　彼れは病氣だつたんだらうか？　いや、我々は昨年以來一度も逢はなかつたのだ！　さうだ、町に居ては中々逢へないからな、色々忙しいので！　學校から出て――それから家へ歸る！　難儀な冬であつたよ。子供達は痲疹にかゝるし……此處は風が吹いて寒いなあ、サロンの方へ降りて行かう！

又も、ソファーと椅子とを凝視する澤山の目。然しそれらの目は何れも幸福相だ、そして屹度やつて來るに相違無い或物を待受けながら、憧れて居る樣な目付だ。

彼れは席を離れて、顏を新鮮な風に吹かせる爲めに前甲板の方へと出て行つて見る。料理場の方からは煙と料理の匂がして來る、其處には料理女が坐つて、凉んで居る。それから大きな船室――卓布は前年と同じに眞白だ、飾臺は相變らずピカ〳〵光つてる、鏡の前の卓に在る花も同じ樣に活活として露もしたゝらんばかりだ、ランプも先年と同じ樣に眞鍮の腕金の中にゆら〳〵と搖れる、然し新しい。それは春の――いや自然の、物を若返らせる力だ！

開いた小さな窓の外を、海岸が長い帶の樣にスーツと通つて行く、或は人の心を脅す樣に暗く或は親しげに、明るい笑顏を見せながら――然し何れの場合にもほんとに新しく、そして永遠に若若しく……

× × ×

彼れはいやな夢に沈む――彼れは狹い、小暗い小路で兩側の家に挾まれて身體を潰されさうになる……彼れは或る井戸の底に居る……彼れは穴倉の中を這廻つて居る、そして外に出られない……胸の上に煉瓦を積み上げられた……と窓の鎧戸をどん〳〵叩く音で目をさました。彼れは跳起きる、然し室内は眞暗だ、彼れは鎧戸を上げる、と光と綠の海が彼れの前に在る。おゝ自然！ 有らゆる夢を超えたる現實。見よ、夢見る者よ、お前の腦は遂に斯くの如き物を夢見る事が出來なかつた、しかもお前は尙も冷たい現實と稱して之れを見くびつて居る。

朝の太陽が八月の景色を輝して居る。彼れはパンをポケットに押込んで、號角を肩から掛け、ステキと籠とを手にする――彼れは獵に出かけやうとするのだ――血を流さぬ獵に。

彼等ははりもみと榛の茂みの中を踏分けて行く、そこらは秋草の花が咲き亂れて居る――霜が來るまでは誰にも害せられぬ命を樂む爲めに、大鎌が過ぎ行くまで、日の光を見ずに待つて居た花共である。彼等は刈田の上を跋り、溝を飛超え、垣根をひらりと乘超えた、そして之れから岸の芝生の上で獵が始まるのだ。

蔓といちけた沼の植物とで織りなされた、短い草の牧場の上に、まるで生み立ての卵の如くに蕈類が散らばつて、腐れ果てる前にその使命を果す可く太陽の訪づれを待ち受けて居る。然し彼等の望みはもう達せられない、新しい使命――若くして死ぬべき新しい使命を得てしまつた後には！

それから此戰場を棄て、はりもみの林に入る、そこはテレビンの匂がする――健康と病室――よく云ふ通り、傷ける胸のバルザム……辿り行く森の下道は音も無い、然し、頭上二十ヤードの所はさわ〳〵する。一尾の雄山鳥が飛び立つて、梢をそよがす。こんな時には銃が有るといゝんだが！

何故人はいつも森の中で何の害も無い生物を見る時、銃が有つたらと思ふのだらう？ 此世に於ては、銃が有つても善い機會がもつといくらも有るのだけれど。

ほら、そこには車の道が――牛車の轍の跡が地中に深く食込んで居る、然しそれは猛毒を有つある赤い吐莖の種類が頭をもたげるのを妨げるまでには至らなかつた、彼等が顏を出して日の光を見る爲めには、恐らく頭に車輪の釘と、額に牡牛の一蹴とが必要であつたのだらう。

だん〳〵と森がまばらに明るく成つて來る、そして道は伐材區域で終つて居る、そこには根から掘返す事が出來ないので斧で切倒された森の巨人の殘骸が横はつて居る。然し切株が殘つて居て、

有らゆる種類の色と大きさの草の大群に取圍まれて居る。彼等は恰も死屍に群る蠅の如くに切株を包圍する、然し彼等は多く、容易に打勝ち得る樣な腐朽した切株に密生する、けれども彼等は餓切つて血の氣も無く蒼ざめて居る樣に見える、之等の草類はあの赤い吐草の如くに綺麗でも無く又毒をも有つて居ない、然し役には立つ。

又も森は小暗く成つた、そしてはりもみの樹の枝が地面の苔と接觸せんばかりに石を抱いて、そこに天然の涼しい四阿を作る——其中にはサフラン色の一種の草類が苔の褥の中から生ひ出でゝ、酷く日光と貪慾な昆蟲とに對して護られつゝ、短い命を樂んで居る。

地面が濕つぽくなつて來た。もとは瘋癲劑の原料として熱心にあさられたミーリカは土の隆起の間に過剩の爲めに枯死した灰色鬚の松の木の下に、平和に生長して居る。一疋の啄木鳥が木の上で一寸幹を突付いて見ては、それが果して空であるか否かを小首傾けてじつと耳をすます。太陽が又ぢり〳〵と照り出した、地面は石が多くなつた、森が又だん〴〵開けて來た、そして地の底から唸り聲がして來て、新鮮な風が横顔をサツと掠める、もう下枝の隙間から青い海がちら〳〵光り出して、新しい牡蠣の匂をはりもみの木の間から風が持て來る——それからもう五六歩坂を登ると——そら——海！　海！　陸は風が收まつて居るが、浪は斷崖にぶちあたつて跳ね返され、又も同じ勝負を繰返す可く、あたつては碎ける。

着物を脱ぎ棄てゝ海の底へ。彼れは一秒の後そこに何を見たか？　木が海藻の如くに赤く、空氣が海水の如くにエメラルド・グリーンなる別世界を——と見る間に彼れは又も浮んで、逆卷き狂ふ浪の上に在る、彼れは疲れ切つてしまふまで怒濤と喘ぎ鬪ひ、その背に身を横へる。すると怒濤は彼れを恰も九天の上まで投げ飛ばさんとするかの如くに上に持上げて、又も、奈落の底へ引入れんとするかの如くに闇黑の深淵に彼れを突落す。彼れは一切を諦め切つて最早何物をも望まない、何等の抵抗をも試みない、彼れの身體はその重みを失ひ、最早重力の法則に支配せられる事も無く、水と空氣との間に漂ふ——それは何等の感覺も無き絶對の靜寂境である。

彼れは浪に漂つて淺い砂濱に打上げられた、そこには岩の狹間に一の廢物置場が出來て居た。そこには海が遂に海底に呑下し得なかつた有らゆる廢物を蒐集して、之れを分類し、洗濯し、磨き上げたのである——碎かれた櫓、コルクの群れ、樹の皮、管笛、桶板、箍等。そこに彼れはどつかと腰を下して、こはれた船の板をじつと眺めた。

入海の端れの島も通り過ぎ——
風の上下鳴りはためく——

帆の下綱を弛ませて、」
今や大海原に乗出す。

船の立骨は搖れる、唸る、』
帆は今姿を現して、
綠の波を渡りつゝ、
蒼き天空の眞只中へと。

搖らぐ立骨から彼れは眺める、」
果も知られぬ周圍の海原を。
彼れは何物かに其目を休めんとするが、』
目を止む可き物何處にも見出されない。」

疲れたる彼れの目は迷ふ、
彼れの視線は遠くへ及ばず。

と、遙彼方に何物かを見る——
一の小點、さまよひつゝ、光りて。」

逆卷く浪の上を彼方へ遠く
よろめきつゝ尾を曳く、
灯を逃れんとして、
灯に誘はれる夏蟲の如くに。」

其れは一疋の胡蝶、
大洋の眞只中に唯一つ——
彼れは自由を憧れ求めて、
然も飛んで自ら墓穴に入る。

然も前へ〈と運命の如くにひた進んで、』
一瞬にして姿は見えず。

彼れは靑み渡れる雲の中を見入る、」
然しそこには最早影も無い！

×　×

小石多き毒人參一つ立つ。
肉太き毒人參一つ立つ。
根元に一疋の蝮うづくまつて、
日光に灼かれつゝ睡る。

一疋の蜂は花の中に唸つて
花粉を浴びつゝ蠢く——
兒等の爲めには蜜を吸ひ、
刺の爲めには毒汁を集める。

×　×

大横帆の綱を張れ、

風は今眞面に吹付ける。
面紗はひら〳〵と飛び
髪の毛のそよぐにもそれと知られる！

こゝマストと帆綱の間に
靑くひらめくお前の面紗は——
蒼空の一片、又は
一つの靑波を見る思ひする。」

初めて其れを見た日より
既に十年の年月は流れた。
其間には大きな爭も有つた、
然し愛は矢張りより强かつた！

暑く、蒼ざめた六月の或る日、

所は女王街で、
ゆくり無くも二人はめぐり逢つた。」
往きかひ繁き、狹き歩道の上に。

間も無くお前の姿は飾窓の前を
つと人波に消えてしまつた、
小さな靴の足音と
衣ずれの音も遠ざかつて。

道行く人々の帽子と傘の上を
あの青色の面紗は流れた、
と見る間に、人波に沈んで行つて、」
おもむろに呑込まれてしまつた。

然し私は、私は又も其れを見出した。」

さながら細長き旗旗の如く、
嵐の海に乘出す毎に、
檣頭高く其れを揭げた！

お前のひら〳〵する青色の面紗は
今でも矢張り青いね。
其れはあの日の物と同じ品では無いだらう、」
然し私にとつては、矢張り同じ品だ。

いざ、大横帆の綱を張れよ、
海は荒れ、浪は湧立たんとす。
我等は如何なる嵐も恐れず、
されど幼き兒等家に待つ。

彼等は、雨が降續いたので、一週間閉籠つて居た。彼れは窓際に席を占めた、何故なればそこに

は、古びと日光との爲めに、黄に、綠に、紅に染まつた窓硝子が有る、そしてそれを通して灰色に
どんより曇つた海の面を眺めると、そこには太陽の輝きが有る、灰色の鷗岩は赤く見える、空氣は
黄色に見える、樹木の色はエメラルド・グリーンに見える。そして此面白い窓硝子越しに變な工合に
覗き込むと、空中にさながら虹の如き七つの色彩を見る事が有る、すると彼れは、間も無く天氣に
なりさうな氣がして嬉しくなるのだ。

遙彼方に、他の島々よりもうるはしく眺められる一つの小さな島が有る――はりもみの木は密生
し崖は蒼く岸には葦が生えて居る。彼れの憧れは今其島へと飛ぶ、其處からならば屹度汪洋とした
大海原を見渡す事が出來るに相違無いのだから。

……と再び日光があか〳〵と輝き出した。彼れはボートを漕出して、帆を高く張つた。小舟はゆ
ら〳〵する浪を渡つて行く、そして海峽は今迄よりも廣くなつた、然しあの綠の島は未だ遠くの方
から彼れを招く。それからだん〳〵近くなつて、遂にボートはさら〳〵と囁き交す蘆の茂みの中へ
と分入る、そして彼れは上陸する。

彼れの夢は實現せられた。樹木と懸崖の間に唯一人、海を目の前に、無限に青い大空を頭上に――
――邪魔な人間の存在を裏切る何の物音も無く、水平線には一の帆影をも止めず、岸に立てる一軒の
小屋さへも見えない。孤獨を愛する一羽の千鳥が、人影に驚き立つて、不安らしく、助けて――助

けて――と叫ぶ。母を先頭にした一隊の鷺もびつくりして　恐る可き人間から免れる爲めに水の上
へと逃げて行く、一疋の灰色の蝮蛇はうね〳〵と身をくねらして石のはざ間を走る細流の如くに身
をかくしてしまふ、鷗共は此闖入者を見る爲めに大勢連立つてわざ〳〵やつて來たが、まるで赤兒
の樣にギャー〳〵鳴わめいて飛去つてしまふ。と一羽の烏がこんもりしたはりもみの木から飛んで來
る、そしてばた〳〵翼ではたきして、叫んで、脅して、泣いて、又も遠い洲の方へと飛去つた。
かくして有らゆる生物が悉く、人間を逃れて來た此人間から逃げて行つてしまつた。

彼れは砂濱をさ迷ふ。そこに松の木の骸骨が横はつて居る、海に眞白く晒されて、日に蒼白く染
められて。それはまるで龍の骸骨の如くに横はり、その肋骨の間には赤紫色のリトルムの花と金色
のリシマキアの花が開いて居る。打棄てられた螺旋貝は一本のえぞ菊のまはりに堆積して、此淋し
い植物は貝殼の塚墓の上にその生を送る、そして、かのこ草は惡臭を放つ海藻の床に匂ひつゝ繁茂
する。

彼れは海岸を去つて、再びはりもみの林の中へ入る。木が蟲々とそゝり立つて居る、少し眞直過
ぎる位にすく〳〵と――然し彼れは木々の間から海を望む、海――孤獨、自然――然し地面は非常
に平かである、恰も人間の足に踏みならされたかの如くに。そこには一つの切株が有る、して見れ
ばそこには曾て斧が有つたのだらう。そこにはいら草が生えて居る、して見ればそこには曾て人間

が居た事が有るに相違無い、何故なればいら草といふ奴は必ず人間に附いて廻るもので、人間を離れて人迹絶えたる森の奥や、平原の眞中などには決してひとりで入つて行かぬものである。それは恰も人間に寄生する害蟲の如きもので、唯人間に依つてのみ養はれ、唯人間の在る處にのみ生長する事が出來るものである。それは屆き得る限りの有らゆる塵や芥を、毛の生えて居る、粘つた葉に集めて、人が觸れゝば之れを刺す。——罪に依つて養はれる不思議な種屬！

彼れは尙も進り進む。一羽の雀——流しと後庭の隣人——塵埃の中に愉快を感じ、汚物の中に浴して居る鳥——翼を用ゐなかつたら鼠になつてしまはなければならぬ鳥——人間の耳に犬骨を折る鳥！　若しこゝに人間が住んで居ないとすれば、一體彼れは何を食つて生きて居るのだらう？　いら草の種でも食つて？

もう四五歩進んで、彼れは靴の痕を發見した、それは勞働の爲めに歪んだ大きな足がどしり〳〵と重々しく踏んで行つた樣な大きな足跡だ。木々の間に石で疊み上げた爐が、自然の克服者を祭る祭壇の如くに立つて居る、それは彼れが力に對して犧牲を捧げた場所だ。火は早く既に消え失せて居るけれど、その名殘はまだ見られる。地面は動物の蹄を以てせるかの如くに掘返され、木の皮は剝がれ、崖さへも碎かれてある。彼處の山には汚い、褐色の水を一杯湛へた巨大なる井戸が見える。のみならず、人は大地の內臟までも露出せしめて、その碎片をば、その意志を滿足する事の出來なかつた、或は求むる物を見出し得なかつた惡戲小僧の如くにあたりに散亂せしめてある。然し、山の一片は削り去られてある！　それを人は、長晶石を陶器工場へ船で運ぶ時に、一緒に持つて行つたのだ、そして、最早持つて行く物が何も無くなつた時、人は再び歸つては來なかつたのだ！

彼れは此荒廢の址から逃れた、そしてその歩みをボートの方へと向けて降りて行つた。

砂上の足跡！　彼れは呪つて逃れんとした、然し其時彼れは自分自身を呪つた事に氣が付いた、そして何故に先刻鷗や蝮や其他の者共が逃げて行つたかを了解した、そして彼れは再び自分の足跡を辿つて行つた、彼れはどうしても自分自身から逃れる術は無かつたから。

彼れは望遠鏡を取つて、彼れが渡つて來た海面の方へとそれを向けた。彼れは櫂の木の下の白い着物とそれから青い被覆とを見た。彼れはボートに乘込んで、火酒とパタパンとを取出した、そして橈を握りながら思つた。——お前が望む有らゆる物を、人生が與へ得る最も善き物をすべて得たお前が——何故お前はそれでも不滿なのだ？

十一

遂に我々の家から有らゆる女友達が一掃せられてしまつた。

一番後に出來た美しい女友達は、私の最も善き友達なる有名な學者と一緒に去つてしまつた、其男は四つの勳章と將來の位置の保證とを得て或る探檢から歸つて來たのであつた。其美しい人は宿が無かつたので私の家に住んだ、但し下宿料は拂はずに。彼女はうまく機會を捉へて、一年前から止むを得ず獨身生活をして居る其の可哀相な男に齧り付いた。彼女は何處かへ彼れを連れて行くといふ口實で或る暗い夜馬車を雇つて、其中で彼れを誘惑してしまつた。そして二人とも招待せられた第三の家で公衆の面前に醜態を演じて、彼れを餘儀無き結婚に强付けてしまつた。もう大丈夫と見て取ると、彼女はいきなり假面をかなぐり棄てた。或る集會で彼女は酒に酔拂つて前後を忘却しマリアを墮落女呼はりした。すると其場に居合せた一人の友達が、忠義振つて、早速それを私に告口したのだ。

それは全然身に覺えの無い濡衣だといふ事を證明するのにマリアはたつた三つしか文句を要しなかつた、そして私は以後其婦人に私の家の扉を鎖してしまつた、其爲めに私は其學者との友誼を喪

はれ、大切な友人を一人永久に失ふ事になつてしまつたけれど、それも止むを得なかつた。

私は其女がマリアを罵つたといふ其「墮落」といふ言葉の意味を追及して彼女の非行を何處までも詮索しやうといふ程の好奇心も持つて居なかつた。然し其言葉が血の滲み出して居る私の肉に一本の刺を殘した事は事實であつた。其不潔な女がマリアに浴せた侮辱の言葉は、彼女がフィンランド旅行中の怪しい生活をあてこすつて居るのであつた。すると私の古い疑惑が又も頭をもたげる——歸宅後間も無くの流產、運命に就いての彼女の變な話、旅行前には無かつた樣な身の委せ樣……すべてが私に逃げ出す決心を堅めさせた。

マリアは如何に病詩人を利用すべきかを發見した、そして自らを心やさしい妹となし、看護婦となし、若し必要の場合には、精神病患者の番人にもなつた。

彼女は自ら殉敎者の冠を編む、私の目の見えない所では氣隨氣盡の振舞をして、遂には、私の名前で私の友達から金を借り出す樣な事をさへも敢てする。同時に家の中から貴重な家具類が見え無くなる、それは彼の第一號の山師女の許へ運ばれて、その手で賣拂はれるのだ。

それらの總べてが遂に私の注意を喚起するに至つて、私は初めて不安な問を自ら發した。

『マリアは祕密の支出を持つて居るのだらうか？　それで彼女は色々の品物をこつそり賣却する必要が有るのだらうか？　それであの莫大な世帶の費用を要するのだらうか？　若しさうなら、何の

目的の爲めに！……』

私は今シュウェーデンの國務大臣と同じ程の收入を得て居る。シュウェーデンの陸軍大將なぞよりは餘程多いのだ、そして、それにもかゝはらず私は、まるで足に鉛の彈でも結び付けられた樣なみじめな生活をして居る。我々の暮しと云つたら、實に簡素なものだ！　食物なぞは、普通の小市民の食つて居る樣な不味い料理で、時には到底食ふに堪へない事すらある。私達は勞働者の飲む樣な飲料を、ビールとブランデーとを飲んで居る、稀に飲むコニャックと云つたら、客が不平をこぼす程にひどい代物だ。煙草と云つても、私は只パイプを吹かすばかりだ。自分の慰みと云つても、たまに友達と氣拂しの爲めに何處か一寸した所で夜を過す位のものだ、それも一ケ月に一回位。

到底堪へ切れ無くなつた時唯一度、私は此疑問を探究しやうと試みた。私は或る經驗深い婦人を捉へて相談をしかけて見た。我々の世帶の入費はあまりかゝり過ぎはしないだらうか、と訊ねて。その總額を擧げて聞かせると、彼女はいきなり笑ひ出して、まるで狂氣の沙汰だと云ふ。

だから私はマリアの何か特別な、祕密の支出を信ずべき理由を持つて居る。然し一體何の爲めの支出だらうか？　親族、叔母、友達、情夫――其等を殘らず彼女は養つて居るのだらうか？　誰が亭主にそんな事を打明ける者が有らう？　みんなが寄つてたかつて、姦通の共犯者になつて居るのだ！……

それからそれへと限無き準備の後に、遂に出發の日が確定した。すると兼ねて豫期して居た樣な新たな困難が持上つて、例の情無い場面がそれからそれへと連續して行つた。犬がまだ生きて居るのだ。私は現に之れまで此奴の爲めにどんなに惱まされて來た事であらう！　特に女達が子供等を閑却して、此奴にばかりかゝり切つて居るのは、私には到底我慢が出來なかつた。

其間にマリアの偶像で、私の惡靈で、老ぼれて、膿みたゞれて、臭い匂がする此たまらない畜生が、私の非常な歡喜の下に、その命を終へる瞬間が遂にやつて來た。今度はマリア自身も此動物の死を願ふに至つた、然し、犬が居無くなる爲めに私がどんなに喜ぶだらうといふ事を思ふと、彼女は腹が立つのであつた。そして此犬問題をずる〳〵に引延して行つて、私の此願つても無い幸福を成るべく高價に拂はせる爲めに新しいいぢめ方を案出した。

彼女は先づ犬の爲めに別れの盛宴を張つて、斷腸の場面を演出した、そして一羽の鷄を屠り、私は未だ病身であつたので、その骨を私に與へた、――それから彼女は犬を携へて町へ――我々は其時田舍に居たので――出かけて行つた。

彼女は二日間家を明けた後に、「殺戮者」に向つて云ふ樣な冷淡な言葉で歸宅の時刻を知らしてよこした。私は六年間の苦行の後に遂に解放せられた幸福に醉ひつゝ、彼女を迎へに汽船へ出かけて行つた――無論彼女一人で來る事と思ひながら。彼女は私をまるで毒害者を迎へる如き態度で迎へ

目には一杯の涙を湛へて、私がキッスしやうとすると、いきなり突飛した。彼女は不思議な格好の大きな包みを携へて居て、まるで葬式にでもついて行く人の樣に、さながら葬送の曲でも聞えるかの如くに、調子を付けた歩調で進行する。

其包みの中には犬の死骸が入つて居るのだ！　あゝ神樣！　未だ之れから葬式といふものが有るのだ――運命の最後の打撃が！　一人の男は棺を作り、二人の男は墓穴を掘る。私は成るべく此騒から遠ざかるやうにして居たが、遂に此虐殺せられた者の埋葬に参列すべく餘儀無くせられてしまつた。實際たまらなかつた！　マリアは強ひて心を落付けて、此無辜の犧牲とその殺戮者との爲めに神に祈禱を捧げた。それから衆人の哄笑の中に彼女は墓の上に十字架を立てた――それは實に遂に私を此怪物から釋放してくれた救主の十字架である――尤もあの怪物だつてそれ自身には何の罪も無いのであつた、只、明らさまには夫を苦める事を敢てしない女の悪意の化身として初めて恐しいものになつたのである。

我々は深い喪に籠つて數日間を送つた、其間彼女は、私にキッスを與へやうともしなかつた、何故なれば彼女は毒害者をキッスしやうとは思はなかつたから。――それから我々はパリへ向つて出發した。

第四部

一

私は旅行の重なる目的地としてパリを選んだ、何となれば私は其處では私の奇嬌な性實を熟知して居る舊友等に逢ふ事が出來る、私の移り氣を理解し、私の空想を知り、私の大膽を愛して、彼等の詩人の瞬間毎に移り變る心境を批判し得る、心置無き友達に逢ふ事が出來る。それに、其頃パリには第一流のスカンデナヴィアの詩人達が住んで居た、それで私は彼等の保護の下に身を置いて、マリアの惡企みに對抗しやうと思つた、彼女は成るべく私を癲狂院にでも投り込んでしまひ度い氣で居るのだから。

旅行中にもマリアは決して武裝を解かなかつた、そして誰に遠慮も要らないので、私をいよ〳〵輕侮すべき人間として取扱ふに至つた。彼女は常に何か思に沈んで居る、其目は何を見るとも無くぼんやりして、何に對しても冷淡である。滯在しなければならなかつた町々では、見物の爲めに彼女を引張廻しても見たが、何んにもならなかつた、彼女は如何なる事物にも興味を感じない、何んにも見やうともしない、私の言ふ事にさへ殆ど耳を傾けない。私が彼れこれと彼女の爲めに心遣ひするのが彼女にはうるさくてたまらないのである、彼女はひたすら何物かに憧れて居るらしい。然

し一體何物に？　彼女が苦患を受けた國、一人の友をも殘しては來ないあの國――然し恐らく一人の情人と別れて來たあの國を憧れて居るのだらうか？

それに又彼女は旅行中、有らゆる女の中でも最も非常識的にして世間に通ぜぬ、最も教養の足りない女の如くに振舞つた、そして彼女自らが常に誇とした組織や管理等のより高い特性を實は一つも持つて居ない事を私は發見した。彼女は何處へ行つても必ず第一流のホテルに案内させて、たつた一晩の宿泊にもかゝはらず、家具類を殘らず置換へさせた、お茶の出し樣が惡いと云つてはわざわざホテルの主人を呼付けた、廊下でひどくやかましい音を立てゝは、他の客から苦口をきかれた。食事の時間迄床の中に溫もつて居たい彼女の爲めに一番便利な汽車に乘り遲れた、彼女の不注意から荷物が他のステーションへ紛れ込んでしまつた、そしてホテルを立つ時には、彼女は給仕に一マークの祝儀をふりまいた。

私がそれに對して何か口を出すと、

「あなたは臆病なのよ！」と一言の下に跳付けてしまふ。

「そしてお前は下品でだらしの無い女か！」

いやはや、結構な氣保養の旅であつた！

× × ×

我々がパリに到着して、彼女の美には迷はされない友達の中に入ると、彼女は俄に私の方が優勢になつたのに氣が付いた、そして自分は係蹄（わな）の中にでも突落された樣な氣がし出した。彼女を最も腹立たしくしたものは、私に非常な好意を寄せて居る或る第一流のノールウェー詩人と結んだ友情であつた。彼女は無論其詩人を憎んだ、彼れの賞讃の言葉は他日私に幸して私の文名を揚げさせる事になるであらうから。（註――之れは、我より十七歳の年長なるビヨルンソンである。）

或る晩美術家と文學者の會食の席上で、彼のノールウェーの有名な詩人は、私を近代シュウェーデン文學の巨頭と呼んで乾杯の辭を述べてくれた。其時私の可哀相なマリアもそこに居合せた、あの「評判の惡いパンフレット屋」と結婚するの不幸を見た殉教の女が！　列席者の大喝采に依つて私の名譽が絶頂に達した時のマリアのしよげ樣と云つたら、そゞろ私の同情を惹起した程であつた。それから此詩人が、少くとも二ケ年間はフランスに滯在するといふ約束をどうでもさせやうと私に迫るに至つて、私は最早妻の苦しげな目付きに抵抗する事が不可能になつた。彼女の心を慰め、彼女の落膽をいくらか勵ましてやる爲めに、私は、我々の結婚生活に於ては、重要な事柄は必ず夫妻二人の相談に依つて取決めるのですと答へた。さう云ふと、マリアは再び溫味の有る目付を見せた、そし

て私は此言葉に依つて其席に連る婦人達の好感をかち得た。

然し私の友達はたやすく私を逃さうとはしない。彼れはどうあつても私の滯在を延期しろと云張つた、そして演說家らしい雄辯を以て、彼れに贊成するようにと一座の人々を煽動した。すると一同は彼れの提議を支持する爲めにその杯を擧げた。

私の友達の執拗な勸告振は如何に說明す可きものであるか私には到底解し兼ねたといふ事を私は玆に自白しなければならない、尤も、私の妻と彼れの間には、私には原因の解り兼ねる一つの暗鬪が戰はれて居たといふ事は、當時私も知つて居た。此人は多分私よりもよく內情に通じて居たのだらう、そして第一印象を導く慧眼を以て、疑も無く私の祕密を洞察したものであらう、そして此詩人自身が頗る怪しげな評判の夫人と結婚して居た。

それは私には今以て明にする事の出來ない一つの謎である！

マリアは自分の夫の價値が汎く認められて居るパリでは居心地が善く無い、それで、三ケ月の滯在の後彼女は此大都會を嫌ひ出した。「何時か一度は屹度私に對して禍をもたらすに相違無い惡友共に」を警戒するやうにと、彼女は私を戒めて止まなかつた。

又も彼女に姙娠の徵候が現れ出した、そして地獄が再び我々の眼前に展けた。

然し今回は私は、生れ出づ可き子の眞の父たる事を自ら疑ふ事は出來なかつた。私は受胎の日を

あの時と推定する事も出來た。のみならず其の瞬間の些細な事に至るまでもはつきりと記憶の中に呼起す事が出來た。

それだけでも澤山では無いか？

あの富有な若者が、人生の謎を體驗するには何を爲す可きか、といふ問をイェズスに向つて質問しなかつた、といふ事はそんなに惜しい事では無かつた。何となればイェズスは、若し此質問を受けたとしても、彼の幸福に就いての質問に對する答へと同一の言葉を繰返すに過ぎなかつたらうから。

――『往きて、汝の持てる一切の物を賣れ、而してそれを貧しき者に與へよ。』だから此質問の必要は無かつたのだ、其富める若者が此イェズスの敎訓を自ら實行しなかつたといふ事は惜む可き事であつた、分けても、彼れが一八八五年の六月のパリの灼付ける樣な酷熱の日を見ず、又、此日六十歲の靑物賣りのあはれな姿と成つて、間歇的に襲ひ來る餓と寄る年波に打ふるへる聲も悲しく――

水芹や、水芹！

身體のおくすり！

一束四錢！
一束四錢！

と絶え間無くふれながら、アヴェニュー・ドゥ・ヌイーを手車重く押して行く身と成らなかつた、といふ事こそ惜しかつたのだ。

彼れは左手の並木途へと曲つて行つて、戸毎々々に立止つた、然し何處の家でも番人の女が首を振つて見せた、既に朝早くもつと丈夫な若い者がこゝらを廻つて、今日要るだけの物は殘無く賣付けてしまつた後であつたので。彼れはやつとポート・メーヨーまで辿り付いて、一見果ても無くセーヌ河まで降り續いて居るアヴェニューを見下して見た。彼れは黑木綿の帽子を脫いで、青い勞働服の袖で額ににじむ汗を拭つた。もう引返して左側に入らうか、それともまたいつそパリ市中へ入つて行つて運試しをして見やうか——明日も此手車を引ずつて來る元氣を得るに必要な僅ばかりの金を儲けるといふ素晴しい幸運を冒險して見やうか？　最後のフランを入市稅に拂つてしまつて、のるかそるかの運試しをやる爲めに、知られぬ運命に向つて猛進して見やうか？　さうだ——彼れは此投機的冒險に誘惑せられて、思ひ切つて入市稅を拂つた後、アヴェニュー・ドゥラ・グランド・アルメエに添うてとぼ〳〵と辿り行く。

太陽は高く登り、鋪道の敷石は未だ昨日の熱が冷え切らずにほてつて居る、美しい街々はまだ寢

室の空氣の樣な匂が立ちこめて、寢室の開いた窓から街に流れ出した甘酸ぱい空氣をゆるがす程の風も無い。窓側で打はたく敷物から立登る濛々たる塵埃は太陽に照されて金粉の如くに飛散する、公衆便所は曲馬や見世物の新しいびらに輝き、息詰る樣なアンモニアの臭氣を洩す。葉卷の吸殼や、煙草の唾や、馬糞や、蜜柑の皮や、和蘭三葉の葉や紙片等が、大きな鐵管から迸り出て一切の物を下水溝の格子の方へと流し去る大きな水の流れの中から浮出して居た。

老人は嗄枯れた聲を振絞つてふれ歩いた。けれども其聲は乘合馬車や荷車の轟音にかき消されて誰一人呼止めやうとする者も無い。今はぐつたりと疲れ切つて見棄てられた如くに、彼れは篠懸の木蔭のとあるベンチに腰を下した。然し太陽は埃だらけの木葉を透して目ざとくも彼れの姿を見付けてその彼方此方にきだらな光を投付ける。此疲れ切つた老人には、太陽の光が如何に悲しい事であつたらう——彼れは今出來る事なら直ぐに空一面をかき曇らしてしまひ度かつた、そしてさつと降そゝぐ夕立に此堪へ難い苦熱を洗ひ去つて貰ひ度かつた、それで無ければ今にも彼れの神經は力を失ひ、彼れの肉は干からびてしまひさうであつた。

然し此たまらない苦熱の中からも飢餓の苦みと明日を如何にすべきかの不安が頭をもたげる。彼れはよろ〳〵と起上つて再び棍棒を握りしめ、嶮しい坂路を凱旋門の方へと喘ぎ〳〵登つて行つた——聲もうら悲しく『一束四錢！』と叫び續けながら。

最後の町角で一人の裁縫女が初めて二束を買つてくれた。

それから彼れはシャンゼリゼーの通りを行く、そして、人生の目的に就いて思を凝す爲めに英人の馭者の後に坐つてブーローニュの森をさして馬車を走らせる一人の金持の家の息子に出逢ふ。大きな邸宅や大きな料理屋では彼れを振向いて見やうともしない、太陽はぢり〳〵と彼れの車に積んだがらしを焦し始める、そして花椰菜は長い、青い耳をぐつたりとうなだれてしまつたので、彼れはロンポアンの噴水迄來ると車上のしをれた青物に水を注ぎかけてやらなければならなかつた。

彼れがコンコードの廣場を横切つて埠頭まで辿り着いた時には、もう正午に近かつた。カフェーの前の歩道では大勢の紳士達が午餐を食つて居て、中にはもうコーヒーを飲んで居る人も有つた。彼等は何れも充足りて居る樣に、然し又此世の存在を保つ爲めには悲しい苦しい義務を盡さなければならぬかの如くに心配相に見えた。然し老人は之等の人々を幸福な人間だと思ふ——彼等は少くともこれから食後六時間を生きて居る事は出來やう、然るに彼れ自身に至つてはその生命が刻々にまるで乾からびた林檎の如くにしなびて行くのを感じた。

車はポン・ヌーフをがた〳〵やつて行つた、道に在る程の有らゆる石が意地惡くも車輪にぶつかつて軋る樣な氣がした、そして疲れた腕の肉も神經も其度毎にふる〳〵慄へ上つた。彼れは朝から何も食ひもしなければ飲みもしなかつた、そして彼れの聲は肺病患者の如くに弱り細つて、あはれなふれ聲は、今や呼吸困難の爲めに力無い溜息と共に、救ひを求める叫びの如くに聞えるのであつた。

シテーの方へ折れ曲つて、クェー・ド・ロールロジュに木蔭を求むべく辿る頃には、足は燒けほてり、手は慄へ、脊髓がとろけてしまふかとばかりに背が熱く、稀薄な血液が額にどきん〳〵と脈を打つた。プラス・デュ・バルヴィの酒屋の前に立止つて、彼れはポケットの僅ばかりの銅貨をいつそ一杯の酒に換へてしまはうかと餘程思つた。それから彼れは氣を引締めて、又もノートル・ダームの前を通り過ぎて、屍體陳列場の方へとぼ〳〵と行つた。

多くの人生の謎が解かれてゐる此神秘的な小さな建物の前を、彼れは立寄らずに通過する事が出來なかつた。その内部は如何に冷たく、美しいだらう——そこには死骸が、富める若者の如くに大理石板の上に横はつてゐる、そして凍付いた髪や髭の霜が、美しい冬の日に於けるが如くにキラ〳〵と光つて居る。之等の屍の或者は今尙不快の表情を止めて居た、肺の中に水を詰込まれたり、心臟や腹の中に短刀を突込まれたりするのはあまり氣持の善い事では無いに相違無いから。中にはまた、もう萬事終つてしまつた事を喜ぶかの如くに微笑をさへ死顏に浮べて居る者も有る、或る者は、どうでもいゝよと云つた風に平氣な顏をして横はつて居る——善かれ惡かれ問題は解決せられてしまつたのだから。もう着る物も、食ふ物も、住む家も、何も要らない！　悲も無く、憂も無い。彼等は皆人生の最貴重な物を獲得してしまつたのだ——貧困にも、凶作にも、病氣にも、死にも、戰爭

の悲慘にも、アメリカの穀物にも、さては賃銀に關する嚴重な法律にも、最早亂さるゝ事無き絶對の安靜を掴んでしまつたのだ。夢無き睡――如何に平穩無事なものだらう、醒むる事無き睡り――何といふ素晴しさだらう！

此老人はたしかに彼等の身の上を羨んだに相違無かつた、何故なれば彼れは立去り際にもう一遍振返つて、大きな硝子窓の蔭に涼しく睡る幸福な人々の方をじつと見詰めたから。

それから彼れは大寺院の他の側へ行つて、正面の入口に立止つた。彼れはそこに居た聖物賣りへ一寸自分の車を見てくれるやうにと頼んでから、內部へ入つて行つた。彼れは先づ右手を聖水に浸して顏や脣を冷した。大伽藍の內部はひや〳〵して、太陽もステンドグラスの窓を通してはさし込んで來ない。たつた今顏を剃つたばかりで靑い肌には未だ白い粉がくつ付いて居る樣な一人の小柄な僧が說敎壇に立つてしやべつて居た、老人はそれに耳を傾けた。

『野に花咲ける百合を見よ、彼等は縫はず、紡がざるなり、然も、サロモが有らゆる榮華の極みに於てすら、なほ其花の一つにだも若かざりき！　又、空飛ぶ鳥を見よ、彼等は蒔かず、納屋に集めず、然も我等が天の御父彼等を養ひ給ふ。汝等の彼等にまされる事そも幾何ぞや！』

『我等の彼等にまされる事そも幾何ぞや！』――老人は溜息を漏す。

『先づ神の御國とその正義とを求めよ！』其僧は尙も續ける。『然らば一切の他の物は招かずして自ら汝に來らん。』

『一切の他の物！』と老人は歎聲を發する。『一切の他の物！　先づ神の御國で、それからが一切の他の物か！』

と、御堂の脇側の一本の柱にもたれて、一人の富める靑年が一冊のベーデカーを手にして立つて居る、そして過去の建築物に於て人生の因果關係と本質に就いての思索をめぐらさんと努めて居る。彼れは神の御國を信じない、然し彼れは人生の目的に就いて瞑想を凝す、而して人間は何故に七十歲、或は高々八十歲の老人と成るまで徒に時を消さんと努めて居るのか、其理由を解する事が出來ない。若しそれが禮を失する振舞で無かつたならば、此靑年は彼の老人の側へ駈け寄つて、既に此世に生く可き期間を過ぎ去れる此老人に向つて、かうも問ひ掛けたのであつたらう。――

『私に人生の謎を敎へて下さい！』

そして若し此老人が斯くも飢渴の爲めに困憊し果てゝ居なかつたならば、かうも答へたであらう。――

『私が之れまでに解き得た人生の謎と申す物は、私にとつては、生活の維持といふ事で御座いました。』

すると富める若者はいぶかしげに訊ねる。

『たゞそれだけですか？』

『たゞ？　それだけで澤山ではありませんか？』と老人は云ふ。『たゞ？』

『私共はどうもお互に意志が疏通しない樣ですね！』と富める青年は云ふ。

『左樣です、私共はお互に意志が疏通しないのです。』と老人は繰返す。『私共はお互に意志が疏通しないのです。』

『あなたは只自分自身の爲めばかりに生きたエゴイストだからですよ。』と富める青年は云ふ。『然し人類、人間の種族……』

『いや、あなた！』と老人は答へる。『私だつて矢張り人間の種族の爲めに生きて來たのです、私は子供を四人育て、教育もしましたからね。之れはどうしてもあなたが持つて居なさる問題よりは解き難い問題だらうと思ひますがね——あなたの所謂問題の解決なら何處の本屋へ行つてもちやんと出來上つたのが買へますからね。ねえ、あなた、行つて、あなたの持つてゐる一切を悉く賣つてしまひなさい、そしてそれを貧しき者へ御與へなさい、そしたらあなたは初めてお解りになるでせうよ——人生といふ物には其他の何かを容れる餘地が有るものかどうかといふ事がね！』

然し此富める青年は、むしろ此問題を未解決のまゝに殘して置いて、その富を保有せん事を欲した、故に彼れは携へたベーデカーを讀み續けて、貧しき青物賣りの翁に人生の目的を問ふ事を爲さなかつた。

然し亂されざる信仰を持つ老人は、『明日の爲めに思ひ煩ふ事勿れ！』といふ彼の僧の慰多き言葉を抱いて寺院からよろぼひ出た、そして再び手車の棍棒を握つて、左岸の方へと降つて行つた。ブールヴァール・サン・ミシェルの曲角で、彼れは十二錢ばかりの青物を値段をまけて賣る事が出來た。それから尙も進んで、彼れはリュー・ボナパルトの方へと折れて行つた。それは午後、一日の中の最もうら悲しい午後であつた——太陽は沈みかけて居る、然し黄昏は未だ疲れた人々の心を安らかならしむべく降りては來ない——人々は苦しい夢と思出に入る前に、今しばしの時を休んだり樂んだりし度いと思つて居るのだけれど。

彼れはとある石段に腰を下して、ポケツトの錢を數へて見る。八十サンテームは、彼れが町の入口で拂つた一フランよりもまだ二十サンテームだけ不足である。どうしてあの畑の持主に仕入れの六フランを拂ふ事が出來よう、どうして食つたらいゝだらう、どうして飲んだらいゝだらう、そして、晩までにどうしてシュレスタへ歸つたらいゝだらう？　彼れは目の前に、果ても知らぬシャンゼリゼーの通りと、長い〳〵アヴェニュー・ドゥ・グランド・アルメェと、恐しいヌイー・アヴェニューとを見やつた。默目だ、歸つて行くにはあまりに遠い、あまりに遠い、あまりに遠い！

彼れは何物かを求めんとするかの如くに、あたりを見廻す、すると彼れのしよぼ〳〵した目は、

街の向側に在る藥屋の青や赤のガラス壜が日光にきら〳〵光るのに眩まされた。そこには色々の大きさの壜や箱が棚に一杯並んで居る――消化不良に用ゐる藥、食慾不振に對する丸藥、「人生の目的」に就いてあまり瞑想を凝し過ぎた爲めに熱した頭に用ゐる散藥、人口過剩及び貧窮增進の豫防藥、社會問題解決者の用ゐるといふ偏頭痛藥、夜遊びする者の爲めの顏料、神經を病む者と經濟的に獨立せる者の爲めの錠劑等何も彼もそこには有つた。

老人は誰かに呼ばれでもしたかの如くに立上つて、づか〳〵と藥屋へ入つて行つた。

『どうぞ阿片エキスを十三錢ばかり下さいな！』と彼れは云つた。『嗅が痙攣で弱つて居るんで。』

自分の言葉を確めんとするかの如くに、彼れは自分の右手を擧げて、第二指にはまつて居る筈の指輪を店の者に見せ、自らも見やうとした。然し其指の蒼色の皮膚には一筋白く凹んで居る輪の痕が見えるばかりであつた。

然し、これもお客を待つて居たらしい藥屋は、そんな物を見やうともしないで、小さい壜にそれだけの液體を充し、貼紙を舐めて、コルクをして、金を受取ると其まゝ再び藥學の本を讀みにかゝつた――おれに何の用がある、と思つてでも居るかの如くに！

老人は其壜をポケットに入れてよろめき出て、又も車の梶棒を握つて、町を少しばかり登つて行つた。それから彼れはとある本屋の前に佇んで、彼れ自ら最早信じても居らぬ幸福を試して見んとするかの如くに、今一度最後の聲を振絞つた。――

一束四錢！

一束四錢！

まるで誰か買手に呼止められるのを恐れてでも居るかの如くに、彼れはあわてゝさつきの小壜を口にあてゝ、燒付く樣な渴を癒さうとでもするかの如くに、赤黑い液體を貪る樣にごく〳〵と飲下した。と、彼れの瞳は恰も太陽の中を見入りでもしたかの如くに收縮した。烈しい紅潮がさつと頰に上つた。膝がくづをれた、そして彼れは溝の緣に倒れた。最初、深い睡りにでも落ちた樣な鼾が聞え、顏には冷汗が玉の如くに滲み、肆のあたりがひく〳〵と烈しく引釣つた。

巡査がやつて來た頃には、彼れは全く動かずに靜にそこに横はつて居た、然し彼れの顏は、まだ明かに彼れの最後の思想を物語つて居た。――

『人生は時には善かつた、時には惡かつた、然し此最後は最も善いものであつた。人生の謎を私は私の力で出來るだけよく解いた、あの金持の青年は、お前の云つてる物だけでは十分じや無いと云つて居たが、それだけでも決して小さな問題じや無かつた。然し私達は互に意志が疏通しなかつたのだらう。人間といふ者、とかく互に了解し合ふ事の出來ないといふのは悲しい事だ。』

二

我々はフランスに近い方のスウィスに向つて旅立つた。其處では、例の間斷無き家政問題の紛擾を一掃する爲めに、或る家に下宿する事になつた。

此處では私を庇護してくれる人は一人も無く、全然孤立して、私は全く彼女の勢力下に歸してしまつた、それでマリアはそろ〳〵パリに於て失へる物をとり返さうとかゝり出した。到着の瞬間から彼女は、自ら靜な精神病患者の附添人だと云ひふらした。そして先づ醫者と知合に成つて彼れを手に入れ、宿の主人や主婦にもそれを飲込ませ、のみならず、女中達から下男達同宿人達に至るまでも洩れ無くそれを吹聽して歩いてすつかり私を狂人扱にしてしまつた。私は最早自分と同程度の知識を持つて居て私を理解してくれる人と接する事が出來なくなつた。同宿人が殘らず一緒に食卓に就く時には、此愚な女は、パリに於て守らなければならなかつた沈默の取返しに、今こそとばかりにおしやべりをやり出した。彼女は殆ど有らゆる機會毎に口を出す、そして私が既に千度も非難して戒めた事だが、實に下らない馬鹿話の百萬遍を繰返して飽く事を知らない。そして無教育な平民共は此馬鹿げ切つたおしやべりにお愛想の爲めに相槌を打つので、私は只だんまりして居るばかりだ、すると彼女は此沈默を以て自分の私よりも勝れる證據と思ひ込んでいゝ氣に成つて益々付上るのだ。

彼女はどこか工合が惡く、煩つてでも居る樣な風に見えた、何か心配事が彼女に附纏つて居る樣であつた、そして私に對する態度は憎惡の他には何物も無かつた。

私の愛して居る物をば、彼女は總べて嫌つた——私がアルプスを實に善いと云つて褒めれば、彼女は散々にけなす、私が散歩をしたいと云へば、彼女は家の中にじつとしてゐたいと云ふ。彼女は私とたつた二人切りになる事がたまらなく恐しいのであつた。彼女は何でも私の希望は之れを阻止する爲めに、私の心を見拔いてどんな事を思つて居るかを豫知する術を練習した。私がいやと云へば、彼女はいゝと云ふ、私が右と云へば、彼女は左と云ふ——要するに彼女は私を憎んで居るのだ、私を嫌つて居るのだ。

此知らぬ他國で全然孤獨に陷つた私は、止む無く彼女に自分の側に一緒に居てくれるようにと哀願しなければならなかつた、我々は口論の始まる事を恐れて互にもう言葉を交さなかつたので、私は只彼女が自分の側に居てくれさへすれば、自分は今此處で全然孤獨では無いのだといふことを思つて、自ら慰めて居るのであつた。

彼女の姙娠が確定してからは、もう之迄の樣な心配も無いので、私は今度こそ完全に愛の接觸に

身を委ね得ることゝ信じた。彼女は最早私を却ける理由が無くなつたので、どうにかして私を怒らす樣な口實を工夫し出した、そして何物にも妨げられぬ完全な抱擁が私を滿足せしめることを知るや否や、彼女は、私が彼女に依つて享樂する此悅樂の故に私を怒り出した。

それは他の意味に於ても私にとつて非常な幸福であつた、何となれば私の從來の神經的の惱みはすべて此完全なる接觸を遂げられなかつた爲めのいら立たしさから來たものであつたから。

同時に私の胃カタルはだん〳〵悪い方に向つて、私は只ビーフ・テーしか取れない程になつてしまつた。烈しい腹痛と堪へ難い咽喉の渴きの爲めに夜もろく〳〵睡れなかつた、そして冷たい牛乳を飲んでやうやく此渴きを抑へる事が出來るばかりであつた。

完成せる敎養に依つて十分に發達した私の精緻な頭腦は、下等な頭腦との接觸の爲めに混亂に陷つた、私の頭を妻のそれと調和せしめようとする一切の試みは、私に烈しい痙攣をもたらした。それで私は今度はそれを妻以外の人達との間に試みやうとした。然し私と話をする人々は、恰も精神病患者と話をする時の樣ないたわりと遠慮とを以てした。

それで私は三ケ月間も沈默を押通した。三ケ月の終りに至つて私は氣が付いてハツとした、私の聲は使ひ慣れぬ爲めにうまく咽喉から出なくなつてしまつた、そして最早發音せられたる言葉を使ひこなす事が出來ないやうになつてしまつた。

その代りに、私は本國に居る私の友達と熱心な手紙の交換を始めやうとした。然し彼等の變に遠慮勝ちな言葉使ひや、心苦しげな同情や、父親の如き忠告などを見ると、彼等は私の精神狀態をどんな風に思つてゐるかが明かに分るのであつた。

彼女は遂に勝利を得た。私は彼女の註文通りに、將に狂人にならうとして居た、追跡妄想の最初の徵候がもう現れ始めたのだ。

妄想？　何故そんな言葉を使ふのだらう？　私は追跡せられ、迫害せられて居る！　私が自ら迫害せられて居ると信じてゐるのは妄想でも何でも無い、立派な論理じや無いか！

要するに、私は子供に返つたのだ。全然氣力を失つてしまつて、私は何時間もソファーの上にぐつたり横になつて居た、私の頭をマリアの膝にもたせ、私の腕で彼女の腰のまはりを抱いて、丁度ミケランジェロの『ピエタ』の樣な姿勢をしながら。私は額を彼女の胸に押付けた。彼女は私を彼女の子供と呼んだ、すると私は繰返した。――『さうとも、お前の子供だよ。』私の男性的なる物は此母の腕の中に殘無く消え去り、彼女は最早女では無く成つた、時には彼女は勝利者の如き誇を以て私を見下し、時には又、首斬人がその犧牲者の前に感ずる樣な突然の憐憫に捕へられて、やさしい目付を以て私を見詰める事も有つた。彼女は、男蜘蛛に依つて子を孕んでしまつた後には、其夫を食殺してしまふあの女蜘蛛であつた。

×　　×　　×

私がかうして病氣で寢て居る間のマリアの生活は奇怪至極なものであつた。彼女は午餐の頃までに床に入つて居る、それは午後一時頃である。それから彼女は格別の用も無いのに町へ出かけて行く、そしてやうやく晩餐の頃になつてから歸つて來る、度々はもつと遲くだ。誰かに、奥さんはどちらへ、と訊ねられると、私は答へる。——

『あれは町へ參りました。』

すると其人は變な微笑を浮べたまゝ行つてしまふ。

私は決して疑惑を抱かうとは思はない、又彼女の行動をひそかに嗅付けやうなどとも思はない。晩餐後、彼女はサロンに止まつて、他のお客達と例のおしやべりをやつて過す。

夜彼女は女中とコニャックを飲む事が有る、私は彼等が何やらひそ〳〵と囁くのを聞くけれど、扉の側で立聞して自らを貶(おと)しめる樣な眞似をしやうとは決して思はない。

何故しないのか？　それは人間として爲すまじき行爲に屬するものだから。

何故しないのか？　それは一種の男性的宗教として私の教養の中に忍び込んでしまつたのだから。

×　　×　　×

三ケ月が過ぎた。と、私は驚いて目をさました——我々の支出は非常な高に上つて居たのであつた。今は下宿住ひであるから費用は一定して居る、私は容易に計算して見ることが出來る。

我々の下宿料は一日十二フランである、卽ち一ケ月には三百六十フランになる、そして私はマリアに毎月一千フランをやつた。それで毎月六百フランの小遣が使はれた事になる。

『それは特別の支拂に使ひました。』と私が彼女に此清算を求めた時に、彼女はやつきとなつて答へた。

『何だつて——定つた支拂が三百六十フランで、特別の支拂が六百フラン！　お前は僕を馬鹿にしてるんだね？』

『あなたはたしかに私に千フラン下さいました、けれど大部分はあなたの爲めに使つたのですわ。』

『ようし！　そんなら勘定をして見やう。煙草——非常に惡いのにシガーが十サンチームづゝで十フラン——郵稅が十フラン——それから……』

『あなたの劍術のお稽古が有りますわ！』

『一遍しかやらない、三フランだ！』

『馬もありますわ！』
『二回で、五フラン！』
『本の代！』
『本？　十フランさ！……それでみんなで……三十八フランか、まあ百フランとしてもいゝさ。殘りの五百フランは其他の小遣だね……たしかにひどい！』
『じやああなたは、あたしを盜人だと云ふのね？　……ほんとにあなたは何といふ情無い人間でせう！』
私は之れに對して何を答へる事が出來たらう？——何んにも！……私は甘んじて情無い人間になつた、そして翌日はもうシュウェーデン中の彼女の友達が、私の發狂は一歩進んだといふことを知らせられるのだ。
斯くの如くにして彼女の創作した傳說は追々に形造られ、發展して行つた。年々私の人格の輪廓がはつきりと其傳說の中に現れて來るやうになつた、そして罪の無い詩人の面影は消えてしまつて今や眞黑く塗潰されて犯罪人の型に近い樣な荒唐無稽の神話的人物が作り上げられてしまつた。

× × ×

私はイタリーへ逃出さうといふ計畫を試みた、そこでならば私の氣の合つた藝術家と交際する事も出來る筈であつた。然し此試みは失敗した。そして再びジュネヴァ湖畔に歸つて、マリアの出產を待つ事になつた。
子供が生れると、マリアは自ら殉敎者、壓迫せられた女、權利無き奴隷の輪光を以て自らを聖化し、生れた兒にどうぞ洗禮を授けてくれと私に一生懸命に哀願した。私は丁度其頃論難の文を書いてキリスト敎の信仰に對する私の反感を告白したので、從つて敎會の慣習に從ふ事が出來無くなつて居る、といふことを彼女はよく知拔いて居るのだ。
彼女は元來全然宗敎的な性質を持つても居らず、十年以來寺院に足を踏入れた事さへ無く、聖餐式に出たのは何時の昔の事やら解らず、祈禱と云へば只犬や鷄や兎の爲めに祈つた事が有るばかりなのだが、どうした譯か此洗禮で夢中になつて、仰山な式を擧げやうと主張する。私は一體そんな形式的の儀式なんぞは詰らない僞善だと思つて居り、又自分の敎義に反するものとして將來やる氣が無いといふ事を彼女はちやんと見拔いてゐるので、それで此洗禮に就いてはやつきとなつて騷ぐのであらう。
兩眼に熱い涙をすら泛べて彼女は私に哀願し、私の情に訴へ、私の寬厚の德を思ひ出させて彼女の意に從はせやうとかゝつた。とう〳〵私は彼女に根負けがしてしまつた、そして少くとも私だけ

は其式に列席しないといふ條件で之れを許した。すると彼女は私の手にキッスを浴せ、私の此愛情の印に對して溢るゝばかりの感謝を表した、何故なれば洗禮は、彼女にとつては「一の實際の良心の問題」であり、又人生の重大問題だといふのであつた。

洗禮の式が擧げられた。ところが彼女は其式から歸つて來ると、參列者の居るところで、「此滑稽劇」の愚を笑ひ飛ばしてしまひ、自ら近代的の自由思想家を演じて見せ、古臭い慣習を滑稽化してしまつた、そしてたつた今自分の息子に施した信條に就いては、實際に於ては何の關係も興味も有つて居ないのだといふ事を誇り顏にみんなに見せびらかした。

彼女が一度私との此勝負に打勝つや否や、あれ程大騷をした嚴肅な儀式を嘲笑の種としてしまひ、彼の重要な「人生の問題」なるものは、私に打勝つた勝利に化してしまつた、そしてそれは將來私に對する强味を敵に與へることになるのであつた。

尙今一度私は、此征服慾の强い女の氣まぐれを滿足せしむべく身を下して、防禦無き素裸を敵前に暴露する樣な事をした。

然し今度のは今までよりも重大な結果を引起す事になつた。それといふのは――スカンデナヴィアの方から、例の婦人解放といふ狂氣じみた觀念に捕はれて居る一人の未婚婦人がやつて來た。彼女は直ぐにマリアの友達になつてしまつた、それで私はもう失はれたる人間になつてしまつたのだ。

彼女は、性を失つてしまつた或る男の書いた臆病未練の書を持つて來た――其男といふのは世界中の有らゆる文明諸國の青鞜連中と同盟して、自分と性を同じくする世界の男性への裏切者となつた奇怪な人間なのだ。私は先にエミール・ドゥ・ジラルダンの『男性と女性』を讀んで以來、斯くの如き運動といふものは必ずや女性に對して不當の利益を與ふる結果になるものであるといふことを見拔いて居たのである。

男を斥け、女を以て之れに代へて、再び昔の母長制度を復活する――文明を創造し、文化の恩澤を擴め、大なる思想藝術職業其他の一切を創作したる、眞の創作の主の位を奪ひ、僅少の例外を除けば全然文化の事業に參加した事の無い愚昧なる女性の位置を高めて之れに據ゑやうとするのは――私にとつては、我が男性に對する挑戰に他ならないのだ。然しながら、此鐵器時代の知識階級、此類人的動物、此半猿類、此有害なる動物の一群を「成上らせる」といふことは、それを思つたばかりでも私の裡に存する男性的なるものの反感を呼起すに十分であつた。そして不思議な事には、此反感の爲めに私の病氣はけろりと直つてしまひ、敵に對する力强い反抗心に捉へられてしまつた――あゝ其敵こそ、精神に於ては遙に男性に劣つて居るが、只道德を全然缺如する事に依つてのみ我等に對して絕對の强味を有する奴等なのだ！

二つの民族の間の戰爭に於ては、必ず正義の觀念のより少き者、より多く墮落せる者が勝利を得

るを常とするが故に、凡そ生れながらにして女性に對する尊敬の念を有する男性にとつて、又十分に戰爭の準備をなすに足るだけの自由な時間を女性に與へて居る男性にとつては、此戰爭の勝利甚だ覺束無しと見たるが故に、私は眞劍に此問題の爲めに頭を惱ました。私は此新たなる爭鬪の爲めに戰鬪準備を整へ、直ちに一書を著す準備にとりかゝつた、此書こそ私が彼の解放せられたる女共の面に――男子を奴隷として自由を得んと欲する馬鹿女共のしやつ面へ叩き付ける手套となる筈であつたのだ。

春が近付いて來た、そして我々は下宿を換へた。間も無く私は一種の煉獄の中に自分自身を見出した、そこには私を監視する女が三十五人も居た、そして、夫の權利を奪はんとする馬鹿な女共を攻擊せんとする私の作物に對して此上も無い好材料を與へてくれた。

三ケ月にして其書は出來上つた。それは結婚の物語を集めた小說集である。私は其卷頭に一の論文を掲げ、其中に私は此種の不快な事實の多數を宣言した。（註――「結婚」と題する短篇集の上梓にして、十二の物語を收む。出版後直ちに發禁處分の的となり、大問題を惹起せるもの。）

女は男の働きに依つて自分自身及び子供を養はせて居る以上は、彼等の稱するが如き男の奴隷では決して無いのだ。女は決して壓制せられはしない、何となれば、自然は、女としての任務を果しつゝ男の庇護の下に立つべき運命を女に與へたのだから。女はその精神に於ては無論男に及ばない

然し男は子供を生む事が出來ない。女は偉大なる文化事業の勞働に於て不要な者である、男の方が遙によく之れを理解し、實行する事が出來るのだから。進化論に依れば、兩性の差が大なれば大なる程、壯健なる子を生むことが出來るといふ。故に「男性模倣（マスクリニスムス）」兩性の均等の如きは、明に人類の退歩であり、嗤ふべき愚劣であり、浪漫的、理想主義的社會主義者共の最後の夢たるに過ぎないのである。

男性の缺く可からざる附加物であり、男性の精神的創造物なる女は、夫の權利を左右するが如き權利は決して持つて居ない、何となれば、女は只數に於てこそ人類の「他の半分」を成して居るがその關係に至つては六々三十六分の一にもあたらぬからである。故に男がその妻子を養ふ義務を引受けて居る間は女は決して男の勞働市場を要求す可きで無い。記憶せよ――一人の男が彼れの仕事の位置を奪はれる時、それと同時に一人の老嬢と一人の賣淫婦とが餘計社會に現れる事になるといふ事を。……

私の此作物を見た時の男性模倣主義の女共の憤慨は如何にすさまじいものであつたか、又如何に恐る可き徒黨を彼等は結んだか――それは、彼等が此書の押收を要求し、遂に訴訟をさへ提起するに至つたといふ事實を知れば、容易に想像する事が出來るであらう。

彼等は此攻擊を宗教の冒瀆に對する起訴の假面の下に始めたのだが、その淺はかな女の智惠では

遂に之れを最後までやり通す事が出來ずに終つてしまつた。(性を失へる者共の愚は遂には「宗教」の位置にまで高められてしまつたのだ！)

私が一人でシュヴェーデンへ歸るといふ意向に對しては、マリアは斷乎として反對を唱へた。然し家族を殘らず一緒に連れて歸るといふことは、私の財政が到底許さなかつた。彼女は內心に私が彼女の嚴重な監視から逃れ去ることを恐れるのである、殊に又、私が法廷に立ち、公衆の面前に現れて、彼女が私の精神狀態に就いて一生懸命に流布した有らゆる惡評が全く僞であつたといふことがばれてしまふだらうといふことを、一層ひどく恐れて居るのであつた。

彼女は病氣になつた、然し何處が惡いかはつきりと解らなかつた、そして床に就いて居た。それにも係はらず、私は自ら法廷に現れることを決心して、出發した。

二ケ年の禁錮を求刑せられて居た此六週間の不快極まる期間に私が彼女に書送つた手紙と云つたら、彼女からの別離と空閨生活との爲めに再び目ざめたやさしい愛情に充ち〳〵たものであつた。私の過勞せる頭腦は彼女を詩的に淨化し、彼女の額に輝くばかりの輪光をめぐらして神聖化し、憧憬と肉體的精進とは彼女に天使の如き白衣を纏はしめた。彼女の中に潛む一切の下賤なる、醜惡なる邪曲なるものは忽ち消滅し、私の最初の戀の夢に現れた樣なマドンナの神々しい姿が新たに甦つて現れた。私は自分の舊友なる或る記者と會見した時、こんな事まで云つた程であつた——『僕は善良

なる一婦人の感化の爲めに今までよりも謙虛になり、淸淨になつた。』——多分此告白は聯合王國の新聞に依つて、廣く世界中に傳へられたのであらう。

あの女——不實なあの女がそれを讀んだ時、彼女は笑はなければならなかつたらうか？

公衆は少くとも拂つた金の値だけは喜んだに相違無い。

斯くの如き私の愛の手紙に對するマリアの返書は、彼女が此事件の經濟的方面に就いて多くの興味を持つて居るらしいといふことを證明するものであつた。然し私が劇場や街路や法廷などで一般民衆の喝采を受ける事が益々盛になつて行くに從つて、彼女の意見は變化して來た、そして裁判官を馬鹿だと罵り、自ら陪審官の一人で無いのが口惜しいといふやうになつた。

私の愛の告白に對して彼女は怜悧な、控目な態度を以て應へた、彼女は問題に深入りする事を避けて、「互に理解する、互に相手の心を掴み合ふ」といふ樣な言葉の反復以外に出でなかつた。而して我々の結婚生活の不幸は、私が彼女を理解し得なかつた點に在ると主張した。然し私に云はせたら、さう云ふ彼女自身こそ彼女の夫なる博學な詩人の言葉の一語をも理解する事の出來ない樣な女では無かつたか！

彼女からの手紙の中に、私の古い疑惑を新ならしめる樣な文句の一通が有つた。私は彼女に云つてやつた——若し幸にして無罪となつて法廷から出る事が出來たら、私はいつそ外國に永住すること

とにし度い、と。

すると彼女はやつきとなつて私を罵り、最早私を愛してはやらぬと脅し、さうかと思へば私の同情に訴へて、さながら私の前に身を投げ伏し、私の母の記憶を呼起して故國をなつかしがらせやうとする。そして彼女は自白した――再び自分の故國（フィンランドでは無い）を見る事が出來ないのかと思つたばかりでも、彼女は頭から足の爪尖まで氷の如き戰慄に襲はれる、そして死んでしまひさうだ、とさへ云ふ。私は自分に問うて見た。――

『何故あの女はそれを思ふと惡寒を催すのだらう？』

私は今日に至るまで遂に此疑問を氷解することが出來無いで居た。

遂に私は無罪を宣告せられた。私の爲めに開かれた祝宴に於ては、頗る皮肉な事だが、マリアが私を驅つて自ら法廷に現れるに至らせたといふので、彼女の爲めに乾杯せられた。

實際それは興味有る話であつた。

私は家族が滯在して居るジュネヴァへ向つて直ぐに出發した。私のびつくりした事には、マリアは手紙の中で病氣で寢て居ると云つて來たのが、ちやんと停車場に出迎へて居て、至つて健康相で、元氣も善かつた、只どうかすると、何かに氣を取られてぼんやりする事が有つた。

私は再び生返つた樣な氣持がした、それからの樂しいタと幸福な夜とは、私が長い間堪へ忍んだ

苦痛を償つて餘り有るものであつた。

翌日になると私は、此下宿は學生達や浮氣な女達などで一杯になつて居る事を發見した。彼等のべちやくちや饒舌を弄して居るのを聞くと、マリアが此怪しげな連中と酒を飲んだりカルタをしたりして喜んで居た樣が目に見える樣な氣がした。私は此家に泊つて居る人々の間に支配するいやに馴れ〳〵しい甘つたるい調子に胸が惡くなつた。マリアは若い學生連に對して例の「小母さん」を演じて居る。（昔からの此女の癖で。）其中でも最も惡い樣な女と彼女は親しく交つて居た、そして私に之れは醉拂つて食卓に就く牝豚だ、と云つて紹介した。

此娼家の如き家に私の子供達は六週間暮して居たのだ！　そして母はそれを何とも思はない、何故なれば彼女はちつとも「偏見」を持たないから！　そして彼女の病氣――假病――は、かうした怪しげた人間共と疑はしい附合をする事を少しも妨げなかつたのだ！

私は少しでも聲を荒らげると、無造作に叱り飛ばされてしまつた。――私は只「やきもちやき」で「舊弊」で、「貴族的な」人間であつた。

そして初の戰ひが又も新たに始まつた。

× × ×

今や新しい難問題が我々に近付いて來た――それは子供の教育の問題である。全然無教育な百姓娘の子守女が保姆といふ事になつた、そして母と馴れ合の上で、有らゆる不始末を演ずるのだ。二人とも始末におへぬ怠け者で、朝は日が高くなるまで睡りこけて居る。從つて子供達は朝目がさめてからも床の中に居る樣に强制せられる、そして起してくれとせがむと、遂には打たれる。私はとうとう見兼ねて彼等の中に入つた。私は何の遠慮も無く子供達の部屋で起床喇叭を吹鳴した、彼等は私を喊聲を揚げて喜び迎へた。すると妻は自分の個人的自由――それは卽ち他人の自由を束縛する事に依つて成立つ――といふ事を云出して抗議を申込む。然し私は無論そんな馬鹿な話に耳を傾けやうともしない。

決して平等になり得ないものを平等にしてしまはうとかゝる、此弱々しい下等な頭のモノマニアが其頃私の家庭を攪亂する原因となつた。可なり早熟な私の長女は二三年來私の繪入りの本を繙くことを許され、其他にも尙長子としての特權を享けて居る。そんな高價な本を取扱ふ事を未だ知らない小さい方の子供にはまだ之れを許して覽かないので、母は、私を不公平だと云つて非難する。

『何も彼も平等で無けりやいけませんわ！』と彼女は云ふ。

『何も彼も一切？　それじや着物の丈や靴の大きさもかい？』

直ぐに答へは無かつた、然し私は「馬鹿」だといふ非難を以て直ちに其答へに代へられた。

『何でも物事は能力と價値とに應ずる事さ！　之れは姉へ、あれは妹へ、といふ風にね！』

然し彼女は無論そんな理窟を解しやうとはしない、そして私は妹の方を「憎がる」「不公平な」父親だと、云ふ。

正直のところ、私は姉娘の方をより多く愛して居た事は實際である、其子は私の生涯の初の美しい日の事を思ひ出させ、且つ大分智惠付いても來てゐるので。それに又、妹娘の生れたのは、恰も母の貞操が最も疑はれる頃の時期にあたつて居たのである。

それに、母の所謂「公平」なるものは子供達に對して全然無頓着にするといふ事に在るらしかつた。母が寢て居ない時は、卽ち外出して居る時であつた。母は子供達にとつてはまるで他人であつた。それで彼等はとかく私を慕つてなついた、そして遂には母が嫉妬を起すに至るまでに、私に對する子供達の愛が生長して行つた。それに對して私は、いつも自分で買つて來た玩具や菓子などを母の手から子供に與へさせた、それに依つて母に對する子供の愛を增させようと努めたのである。

かくして幼き兒等は眞に私の生命の一部分となつた、そして孤獨の感に打ひしがれる樣な暗黑の瞬間にも小さい者達を見れば再び自分の生存へ――それから同時に彼等の母なる私の妻へと繫がれて行くのを感じた。子供達の故にこそ、離婚といふ事は考へる事さへも全然不可能であつた、そしてそれは同時に私の爲めに不幸な事であつた、何故なれば、私はそれから益々妻の桎梏の下に喘ぐ

身となり果てたのだから。」

三

私が此男性模倣主義の女共の本城を衝いた攻撃の結果は、直ちに現れて來た。スウィスの各新聞は筆をそろへて私を辛辣に攻撃を始めて、とう〳〵そこに居たゝまらない樣にしてしまつた。私の著書の發賣は禁止せられた、そして私は町から町へと迫害せられつゝ辿り歩いて、遂に再びフランスへ逃出してしまつた。

然しパリに於ても、今や私のもとの友達は私から背き去つて、私の妻と同盟を結んで私に反抗するに至つた。野獸の如くに包圍せられて、私は戰場を換へなければならなかつた。殆ど困窮してしまつて、私は止むをえず、パリの近郊に在る或る美術家村に中立の避難港を求めなければならなかつた。

私は體よく係蹄（わな）にはまつてしまつたのだ、私はそれから十ケ月間を、恐らく私の一生涯中最も悲慘な期間を此地に過さなければならなかつた。

私が其地で近付きになつた仲間といふのは、若いスカンデナヴィアの實家連中で、彼等は色々な使命の爲めに來て居るのだが、各十人十色で、又奇體な經歷を持つて居る人間共であつた、それにもつ

と因つた事には、連中はそれだけで無くて他に闘秀畫家と稱する者が加はつて居るのである、此連中と來たら有らゆる偏見から離れ、一切の慣習から解放せられて、自ら男性と同樣な物と心得て居るものゝ如くに、半陰陽性的の文學を熱心に推賞した。自分自身の性を蔽はんが爲めに、彼等は極力男性の外觀を模倣した——彼等は煙草も吸へば、酒も飲む、玉も突く……そしてお互に戀もする。

正にどん底だ！

全然孤獨であるよりはと思つて、我々は此醜怪な化物の中の二人と知合になつた——其一人は作家で、一人は畫家だ。

此闘秀作家が先づ私を訪問した、有名な作家を訪問する例に從つて。これが私の妻の嫉妬を喚起した、彼女は此同盟者を自分の味方に付けやうとした、何となれば、此闘秀作家は、私が中性的女性を攻擊する根據を十分に尊重する程に賢明な女の樣に見えたからである。

丁度此時或る出來事が、私の暗い考へを再び甦せた、そして其後忽ち有名になつてしまつた私の所謂モノマニアが始まつた。

有らゆる有名なスカンデナヴィア人の漫畫の肖像が一杯描いてあるアルバムがホテルに有つた。それは何れも有名なスカンデナヴィアの畫家の筆に成るもので、其中には私の肖像も有つた。そして髮の毛の間から一寸見ては解らない樣にうまく一本の角が生やしてあつた。

此肖像を描いた畫家は私の親友の一人であつた。それで私の妻の不貞は今や公然周知の事實となつて居るといふ事をそれから推定する事が出來た——正に、知らぬは亭主ばかりであつた。私は此アルバムの所有者に說明を求める事にした。

豫め私の精神狀態に就いて飲込まされて居た宿の主人は、それは私だけにさう見えるので、繪の中には決してそんな物が描いてあるのでは無い、卽ち私は不當な怒り方をして居るのだ、と私に誓言した。それで更に詳しい事が分るまで、私は其まゝにして置かなければならなかつた。

或る日の夕方の事であつた、我々は丁度スカンデナヴィアから來たばかりの或る老紳士と宿の庭でコーヒーを飲んで居た。外は未だ明るかつたので、私は私の位置からマリアの顏面の有らゆる表情を一も洩らさず追跡することが出來た。老紳士は我々の出發後シュヴェーデン國內に起つた有らゆる出來事を話して聞かせた。其中にはいつかマリアにマッサージをやつた醫師の名前も出た。すると彼女は此ドクトルの名前をそのまゝには逃さずに、挑みかけるやうに問ひかけて其老紳士の話を遮つた。——

『あゝ、そんならあなたはドクトルXを御存じ？』

『えゝ……大分騷がれたお醫者さんで……といふのはつまり、一種の評判を取つた人で……』

『氣障なおめかしやとしてねー』と私が附加へた。

と、マリアの顏は眞蒼になつて、一種の無恥な微笑がその脣のあたりに凝り付いた、そして口の隅が上の方へ引釣つて、眞白い齒を露した。

それからは、妙に座が白け渡つて氣まづい思の中に、話が杜絶えてしまつた。

私は其老紳士と二人切りになると、私を甚だしく不安ならしめる此風說に就いてもつと詳しい事を知つて居るなら是非敎へてくれと彼れに賴み込んだ。彼れは有らゆる惡魔に誓ひを立てゝも、さうした風說を耳にした覺えは無いと云張つた。小一時間もかゝつて彼れをせびつた揚句、私はやうやく此神祕的な「慰め」を彼れから引出す事が出來た。——

『それにね、あなた、一人の男を疑ふ程なら、他にももつと有るに相違有りませんからね。』

彼れの言葉は唯それだけであつた。然し此の後ドクトルの名はもうマリアの口から洩れる事が無くなつた、之れまで彼女は好んで其話を持出し、公然と彼れの名をも口にしたのであつた、恰も、顏を赤らめずに彼れの名を聞く事に慣れやうとでもして居るかの如くに——有らゆる懸念も之れを顧る暇が無い程に彼れはそれに捕はれてしまつて居たのだ。

此發見に依つて私の注意は少からず喚起せられた、そして私の記憶を辿つて之れと似寄りの情況證據は無いかと詮索し出した。即座に私は、私の公判中に現れた一の作品を思ひ出した。それは確に私の此探究に一の光を投げるものだ——それはもとよりぼんやりした光ではある、けれども、少

くとも之等の風評の源に導く細い溝を見出す役には立つものであつた。

それといふのは、例の有名なノールウェーの青鞜的詩人なる平等狂の宣傳者が書いた戲曲で、其頃私の手に入つたのだ。私は其時それを讀んで、私自身の場合とは何等の交渉をも見出す事が出來なかつた。然るに今日に至つて見ると、私は忽ち妻の風評に關する最惡い臆測に身を委ねてしまつた程にたやすく其內容を飜譯する事が出來るのであつた。（註——イプセンの社會劇「野鴨」、一八八四年現る。）

その內容といふのは斯うだ。——

一人の寫眞師が（寫眞師といふのは、私の寫實的小說の故に此稱が與へられたのだらう）素性の幽しい一人の女と結婚する。此女はもと或る溶鑛所主の妾であつたが、結婚後は、初の男から引出してひそかに貯へた財產で家計を助けて居る。夫は仕方の無い怠け者で、カフェーに入り浸つて、ボヘミアン仲間と酒ばかり飲んでのらくらして居る、それで彼女が夫の職業を習ひ覺える。

事實はさういふ風に書換へられては居たが、それを出した者にはすつかり解つて居たのに相違無かつた、彼れはマリアが飜譯をやつたといふ事實を知つて居た、然し私が何等の報酬無しにそれを訂正してやつた事、彼女の仕事の收入は何の條件も割引も無しにそつくり彼女にやつてしまつた、といふ樣な事情をば彼れは御存じ無いのである。

扨て、其後事情は一層惡くなつて來た、何となれば、此不幸な寫眞師はその鍾愛せる娘が相當の

時期よりも早く生れたもので自分の子では無いといふ事を發見したのだ、即ち彼れの妻は彼れを勦かして結婚するに至らしめた時、甚だ醜惡なやり方で彼れを欺いて居たのである。

此事件の卑賤なる性質を完からしむべく、此欺かれたる夫は厚顏にも妻の元の情夫から多額の賠償金をふんだくるといふ淺ましい所行を敢てしたのである。

之れは恐らく男爵が保證人に立つたマリアのあの借金を指すものだらうと私は感付いた——即ち私が結婚の翌日に保證をさせられたあの金である。

然し此戯曲中の子供の事とその私生兒的性質に至つては、我々の場合と何の類似が有るのだらうと解釋に苦んだ、私の長女は結婚後二年も經つてから生れたのであるから。

然し、思ひ付いた！……生れると間も無く死んだあの子供は？……それに違無い！……あのあはれな、小さな死兒！……あれが一體私をして彼女と結婚するに至らしめたのだ、それで無かつたら私は結婚なぞをする氣にはならなかつたかも知れないのだ！……

決して確定した推論では無い、然しともかく一の推論には相違無い。よく符合してゐる。マリアは離婚後もよく男爵の許へ出かけて行つたし、男爵も亦我々のところへ來た……私の部屋の壁には男爵の繪が掛つて居たし、それからマリアの借金……其他の事もよく合ふ！

私はきつと談判する事に決心した、そして午後彼女との間に一つ大芝居を演ずる準備をした。我

我夫妻は一樣に此男性模倣主義者の藁人形にしか過ぎぬ男に依つて攻擊せられて居るので、我々二人の寃を雪ぐ可く、一の起訴或はむしろ辯護を提出す可くマリアにすゝめやうとした。まるで藁人形の樣に女共の傀儡になつてゐる此男は屹度利を喰はされて此有利な請負仕事を引受けたものに相違無いのだ。

マリアが呼ばれて部屋に入つて來ると、私はやさしい態度で彼女を迎へた。

『何か御用？』と彼女は訊ねた。

『重大事件だ——僕にもお前にも關係の有る事だ！』

それから私は彼女に此戯曲の筋を話して聞かせて、主人公の寫眞師に扮した役者は私の似顏で演ずる樣な事をさへも敢てした、といふ事をも附加へて話した。

彼女は默つて、考へ込む、明かに昂奮に捕はれて居るのだ。

それから私は辯護を始めた。

『若し此脚本にある通りなら、さう云つて貰ひ度い、僕は其まゝ宥す積りで居るんだからね。あの死んだ兒がたとひグスターフの子だつたとしても、お前はあの頃は未だ自由だつたんだからね。僕とお前の間には只ぼんやりした約束があるに過ぎなかつたし、お前は未だ一文も僕から受取つては居なかつたんだからね、それから此脚本の主人公の事だがね、此男は僕の考へでは、少くとも人情

を解する人間として行動したものだと思ふ、此男は自分の娘や妻の將來を滅すに忍びなかつたのだ。子供の養育費として受取つた其金だつて、損害に對する當然の賠償と見る可きものだらうと僕は思ふんだがね。』

彼女は注意深く私の言葉に耳を傾けて居た、そして其獲物を直ちに嚥下してはしまはずに、反復嚙み味つて居るらしかつた。良心の苛責の爲めに刺戟せられた彼女の顏色を平靜ならしめたのどけさから判斷すると彼女が私から未だ一文の金も受取らぬ間は自分の身體を勝手にする權利があつたのだといふ私の論法は、彼女を滿足せしめたらしかつた。此脚本の欺かれたる夫に就いては「人情を解する男」と云つた私の言葉を承認した。そしてそれは「氣高い情の持主」だと主張した。

彼女にすつかり泥を吐かせやうといふ私の目論見が成功しない中に、私の話は終つた。私は此難關を切拔ける道を彼女に示し、如何にして我々は傷けられたる此名譽を恢復す可きかを彼女に計つた、そして一般世間に對し、又我々自身の子供に對してあらゆる汚名を清める爲めに、一つの小說の形式に於て我々の辯護を書いたらどうだらうといふことを彼女に提議して見た。

私は一時間もしやべり續けた。其間彼女はペン軸を弄びながら私の机の前に腰かけて居たが、時時間投詞を挿む他には一言も云はずに、過度に神經過敏になつて居るらしかつた。

私はそれから出かけて、ゆつくり散步をしてから玉突きのゲームをやつた。二時間後歸つて見ると、マリアはまださつきの場所に、まるで塑像の樣にじつと動かずに居る。

私の足音を聞付けると、彼女は立上つた。

『あなたはあたしに係蹄をかけだんですか？』と彼女は云ふ。

『そんな事があるもんか。僕は自分の子供達の母親を永久に失つてしまつてもかまはないと思つて居るとでも、お前は疑つてるのかい？』

『あなたはどんな眞似だつてやり兼ねはしないわ。あなた、もうあたしから別れてしまひたいんせう。あたしをあのYさんに紹介した時に、既に一度さうしやうとなすつたんでせう。（Y氏といふのは未だ擧げた事の無い名前である。）屹度さうですわ、あのYさんにあたしを誘惑させやうとなすつたんでせう、あたしの不義の現場をつかまへてやる爲めにね？』

『誰が一體お前にそんな事を話して聞かせたんだい？』

『ヘルガですわ！』

『ヘルガ？』

それは我々がシュウェーデンを立つ前の、マリアの最後の友達であつた女の名である。マリアと同性戀愛に陷つて居たあの女が此おれに態よく復讐を企てたのだ！

『そしてお前はそれを信じたのかい！』

『えゝ無論よ……だけど、御存じの通り、あたしはどちらをも騙して失望させたのですわ――Yさんと、それからあなたをもね。』

『といふのはつまり、第三の男と通じて僕を騙したといふのかね？』

『そんな事をあたしは云やしなくつてよ。』

『だつてお前今自分でさう云つたぢや無いか！　我々二人を騙したといふなら、僕をも騙した事になるだらう！　定り切つた話だ！』

彼女はそれに對して死者狂ひで抗爭し、そんなら證據を見せろ、と私に迫つた。

證據を！……

凡そ人間の心の中に崩し得るだらうと想像せられるあらゆる見下げ果てたる墮落にも超えたる斯くの如き僞瞞を發見した時、私はまるで打のめされる樣な思がした。

私は頭をうなだれ、彼女の前に跪いて、ひたすらあはれみを乞うた。

『お前は其女の言葉を信じたんだね！　僕がお前から別れたがつて居るといふ樣な事を信ずる事が出來たんだね。ところが僕は何時だつてお前の忠實な親友であつた、お前に執着して居る夫であつた、さうだ、僕はお前無しには到底生きては居れないんだ。そして此の僕を誘惑しやうとして僕に附纏ふ樣な女は、一人殘らずお前に訴へたじや無いか――ほんとに一人の例外だつてありはしなかつた。それだのに、お前はそんな女の言葉を信じたんだね？　ほんとうに信じたんだね？』

彼女もさすがにあはれみの念を起す！　突然正直に打明けてしまはうといふ氣になつて、實は友達の言葉を信じはしなかつたのだ、といふ事を白狀した。

『そんなら矢張お前は僕を騙したんだね……さあ云つて御覽、僕はお前を宥して上げるんだから！……とにかく此堪らなく恐しい暗い考から、僕を解放しておくれ！……どうぞ云つてしまつておくれ！……』

然し彼女は何んにも云はない、そして只、Y氏を「情無い人」だと云つて罵るばかりである。

「情無い人」――私の最愛の親友を！

私は只もう死にたくなつた！　此恐しい生存は私には堪へ難くなつた！……

食事の間には、マリアは私に對して懇切を極めた。私が寢室に退くと、彼女もやつて來て、ベットの緣に腰かけて、私の手を握り、私の目にキッスし、遂には身を揉みながらよゝと泣き崩れてしまつた。

『何故泣くの、お前、どうぞ心配事をすつかり打明けておくれ、僕に慰めさしておくれ！』

彼女は私の寬厚、私のやさしい感情、私の慈悲心、それからどんな情無い人間にも及ぶ私の博大なる同情といふ樣な事に就いて、連絡の無い、切れ〴〵な言葉を吃り出した。

何といふ譯の解らない話だらう！　私が妻の不貞を責める、すると彼女は私に甘えかゝつて私を

褒めちぎるといふのだ！

然しながら火は既に點ぜられた、而して焰はパッと燃上つた。

矢張彼女は私を騙して罪を犯したのだ！

私は其相手を知らなければならない！

其次の一週間は、私の暗澹たる生涯の中でも最も暗澹たるものであつた。

我々は生れ付き、或は遺傳し、或は教育に依つて獲得せられたあらゆる原則に反抗する惡戰を戰ふことになつて來た——卽ち私は一の犯罪を敢てせんとするのだ。私は最後の手段に訴へて、マリアへあて〻來た書狀は殘らず封を押切り、自分は今如何なる男を相手にしなければならないのかを知らうと欲したのだ！　私自身は妻に絕對の信賴を置いて私の不在中に來るあらゆる書狀を讀むことを許して置くのではあるけれど、私は今更に此信書の祕密の神聖なる掟を、共同生活に於ける不文の義務を破り棄てんとする罪の前に恐れ戰いた！

然し私は遂にあらゆる義務觀念を忘れて此衝動に從ふより他に無かつた。或日私は最早如何なる祕密をも尊重しない、彼女宛ての手紙が來た、ぶる〳〵慄へる手で私は開封した——私の名譽の死刑宣告文が書いてある書類を開封せんとする刹那の如くに打慄へつ〻。

それは彼女の第一號の友達なる、あの山師女から來たものであつた。

嘲笑的な、輕蔑的な文句を連ねて、此女は私の發狂に就いて陳述し、神が私の狂へる精神の最後の閃きを消し去つて、一刻も早くマリアをその殉教の苦みから救ひ出してくれるやうにとひたすら神に祈るのであつた。

私は其中から最もひどい部分を書拔いて、手紙は夕方の便でマリアに渡す爲めに、もとの如くに封をした。時刻が來ると私は妻に其手紙を渡した、そして彼女の顏色を覗き込む爲めに彼女の側に座を占めた。

私の死を希ふ條（くだり）——それは二ページ目の上の方に在つた——に來ると、彼女は何と思つたか、亂暴に笑ひ出した。

そんなら、私の渴仰して止まぬ我が妻は、私の死に依る他には、その良心の苛責を免れる途が無いのか。彼女の過失の結果から免れるべき最後の希望は、此私が一刻も早く死んでしまふ事の他には無いのか。私が死ねば、彼女は私の生命保險の金と有名な詩人の年金とを手に入れる事が出來るだらう、そして再び結婚しやうと、又は浮氣後家として好きな眞似をして暮さうと彼女の勝手である！　私の渴仰して止まぬ此女が……

Moriturus sum!（余は今や死なんとす。）私は今や之れのみが私の唯一の幸福なるアブサンと、私の昂奮せる頭を靜めてくれる玉突に浸つて、免れ難きカタストロフをわざと早めんとする。

× × ×

先の一切の葛藤よりも一層惡質なる、新たな悶着が生じた。私に對して愛を感じてゐる樣な風に見せかけたあの閨秀作家が、マリアを征服してしまつたのだ、そして私の妻は、又もいやな噂の種になる程彼女に惚れ込んでしまつた。すると今度は其女の伴れの女がそれに對して嫉妬を起す、そして其嫉妬なるものもあの不快な噂を一層パッと擴めるばかりで、それを打消す役に立つ樣なものじや無かつた。

或る晩ベットの中で、マリアは二人の抱擁に誘はれて、私はあのZ孃に惚れて居るかどうかを私に訊ねた。

『いゝや、飛んでも無い事だよ！　あんな下等な飲んだくれなんか！　まさかお前、そんな事を思つては居ないだらうね？』

『ところが、あたしはあの人に首つたけなのよ！』と彼女は答へる。『ほんとに變ねえ！……あたしあの人と二人切りで居るのが何だかこはくつてならないのよ！』

『どうして？』

『どうしてだか分らないけれど！……あの人ほんとにたまらない程いゝ所があつてよ……あの身體が……』

『さうかなあ……』

一週間經つてから、我々はパリから友達――何の遠慮も無く偏見も無い美術家連をその夫人と一緒に招いた。

すると男達は來たが夫人連は來なかつた、彼等の來られないといふ申譯は、我々の感情を少からず害した程に見え透いた嘘であつた。

思ひ切つた馬鹿騒ぎの無禮講が始まつた。男達の見苦しい振舞は、我慢が出來ない程に私を憤慨させた。

彼等はマリアの二人の女友達をまるで淫賣婦かなんぞの樣に取扱ふのだ。一座正に酒酣にして混亂の眞最中、私の妻は幾度も或る若い士官にキッスをさせるのを私は見付けた。

私はたまらなくなつて、此不幸なる奴等の頭上に玉突の棒を振廻した、そして說明を要求した。

『此方はあたしの幼馴染よ、親類よ！　どうぞ笑はれる樣な眞似はしないで下さいな！』とマリアは答へた。『それに、みんなの見て居る前でキッスするのはロシアの習慣なんですからね、そしてあたし達はロシアの臣民なんですもの。』

『嘘を吐け！』と一人の友達は叫んだ。『何、親類だつて？　御親類が聞いて呆れらあ！』

私はもう少しで人殺しになるところであつた。私はもういつそ……

……

然し、子供達を孤兒にしてしまふといふ事を思ふと、一旦振上げた腕も鈍つた。

客が去つてマリアと二人切りになると、私は彼女に相當な罵詈を浴せた。——

「賣女奴！」

「おや、何故？」

「賣女の樣な眞似をするからさ！」

「あなた嫉いてるのね？」

「無論、さうとも、僕は嫉いてる、嫉妬をして居る——僕の名譽の爲めに、僕の家族の品位の爲めに、僕の妻の名前の爲めに、僕の子供達の將來の爲めにだ！　お前があんな下等な眞似をするもんだから、立派な奥さん達はもう僕達を相手にしやしないよ。大勢の面前で、よその男にキッスをさせるなんて！　お前は分らないのかい、お前は狂人なんだ——何んにも見えず、何んにも聞えず、あらゆる義務觀念を棄てゝしまつて平氣でゐる以上は立派な狂人だ！　若しあんな眞似を止めなかつたら、僕はお前を押籠めてしまふからさう思へ、そして先づ手初めに、今後あんな女達と附合ふ事は一切嚴禁だぞ。」

「一體あなたがあたしを煽つてあの人を誘惑さしたんじやありませんか。」

「係蹄をかけてやつたのさ、そして驚かさうとしたのさ！」

「それにあなた、何か證據があつてそんな事をおつしやるんですか——あたしとあの人との間にあなたが疑つてる樣な譯があるといふ樣な？」

「證據、そんなものはありやしないさ。然し僕はお前の白狀を聞いて居る——お前の皮肉なあの話を。そしてお前の友達のZが僕に話して聞かしたじや無いか、あの女は國に居たら、風俗を害する生活の爲めに追放の刑に處せられるところだつたつて？」

「あなたは一體「罪惡」といふものを認めていらつしやらないやうに承りましたけれどね？」

「あゝした女達がそんな事をして慰みになるといふんなら、いくら慰んでもそれはかまはないさ、僕の家族に對して何の影響も無い間はね！　然しお前の所謂「特性」なるものが我々を不安ならしめるに至つた共際間から、それは我々にとつて有害な行爲となるんだよ。哲學者としての自分の考へでは、此世の中には所謂罪惡といふ樣なものは無くて、あるのは只肉體的及び精神的缺陷だけだといふ事は事實だ。そして近頃フランスの議會で此不自然な罪惡が問題に上つた時にも、主なる醫師は皆市民各自がその利益を害せられる場合を除いては、國法がそんな事に干渉す可きものでは無いといふ意見だつた。」

然し彼女にこんなお說教をしたつて何にならう――いつそ魚達に說教をして聞かした方がましだ。只動物的の本能に從ふより他に無いこんな女に哲學的の差別を知らせやうとかゝるなんて！

此やかましい評判の眞相をつかまへる爲めに、私はパリの或る腹心の友達に手紙を書いて、一切を打明けてくれるやうにと賴んでやつた。

その返事に私の友達は殘らず打明けて知らしてくれた――一般にスカンデナヴィア人達の信する所に依ると、私の妻が許す可からざる不自然な愛に傾いて居る事は事實である、それから、あの二人のデンマルク婦人は同性愛の婦人としてパリでも有名であつて、パリのカフェーで同傾向の婦人達と關係して居る。……

我々は宿屋に借りがあつて、そして現金を持合せなかつた、それで我々は逃げ出す事が出來ない。ところが恰も幸、例のデンマルクの婦人達は、近所の美しい娘を誘惑したといふので百姓達の怒を買ひ、止むを得ず俄に出發しなければならなく成つた。

然し彼等との交誼は既に八ケ月間も繼續して、そんなに無雜作に斷切る事は出來なかつた故に、又娘達は何れも良家の子女で立派な教育を受けたものであつた故に、尙又、彼等は我々の逆境の仲間であつた故に、私は彼等の去り際を名譽有る、花々しいものにしてやりたいと思つた。その爲めに或る若い畫家のアトリエで彼等の爲めに別れの宴を開く事になつた。

デザートになつて醉が廻つた頃、マリアは抑へ切れない感情を洩す爲めに起上つて、『ミニオン』の中の有名なメロデーに從つて作曲した一つの短い唄を歌ひ出した。彼女は其唄の中で愛する人達への別れを告げたのだ。

彼女は熱と眞の感情とを籠めて歌つた、彼女の扁桃形の目は涙に溢れて、きら〳〵と灯の影にまたゝいた、彼女はさながらハートを掴み出した樣な眞情の流露を以て歌つたので、私でさへも動かされて歡喜を覺えた。彼女の唄には純朴さが有つた、卒直さが有つた、此女が他の女に對する戀の唄を歌ふのを聞いて居ても、ちつとも穢はしい感じは浮ばぬ程に、それは人を動かす力があつた。そして不思議な事には、其時の彼女には「男女」らしい樣子も表情もまるで無かつた、それは只、愛して居る、柔しい、神祕的な、謎の如き、解すべからざる一箇の女であつた。

ところで此美しい戀の對象たる御本尊は、赤ちやけた髮の毛、男の樣な顏立、鉤鼻、圓い頤、黃色い目、過度の飲酒の爲めに腫れぼつたくなつた頬、扁平な胸、曲つた指……要するに、人間の想像し得可き最も醜惡なる怪物で、どんな下賤な男でも見向きもしまいと思はれる樣な女である。

歌ひ終るとマリアは此怪物の側に席を占めた、すると其れは立つてマリアの頭を兩手に抱へ込んで、口をあんぐり開いてマリアの脣を、キッスでは無くて、すば〳〵吸込んだ。少くとも肉感的な戀だ、と私は思つた。

私は此赤髪の女と一緒に飲んで、すつかり彼女を酔拂はしてしまつた。彼女は私の前に跪いて、大きな目でうろたへた様に私の顏を見上げて、それから壁の前に棒の様に突立つて、まるで白痴の女の如くにしく〳〵しやくり上げるのであつた。

私は未だ曾て人間の形をした物で斯くも醜惡なる物を見た事が無かつた、そして婦人解放運動に關する私の考へが定められた。

宴は往來に於ける一つの醜穢な出來事に依つて終りを告げた。畫家の娘が緣石の上に坐つて泣き哮えた。

翌日二人の女友達は出發した。

……

マリアは其後恐る可き危機を通過しなければならなかつた、それは實際私に同情の念を惹起するに十分であつた、それ程までに彼女は居なくなつた友達をなつかしがつた、それ程までに彼女は惱んだ。彼女は全く失戀のお芝居をうまくやつて見せた。彼女は惱ましげに一人で森の中をうろつき廻つたり、戀の歌をうたつたり、彼女の友が好んでよく行つた場所へ出かけたりして、深く傷けられたる心のあらゆる徵候を見せた——私は、氣が變になりやしないかとさへ思つて心配になつた位であつた。彼女は今や慰め難く不幸なのだ、私はどうしても彼女の氣を紛らす事が出來ない。彼女は私の愛撫を素氣無く退け、キッスをしやうとすれば、邪慳に突飛ばす。私は彼女が愛するあの友達を死ぬ程憎み始めた、あの女が彼女の愛を私から奪つてしまつたのだから。

マリアは之れ迄よりも一層無遠慮になつて、自分の失戀の哀愁を人の前にかくさうといふ氣は少しも無い。あらゆる彼女の言葉には彼女の失はれたる戀の歎きが反響する。實際、親しく見ない人には、とてもほんとうには出來ない様な話だ。

此懊惱の間に、彼等の間には熱心な手紙の交換が始まつた。あの女のお蔭で空閨を守らせられる苦しさに憤つて、或る日私は彼女の手紙に手を付けた。これこそほんとうの戀文だ！　私の小さな天使、私の兒猫、怜悧な、立派な、やさしい、氣高いマリア様——あの颱暴なあなたの御亭主は薄のろの動物です……等と。それから其手紙は、マリアは如何にしておびき出さるべきか、如何にして私から逃げ出すべきか……等といふことを細々と語つて居た。

私は猛然と此戀仇に向つて起上つた。其晩月光の下に、おゝ神よ、マリアと私との間に一つの爭鬪が、身體と身體との爭鬪が始まつた。彼女は死物狂ひに私の手に嚙り付いた。私はまるで猫を水の中へ投り込まうとでもする様に、彼女を川端まで引ずつて行つた——と、子供達の顏が私の心に浮び上つた、そして私を正氣に返らせた。

私は自殺の準備をした、然し死ぬ前に、私は自分の生涯を書いて置かなければならないのだ。

此書の第一部は完成した、すると丁度其時、デンマルクの婦人達が近所に家を借りたといふ評判が村中に擴がつた。

私は即刻荷物を整へた。そして我々は、ドイツに近いスウィスの方へ向つて旅立つたのであつた。

四

アールガウ洲の愛すべき土地よ！　其處はまことに彼のアルカデエンの如くに牧歌的情緒に充てる地である――郵便局長はその家畜の群を悠々と牧場に追ふ地、聯隊長は唯一つの貸馬車を町に驅る地、若き娘達は悉く純潔なる處女として結婚せんと欲する地、少年達は標的を射たり、太鼓を叩く地。……一の理想國、眞の武陵桃源、黄金色なすビールの泡立ち湧く國、腸詰の產地、九柱戲、ハップスブルグ家、ウィルヘルム・テル、鄙びた村祭、單純な心より生れ出る素朴な歌、牧師の妻及び牧師の家の牧歌の祖國！

我々のいら立つた心にもさすがに平和は歸つて來た。私は氣分が恢復した、そしてマリアも最早戰に倦んで、今や飾無き無頓着の氣分に浸つて居る。二人の間の破裂を避くる避雷針として罪の無い遊戲が家庭に引入れられた。そして我々は危險な會話をとり交す代りに賽を轉がして遊んだ。上等無害のビールが刺戟的なアブサンやワインに代つた。

環境の影響は直ちに感知せられた。人の生活が斯くも烈しい暴風の後に斯くも明るく快活になり得るものか、人間の精神的彈力が斯くも多くの打擊に堪へ得るものか、人間がその過去を斯くも容

易に忘れ得るものか……私は只々驚くの他は無かつた。私は自ら最も忠實な妻の最も幸福な夫であるとさへ思ひ込むに至つた。

マリアは此處では交際といふ程のものも無く、友達も無いので、何等の不平も無く母としての役目を再び引受けるやうになつた。一ケ月の後子供達は、彼等の母が裁つたり縫つたりしてくれた着物を着るやうになつた。彼女は子供達の爲めにその全時間を捧げて倦まなかつた。

彼女も今は衰へを感じ始めた、その享樂慾は減じ、成熟せる中年が目に付いて來た！　或日第一の糸切齒を失つた時の彼女の歎きは如何ばかりであつたらう！　あはれなマリアよ！　彼女はさめさめと泣き沈んで、私をその腕に抱いて、どうぞいつまでも可愛がつてくれと哀願した！　彼女は何時の間にかもう三十七歳になつて居るのであつた！　髮の毛は薄くなつた、乳房は嵐の後の浪の如くに低く落ちた、曾てはあんなに美しかつた小さな足は階段の昇降にも疲れた、肺ももう以前の樣な壓力を以ては働かないのだ。私自身は今や我が更生の、第二の春を迎へんとして、男性としての力は生じ、健康は榮える男盛りに至つたとは云へ、彼女は今度こそ私の――私と子供達だけの物となるのだといふ事を思ふと、私は彼女を一層いとしく思ふ樣になるのであつた。彼女は今やあらゆる誘惑から保護せられ、私の心遣ひにとり圍まれて、止む無く此まゝに年老い、その生涯を子供達に捧げる樣になるのであらう！……

彼女が本心に立歸つたらしい徴候は色々のいぢらしい姿に於て現れた。未だ三十八歳の比較的若い男を夫として居る事に潜む危險を豫知して、之れ迄の樣に冷淡な無關心では無く、時々は私に對しても嫉妬の心持をほのめかす樣にもなり、お化粧にも身を入れ、夜私を迎へる事が出來るやうにと、晝の間に色々の準備をすることを怠らなかつた。

然しさうした狀態に在つても、土臺私の天性が一夫一婦的に、眞に一夫一婦的に出來て居るので彼女は私に就いて何等の心配もする必要は無かつたのだ、そして私はその地位を濫用する樣な眞似は決してやらずに、私の再び若返つた愛の多くの證據に依つて彼女の心を靜めつゝ、殘酷な嫉妬の苦みから救つてやる爲めに私の全力を盡したのであつた。

× × ×

秋になると私はフランスに近い方のスウィスの地方に研究旅行をやる決心をした、それは三週間の豫定で、毎日宿を換へる筈であつた。

マリアは今以て私の健康は恢復しないといふ妄信に捕はれて居て、そんな無理な旅行は止めにするようにと一生懸命に說き立てた。

『そんな事をしたら死んでしまひますよ、あなた！』と彼女は私に繰返した。

「死ぬかどうかまあやつて見よう！」

此旅行は實は私にとつては名譽を爭ふ重大事であつた、男性的なる物に對する愛を彼女の中に再び呼起し、彼の不自然な傾向を打破して再び彼女の身心を自分の物に取返さうといふ試みであつたから。

……

私は此旅行に於て殆ど信ずる事の出來ない程の苦行を重ねて顏は蒼色に焦げ付き、身體は丈夫に元氣になつて歸つて來た。

彼女が私を迎へた時、彼女の目は讃美する樣に、又挑みかけるやうに私を眺めた、然し忽ち不快な失望の色に變つてしまつた。

私は之れに反して、三週間の節制の後、戀人として、再び見出されたる妻として彼女を取扱つた。私は×××××××××××××××、四十時間の間斷無き旅を續けた疲勞の後ではあつたけれど、勝利を以て×××××××××。彼女はそれに對して云ふべき言葉を知らない、彼女は只あつけに取られて居る、彼女はその眞の感情を見せてしまふ事を恐れて居る、その夫の中に「克服者」が目ざめはしないかといふ事を思つて恐れて居る。

私は再び我れに返つた時、マリアの顏の表情が變つて居るのにふと氣が付いた。私はためす樣に彼女の顏を覗き込んで見た、そして彼女が入れ齒をした事に氣が付いた、それが彼女を以前よりも若く見せたのである。それに又彼女の服裝や化粧の或部分に變な一種の嬌態が潜んで居た。それが私の注意を喚起した。私は其原因を探つた、そしてマリアが親交を結んで居る十四歳足らずの小娘を見出した。彼等は互にキッスもやれば、一緒に散歩にも出かける、それから一緒に入浴もするのであつた。……

私は再び家族を引連れて、即刻此地を去るべく餘儀無くせられた。

五

我々は今フィールワルドシテッテ湖畔の或るドイツ人の下宿に住んで居る。

此時新たなる逆轉が現れた――然も最も危險なる逆轉の一つが。

同じ家に一人の若い士官が泊つて居る。マリアが早速此男に媚を呈して、彼れと九柱戯などをやつたり、私が仕事をして居る間は、如何にも物思ひに沈んで居るといふ風をして一人ぶら〳〵庭を散歩したりして居る。

食卓では、彼等二人は言葉こそ交さないが、互に目と目に物を云はして居るのに私は氣が付いた。まるで彼等は目に依つて戀し合つて居るかの如くに見えた。私は彼等をしかと試してやらうと決心して、突然私の頭を彼等の頭の間に突込んで、妻の顏を鋭くきつと見詰めた。すると彼女は私の視線を外らす爲めに其目をつと士官の顏から辷らして、或る釀造場のポスターがかかつて居る壁紙のあたりまで持つて來て其處に視線を休めた。そしてこんな意味も無い愚問を發して間の惡さから自分を救ひ出さうとする。――

『新しく出來た釀造場でせうか？』

『うん……然し、それで僕の目をうまくごまかした積なら、飛んだ間違だよ！』と私は云返してやつた。

と、彼女はまるで私が手綱でも引いたかの如くに、がくりとうなだれて、如何にも困つた樣に默つてしまつた。

それから二日ばかり過ぎた或る晩の事である。マリアは、今夜は疲れて居るからと云譯をして、おやすみのキッスをしてから彼女の室へ退いた。私は横になつて、少し讀書をしてから寢入つた。

突然私は睡りから起された。サロンでピアノを彈いて居る者が有る、それから誰かゞ歌つて居る――マリアの聲だ。

私は跳ね起きて、女中を呼んで、直ぐに妻のところへやつた。――

『早く奥さんに云つて來てくれ、直ぐに止さないと、僕が出かけて行くからつてね――そして大きな棒を持つて行つて、みんなの見て居る前でうんと躾をしてくれるからつて！』

するとマリアは直ぐに上つて來た、そして顏を赤くして、罪の無い女の樣に見せかけて、何故あんな變な事を云つてよこしたのか、何故友達と一緒に、他の奥さん達も居る所に居てはいけないのか、と食つてかゝつた。

『それがいけないといふんじや無いよ、僕を邪魔にしてサロンから追拂はうとするお前のずるいや

り方が氣に食はないんだ！』

『あなたがさうおつしやるなら、ようございます、あたし直ぐにやすみますから！』

此卒直さ、此突然の服從！　一體此女はどんな事をして來たんだらう？……

×　×　×

秋の次ぎには、雪の多い、暗い、淋しい冬がやつて來た。我々は此あまり大きく無い宿屋の最後の客として、二人切りになつてしまつた。食事は寒さの爲めにレストーランの方の入り込みの廣間でとる事にした。

或る日朝の食事の時、がつしりした體格の、一見雇人らしくは見えるが可なり美しい容貌の男が一つの食卓に腰を下して、葡萄酒を一杯註文した。

マリアはいつもの放縱なやり方で、じつと其れを見詰めて、まるで尺でも量る樣に其男の身體をじろ〳〵眺め廻してから、何かじつと思案に沈み出した。

其客は間も無く出て行つた、見知らぬ婦人にあまりじろ〳〵と見守られたので、明かにどぎまぎしながら。

『美男子ね！』とマリアは亭主の方へ振向いて云つた。

『以前うちの門番だつたんです！』と彼れは答へた。

『おやほんとうに？　全く立派な男だわ、とてもそんな事をして居る人とは見えませんわ！　ほんとに好い男ね！』

それから彼女は尙も細かい事をそれからそれへと云出して、其男の男らしい美しさを褒めたゝへたので、亭主もびつくりしてしまつた。

翌朝廣間へ入つて見ると、昨日の先生はもうちやんと其席に坐り込んで居る。

晴衣を着て恐しくめかし込んで、頭や髭を綺麗に手入れして、私の妻の心を征服してしまつたといふ事をもうちやんと承知してゞも居るかの如くに納まり返へつて居る。彼れは我々に會釋した、妻は鄭寧にそれに應へた、すると彼れはまるでナポレオン皇帝にでもなつたかの如くにふんぞり返つて威張り出した。

三日目には、彼れはいよ〳〵火蓋を切る覺悟でやつて來た。如何にも門番らしい趣味とそれにふさはしい恭しい態度でマリアに話し掛けた、此男は、女房を射落さんとすれば先づ亭主の方から手に入れにかゝる慣用手段に依つて時間を空費する事無く、短刀直入的に妻の方へ向つて直接談判と出かけたのである。

實際とても信じられない樣な話だ！

然し事實は――マリアは夫や子供達の居る前でそんな男と面白相にべちやくちやしやべり出したのだ。

どうぞお前の名譽を守つてくれと願ふ樣にしながら、私は今一度彼女の目を開けてやらうと試みた。すると彼女の答へは例に依つて例の如きものであつた――『あなたはほんとにいやらしい方へ方へとばつかり氣を廻していらつしやるのね！』

すると聞も無く第二のアポロといふ可き男が助けにやつて來た。此男は村の煙草屋で、づんぐりした小男で、マリアがよく一寸した小買物をする店の亭主であつた。此男は例の門番の男よりは一段上手で、先づ私から手に入れやうとかゝつた、そして此男はもつと大膽でもあつた。初めて出逢つた時彼れは厚かましくもマリアの顏を孔のあく程見詰めてから、高い聲で亭主に叫んだ。――

『ねえ、何て綺麗な家族だらう！』

マリアの心には直ぐに火が點いた、そして此村の紳士は其後日毎にやつて來る。

或る晩彼れは醉つて居た、從つていつもよりも一層無作法であつた。我々が雙陸をやつて居る所へやつて來て、その遊戯のやり方を說明してくれと云つた。私は出來るだけ彼れの氣に障らぬ樣に鄭重な言葉を使つて、彼れを遠ざけやうとした。すると其男はおとなしくもとの席に歸つて行つた。マリアは私よりも感じ深く、其「侮辱せられた人」に對して何とか申譯をしなければならないと心得

て、早速に浮んだ問ひを彼れにしかけた。――

『あなた玉突きをおやりになつて？』

『いゝえ、奥さん、やつても拙いんです……』

それから彼れは立上つて、我々に近寄つて來て、シガーをすゝめた。私は斷つた。

『あなたは如何ですか、奥さん！』

彼女の爲めにも、其煙草屋の爲めにも、それから私の家族の將來の爲めにも仕合せだつた事には妻も私と同し樣にそれを辭退した、然ししなを作りながらの感謝の言葉を以て。

どうして此男は、レストーランで、一人の婦人に、その夫の面前でシガーをすゝめる樣な大膽な眞似を爲し得るのであらう？

それとも此私が並外れの嫉妬燒きの阿呆者なんだらうか？　或は、彼女は出逢ふ程の如何なる男の情慾をも煽り立てる程に劣等な嬌態を見せるのだらうか？

我々の室へ退くと、私と彼女との間に一場面が演出せられた。彼女はまるで夢遊病者だ、どうしても私が呼醒してやらなければならないのである。彼女は自ら意識せずして眞直に破滅の淵へと進み行く。私は彼女の行動を微に入り細を穿つて解剖して、その新しい罪や古い罪を發き立てた。

一言も答へずに、眞蒼な顏をして、夢見る樣なうつとりした目をして、彼女はおしまひまで私の

話に聞き入つた。それから起上つて、寢る爲に下へ降りて行つた。然し此度は――私の生涯に於て之れが初めてだ――私は探偵犬の樣な卑しい眞似をしてしまつた。私はそつと階段を降りて行つて彼女の部屋のドーアの前に立つて、鍵孔から中を覗き込んで見た。

ランプの光をぱつと浴びて、子守女が私の眞正面に、善く見える樣に坐つて居る。マリアはひどく興奮して、部屋中を歩き廻り、私の不當な疑惑に就いて一生懸命にしやべり立てゝ居る、彼女はまるで自らを辯護しつゝある被告の如くであつた。彼女は頻に私の云つた言葉を繰返した、それを殘らず吐出してしまつて、早くそれから釋放せられてしまはうとするかの如くに。

『それでもあたしは惡い事はしなかつたのだ、惡い事はちつとも！……惡い事をする氣にさへなれば、其機會も無くは無かつたんだけれど……』

それから彼女は二つのコップにビールを注いで、子守女とコップを觸れ合せた。それから彼女は子守女の側に坐つて、×××××××。×××××××××、×××××××××××××××××××××××××、×××××××××××××××。……

情無いマリアよ！　不幸なる彼女は、私を見棄て、彼女の良心の苛責を醫し得る唯一人の此私を見棄てゝ、こんな所にその慰めを見出さんとして居るのだ。と俄に、彼女は起上つて、耳を澄してドーアの方を指して云つた。――

『誰か居るらしいわ！』

私はそつと離れた。

私が再びもとの觀察地點に立歸つて覗き込むと、マリアは半ば裸體になつて、子守女にその肩を見せびらかして居るのが見えた、然し子守女はそれに心を動かされたらしくも無かつた。それから彼女は再び辯護をやり出した。――

『あの人はどうしても氣が變になつてるらしいわ！　たとひあの人があたしに毒を盛らうとしたからつてちつとも不思議はありはしないわ……あたし、時々たまらない程胃が痛むことがあるのよ……けれど、まさか、あたしそんな事を信じたくは無いわ……あたしいつそフィンランドへ逃げてつてしまはうかしら……ねえ、お前、どう思つて？　けれど、そしたらあの人、死んぢまふわ……そりやあの人、子供を可愛がつてるんだもの！』

之れ良心の苛責に非ずして何ぞ？……有らゆる祕密の思に責めさいなまれ、恐怖に捉へられて、彼女は他の女の胸に隱れ家を求めんとする！　淪落の女、不貞なる罪の女――然し、何よりも先づ不幸なる女！

私は懊惱のあまり轉輾して一夜を遂に睡らずに明した。朝の二時頃に至つて、マリアが惡夢に魘されて物凄い叫を揚げ始めた。私は可哀相になつて彼女を惱ます夢魔を追拂つてやる爲めに壁をど

んどん叩いた。こんな事は之れが初めてでは無かつた。

翌朝彼女は、私が彼女を目さましてやつたのを有難うと禮を云つた。私は彼女をねんごろにいたはり、憐み乍ら、いつまでも强情を張通さずに、彼女の最上の、唯一の友たる自分に向つて心の苦みを何も彼も告白してしまつた方が善くは無いかと云つた。

『何を告白すればいゝんですの？……だつてあたし、何もそんな事を申上げる覺えが無いんですものの。』

彼女が若しも此時洗ひ浚ひ私に白狀してくれさへしたら、私は彼女に一切を宥したであらう、彼女の良心の苦悶は實にそれ程の同情を私に惹起したのだ、彼女が犯した如何なる罪にも係はらず、否むしろ、其淺ましい罪の故にこそ私は彼女をそれ程までに深く愛したのである。それは只不幸な女に過ぎなかつた！　決して惡い女では無い、不幸な女に對して、どうして手を擧げる事が出來やう。

然し彼女は思切つて私を烈しい疑惑から釋してはくれずに、相變らず頑固な抵抗を試みた。彼女はもう私を氣が狂つて居るものと思ひ込んでしまふ程になつて居るのだ。自己保存の本能は彼女をして眞實を包む架空の物語を揑造するに至らしめ、それが偖に良心の苛責を免れる爲めの彼女のはかない賴みとなつて居るのであつた。

太陽を目ざして

フィールワルドシテッテ湖畔のゲルザウの村には、三週の長い〳〵間太陽の光がさゝなかつた、十月の初めアルプス颪が吹き出した頃からもう日の光を仰ぐ日は一日も無くなつたのだ。其日太陽が沒してからは風全く死し、私は半夜をすや〳〵と睡り續けた、と寺の鐘の音と物騷しさに目をさまされた――それはあの獨特な暴風の叫喚で、アルプスの山々を超えて轟とばかりに南の湖畔に吹付けられ、一旦湖の釜中に壓搾せられてから再び村の小路の隅々にまで吹込み、招牌類をがたん〳〵叩き付け、窓の戸をゆるがし、屋根瓦を捲上げ、木々の梢や叢の中に唸つた。湖の浪は俄に狂湧して防波堤に突あたり、岸を超えて泡立ち騷ぎ、小舟に跳返つた。飛散る砂塵は窓硝子を叩き、木の葉は空中にきり〳〵舞上り、ストーヴの扉は煽り、家屋は搖れた。窓から外を覗いて見ると、寺の窓々は灯に明るく、鐘は續け樣に鳴り渡つて、未だ目ざめない村の者を起さうとして居る。何故ならば此アルプス颪といふ奴は此地方では地震と同じ程に危險なものとせられて居る、それは家屋を吹倒し、あまつさへもつと困つた事には、山から大きな岩の塊を吹飛ばしさへもする、そして我々が丁度麓に住んで居る其山は、高さは千五百メートルに過ぎないが、その峰や頂には、大仕掛の石

拵げには持つて來いといふあんばい式に、岩塊がごろ〳〵重疊して居るのであつた。さしもの狂風も三時間猛り狂つた後に危險は過ぎた、そして翌朝村の噂に依ると、シュヴィーツの或る百姓家の眞中を大きな岩塊が貫いて、右翼の方をすつかりさらつて行つてしまつたが、幸左翼に住んで居た家族は無事であつた、といふ。

此恐しい、生溫い狂風の後に霧が村と湖とを一面に立罩めた。空は一面にかき曇つて居るが、雨は一滴も降らない、その代り日光も全くさゝない。そんな天候が三週間續いた、そして一切の物を灰色に見るに始まつたとすれば、それを眞黑に見るに終つた。之れまでは、見る人の心を引立てたアルプスの風物も、百メートル彼方の岩を望み見る事さへも出來無くなつてしまつた今では、全くその性質を失つて、人の心は重々しく垂れ込めた。總べての旅人は故郷へ故郷へと急ぎ、ホテルはがらあきになつて、早くも十一月がやつて來た——望無く陰暗なあの十一月が。薄暗い日はさつさと暮れるといゝ、早く明るい灯の色を見たいと人々は毎日願つた、空は暗澹として何時になつたら晴れ行くか望さへ無く薄暗く、湖も薄暗く、四邊の風物も皆薄暗い。

風も無く、雨も無く、雷鳴も無い。之れまではあんなに變化に富める自然が、今は堪へ難い程に單調で、平靜で、死せるが如くに寂として聲も無い——いつそ地震でも有つてくれゝばいゝ、とさへ思ふ位に平和である。光の源が最早働かなくなつた今では、有らゆる物の色は失はれた、目は鈍り、精神は懶惰に似たる倦怠に垂れ籠められる。

或る晩私は此土地の或る役人に向つて、長い間太陽の光を見る事の出來ないのをこぼすと、彼れは此地方の人に特有な落付いた調子で答へた。——

『太陽！　太陽なら、ホッホフルーへ登りさへすれば、一日見て居られますよ。』

ホッホフルーといふのは、我々が住んで居る谿谷をめぐる小アルプス山脈の一つの峯で、ズリテルマよりも二百メートルばかり低い、それで若い英國人なぞがよく遊びに出かける山である。太陽崇拜者なる私は、太陽を目ざして巡禮をやらうと決心した、そして十一月の或る朝早く出發した。

先に述ぶるが如く、何時でも岩石の雨を降らす恐しい火山と變じ得る此山の麓に住んで居るザルザウの村人は、昔から、何時死んでも差支無いといふ樣な覺悟に慣れて、毎日朝、午、晩の三度は缺かさず寺に詣でる習慣になつて居る。それで此朝も八時頃、手に〳〵祈禱書を持つた參詣人達に澤山出逢つた。半マイルも遠い所から朝の參詣に出かける二人の老婆は、往來で珠數を爪繰つて居た。その一人がアヴェ・マリアを唱へると、他の一人はそれに應じてイン・ザエクラ・ザエクロルム・アーメンといふ折返しの文句を入れる。そして此アヴェ・マリア……アーメンのお題目を繰返しながらお寺までの道中をやつて行くのだ！　さうした文句を繰返したところで、何の御利益が有る譯でもあるまいけれど、少くとも此お婆さん達が無益な饒舌に舌を動かすといふ事だけは防げる譯である——私は計

らず、或る殿様が酒倉に入る家來には間斷無く口笛を吹かせたといふ昔話を思ひ出させられた。

此老人達と街道とを見棄てていよ〳〵登りにかゝると、私は早速、鋭い忘れ難い印象を殘すものに打つかつた。其れは、第一の曲り角に立つて居る胡桃の木で、それにはキリストの像と銘を書いた板とが打付けてあつて、百姓ゼッピといふ者が此胡桃の木から落ちて死んだといふ事が書いてある。神よ、あはれなる此男の魂を救ひ給へ、アーメン！

其次の曲り角には、白塗りの煉瓦でこしらへた小さな、不思議な格好のお堂が立つて居る、それはまるで子供のこしらへた人形の家の様な感じのするものである。格子から中を覗き込むと、聖家族の繪が祭られてある、多分十六世紀頃の繪であらう、そして其側には、死刑に處せられる者が刑場への途中此御堂の前に立止つて、しばし最後の祈念を凝す事を許されるといふ文句が掲げられてある。そんなら私の今歩いて居る途は仕置場へ行く途なのだ。そして數分間にして私は其刑場に達した。それは湖の方へ突出せる山の一角に在つて、人の魂を奪ふが如き美しい見晴しの、開けた場所である。ピラトゥス、アクゼンシトック、プオルゼルホルン、ビュルゲンシトック等の峯から峯へと見はるかす斯くも素晴しい眺めを最後の一瞥として此世に暇を告げる事が出來るなら、死ぬのもいつそ一つの享樂と云つてもいゝかも知れない。人知れずひそかに縊り殺される事は何より厭だ、と云つたあのヴォルテールだつて、此處で殺されるのなら、其不滿は洩さなかつただらう——彼れがルーソーの虚榮を非難して、若し其名が絞首臺に掲げられさへしたら、彼れは喜んで自ら死に就いただらうといふ樣な言葉を用ゐたのも、從つて偶然では無いのだ。こゝより遙に下の方の岸に近く、子殺し寺と呼ばれる氣味の惡い寺の輪廓がぼんやり見下される、そこで昔悲哀のどん底に沈んだ一人の父親がその餓ゑ切つた子供を自分の手で殺したといふ事が云傳へられて居る。

以上合せて四つの物悲しい或は血生臭い光景を灰色の朝の光の中に背後に殘して、私は太陽が輝き待つて居る明るい處へと足を早めて登つて行つた。

栗の木や胡桃の茂る地域は間も無く通過して、山毛欅（ぶな）の林が始まつた。私は美しい牝牛や汚い犬等が居る牧人小屋に休憩してから、いよ〳〵雲界に突入した、それは霧（ネーベル）と稱する物に成つて、だんだんと濃くなり行き、遂にあたりの風景をも見え無くしてしまふ。物の姿を見定めやうとする努力の爲めに目は痛む、木々や叢は雲煙の中に模糊として姿を沒し、梢から梢へと張渡された無數の蜘蛛の巣の網には隙間も無い程に雨滴が光つて、若し實際に森の老婆といふ樣なものが有るならば、彼女が幾千萬とも數知れぬレースハンカチーフを木の枝に乾かす爲めにかくもかけ連ねたのかと思はれるばかりであつた。

山霧は呼吸を苦しくし、上衣や髪や髭や睫毛にまでもうるさくかゝつて、不快な、かび臭い匂を擴げ、石に降りては足元も危い程につる〳〵辷らせる。森の内部の有らゆる物は朦朧と消え去り、

木々の幹は見えると思ふ間も無く又直ちに其中に影を沒して、眼界を僅々數ヤードの狹さに縮めてしまひ、濃淡も無い單調な薄墨唯一色に呑まれてしまふ。

凡そ千メートルの幅を有する此霧の層――天に達するまでには是非とも通過しなければならぬ此濡れて冷たい煉獄を私は辿り登らなければならないのであつた。然も私は、アルプスが終つて、灰色の虛無の境が始まる前には、必ず其區域が終ると云つたあの役人の言葉に飽くまでも信賴して、喘ぎ喘ぎ登つて行くのだ。

私は氣壓計は携へて居なかつたが、大分の高さまで登つて來た事を感じた、濃霧は大分稀薄になつた、そして私は追々に清らかな空氣に近付いて來た。貴い酒の醉心地が私を捕へた、そして今、狹い山路の上から、さながらほの〴〵と明け行く朝の光が搖上げ戸の風景畫をぼんやり照し出す樣な微光がさし始めた。木立の姿もはつきりして來た、目も今迄よりは遠くを見る、耳には牝牛の鈴の音がチリン〳〵と聞え出した――上の方からだ。そして、見よ、はるかの頭上には金色の雲が輝く。足を早めてもう數歩――破れたる太陽の光の流れが黃色く散り殘つた木の葉の上に落ちる時、山毛欅の下生は金と銅と青銅と銀の光に輝く。私は今秋の日の冷さと濕ぽさの中に立つて居る、然も太陽に灼付けられる夏の景色を目の前に見る――其刹那、私は曾てメーラル湖上を帆船で渡つた時の事を思ひ出した、其時私は赫々たる太陽の光を浴びて居た、然も其時船の側の方錨索程の距離の所を霰交りの黑い夕立がさつと湖の面を打つた。……今私は太陽の光を眞面に浴びて立つて居る。上には、はりもみの木や白樺の繁る北方の景色を見る、赤い牝牛達の遊んで居る綠の牧場や小さな褐色の小屋を見る――年取つた婦人はその敷居際に日向ぼつこをしながら、テッシン州で働いて居る父ちやんの爲めの靴下を繕つて居る、それから馬鈴薯の畑とラヴェンデルの茂りとダリアと金盞花とを見る。

そして私は太陽に私の髮と外套とを乾させ、未だ凍えて居る身體を溫めさせた、私は萬象を生み育てる燃ゆる太陽の前に帽を脫いだ、――それは永遠に燃え續ける水素の焰から出來て居るのか、それともまた未だ認識せられざる元素ヘリウムから出來て居るのか、そんなことはどうでもいゝのだ！　女無くして世界の身體を生める最高の父よ、生と死とを與へ、寒暖、夏冬、豐凶を定むる萬能の支配者よ！

私は斯くして夏の氣分と綠の草原とに目を樂ませた後に、今辿り來つた、足下の暗い奈落を俯して見た。こゝからは見えない湖の上には暗さと冷たさとが一面に擴がつて居る、然しながら、それは此處から見ては最早暗くも冷たくも無くて、光り輝く雪白の羊毛の如くに、矢張り同じく上の方から太陽に照されて、汚れた下界を蔽ひかくして居るのだ。そして白い雲の褥の上には、雪を頂くアルプスの峰の二つ三つが雲を破つて光つて居る――矢張り同じ樣に深く立罩めた銀の霧に圍まれ、空

氣と日光の溶液から結晶し、新たに降積める雪の海に流れ漂ふ浮氷の如くに。それは實に文字通り塵界を超越したる光景である、それに對しては白樺の木蔭の牝牛の鈴の牧歌的情調さへも平凡なものになつてしまふ。

と忽ち、此山上には死せるが如き靜寂が支配せる後に、下の方から——悲しき人間共が灰色の空の下に戰きつゝ蠢いて居る下界の方から、何やらぴちや〳〵する物音が聞えて來た、それはだんだん上の方へと近くなつて、雲の褥の底を通して目で追ふことも出來るやうにさへ思はれた。それはまるで水車の音の如く、雨に水增す小川の流れの如く、又は、潮滿ち來る浪の音の如くに響いて來る！　今や一つの叫聲が下界の方から登つて來る——それはさながら此湖をとり圍む四州の全住民が聲を揃へてウリロートシトックの峯に向つて救を求むる叫喚の如くに聞える、然し其れは實は外輪ボートの汽笛の音に過ぎなかつた、そして此ホッホフルーの峯が雲の層を突拔けて、淸澄な空氣の中に漲り溢れる反響を幾重にも折返して、斯くの如くに響き渡らせたものであつた。

そしてもう正午である。

私は再び山を下らなければならない、深い霧を通して下らなければならない——暗黑へ、陰濕へ、穢土へと……そして其處では太陽の光を仰ぐ事が出來るまでには、恐らく又三週間も待たなければならないのだらう！

六

新年を迎へてから我々はドイツへ向つて旅立つた。ボーデン湖畔に我々は居を定めた。

家長權が今猶行はれて居る軍國主義の國なるドイツに來ては、マリアは俄に肩身が狹くなつた。此處ではもう女性の權利だとか何とかいふ寢言に耳を傾けて感心して居る人間は一人も居ない。此處では丁度其頃若い女が大學の講義を聽く事を禁ぜられる事になつたばかりであつた、こゝでは士官の夫人の持參金は、自由に處分する事の出來無い家產として、陸軍省に保管せられるといふ樣な事が平氣で行はれて居る國である、此處は、家計を維持する夫のみが國家の官吏に任命せられる國である。

マリアは此處へ來ると、まるで陷穽にでも突落されたかの如くにもがき出した。何とかして私をうまく云ひくるめやうとする彼女の第一の試みは、脆くも婦人達に說伏せられて、破れてしまつた。私が婦人連に自分の味方をせられたのは、生れて此時が初めてである。そして、かうなつてはもうマリアは手も足も出無くなつてしまつた。士官達と親しく交る事に依つて私の元氣は恢復し、順應作用の結果として、私は男性的の態度や動作を取返す樣になつた。十年間の長き年月、精神的に殆

ど去勢せられて居た男性が再び私の中に勃起した。

同時に私は、マリアが欲する如き頬髭は止めて、例の獅子の如き立髪を自由に蔓るに委した。ヒステリー女の御機嫌を取結ばうとする間斷無き習慣の爲めに半ば失はれてしまつた私の聲量は、再び朗々たる響を回復した。落窪んだ頬は豐になつて來た。最早四十の坂に近付かんとする年齢にもかゝはらず、私の體格は却つて全體に於て發育して來た。

同じ家に住んで居る婦人達と知己になつて、私はよく彼等の會話に仲間入りをする樣になつた、之れに反してマリアは、之等の婦人達にあまり好かれず、とかく遠ざけられ勝ちであつた。

彼女は私を恐れ出した。或る朝、我々の結婚生活の最近六年間には未だ曾て無かつた事だが、彼女は私が未だ床に入つて居る間に、すつかり身仕度を整へて私の寢室に顏を出した。私は此思掛無き現象の理由を解する事が出來なかつた、我々は烈しく云合つた、すると彼女の言葉の端に依つて想像すると、彼女は毎朝私の寢室のストーヴに火を入れに來る女中に嫉妬して居るらしい事が解つた。同時に彼女は、私の近頃の樣子が一體に氣に食はないと云出した。

『あたし男らしいといふ事が大嫌ひなんです、そしてあなたがいやに威張りくさると、あたしもうあなたが厭になつてしまひますわ。』

然り、然り、彼女が愛したのは――若しいさゝかでも愛したとすれば――常にお小姓であり、小

犬であり、弱き者であり、彼女の「坊や」であつたのだ。婦婦は由來その夫に於ける男性的なるものを愛しないものである――たとひ他の男の場合に於ては之れを熱愛し崇拜してもである。

私は周圍の婦人達に益々氣に入られて來た。私は好んで彼等と交り、眞の女からのみ發する氣持のいゝ溫情にすつかり包まれてしまつた――彼等こそ、男子がひとり女らしき女にのみ感じ得る敬愛の念と、純眞なる恭順の念とを注ぎ込む樣な婦人達であつたのだ。

× ×

其時我々は再び故國へ歸る可きであるかどうかを相談し始めた。私の昔の不安が再び甦つた、昔の我々の友達と又友情を結ぶ事を私は躊躇した、彼等の中には或は妻の情人も交つて居るかも知れないといふ事さへも私には解り兼ねたのだから。此定かならぬ不安に結末を付けてしまふ爲めに、私は精密な證人訊問を始めやうと決心した。

既に其以前にも私は、妻の不貞に就いて專らなる彼の風說に關して、シュウェーデンに居る數名の友人に向つて質問を發したのだが、無論彼等から僞らぬ答へを誘き出す事は不可能であつた。

人々は只「母」に對してのみ同情を寄せた！ 「父」を滅亡に陷れんとして脅す彼の笑ふべき風說なぞに就いて誰が心配する者があらう？

此詮索に於ては最新の心理學と共に讀心術を應用して見たら、といふ事を私はふと思ひ付いた。私は晩に婦人達などと一緒に集つた席上で、ピショーフ一派の方法を、一種の遊戯であるかの如くに何氣無く持出して應用して見た。マリアはそれに疑惑を抱いた。彼女は私を降神術士と罵つたり、迷信的な自由思想家だと云つて責めたりして、ふさはしからぬ亂暴な言葉を浴せ掛けた――つまり彼女の身にとつて危險だと見て取つた此實驗を避ける爲めに、あらゆる手段を盡したのである。

彼女に油斷をさせる爲めに、私は彼女に負けた風を裝つて、催眠術を止めてしまつた、いつか彼女が油斷して居る時に、二人切りの所で彼女の不意を襲ふ爲めにである。

或る晩、食堂に二人だけがさし向ひになつて居た時、私は話を自然に體操術の方へと持つて來た。大分熱心に云爭ふ程に彼女の興味をそゝのかした後に、私の意志の力に作用せられた爲めか、それとも私の暗示に從つて當然生ずる筈の連想作用の爲めか、彼女はマッサージに就いて話し出した。其話から彼女の連想は直ちに、マッサージに依つて惹起される苦痛の方へと飛んで行つた、そして、醫師の手術を受ける場合を回想して叫んだ。――

『えゝ、ほんとうに痛いのよ、あのマッサージは！　思ひ出したばかりでも痛くなる位ですわ……』

もう澤山！　彼女は俄に死人の如き蒼白さをかくす爲めに首をうなだれる、彼女の脣は無理に何か他の事を云はうとするが、適當の言葉が見付からないので、びく〳〵慄へる、彼女の目は眩しげにぱち〳〵瞬く。之れこそ――私が發車せしめて蒸汽の全力を以て初から目ろんだ方向へと走らせた思想の列車である。彼女は一生懸命にブレーキを掛けやうとするがもう遲い。既に深淵は目の前に口を開いて居る。然も機關は止まらない。あらん限りの努力を以て彼女は身を起し、じつと捉へて動かさない樣な私の眼光から身を振りもぎつて、一言も云はずに室から出て行つてしまつた。

命中した。

數分の後彼女が歸つて來た時には、その顏色から緊張は消えて居た。彼女はマッサージの効果を實驗して見せて上げると云ひながら、私の椅子の背後に廻つて、私の額を撫で出した。然るに彼女の爲めには恰も惡く、我々の前には鏡が立つて居る。私はそつと其方へ目をやつて見た、すると彼女の困惑して血の氣を失つた顏色がさつと映つて、そのうろたへた眼は一生懸命に私の顏色を窺はうとする……そして二人の探り合ふ樣なまなざしが鏡の中でひたと交叉した。

何時もの習慣にも似氣無く彼女は子供の樣に私の膝の上に坐つて、甘える樣にその腕を私に捲付けて、ひどく睡くなつた、と囁く。

『お前どんな惡い事をしたんだい、こんなに僕に甘えかゝるなんて？』と私は問ひかけた。

すると彼女は額を私の胸にこすり付けて顏を隱した。それからキッスをして、おやすみを云ひながら出て行つた

之れだけの證跡に依つては此女を裁判官の前へ引出す譯には行かない事は事實であらう、然し、彼女の本質を一から十まで掌中に握りしめて居る此私にとつては、それだけでも彼女の罪を證するに十二分なのだ！

おまけにこんな事實まで有るからには尙更の話だ――といふのは、あのマッサージ先生は、私の義弟の妻に對して怪しからぬ振舞をしたといふので、近頃その家からも追出されたといふのだから。

× × ×

私は自分の名譽を臺無しにしてしまふかも知れぬ冒險を避ける爲めに、斷じて故國に歸らうとはしなかつた。其處へ行けば、曾て我が妻の情人であつたかも知れないといふ疑のかゝつて居る男達と毎日顏を合せて居なければならないだらう、それは私にとつてたまらない事であつた。妻に欺かれたる夫をとり卷く有らゆる嘲笑から免れる爲めに、私はウィーンをさして落延びた。

ホテルにたつた一人切りで居ると、私は又も渴仰せる昔の女の幻影に惱まされ出した。ちつとも仕事をする氣にならずに、私は彼女に手紙を書き出して、毎日二通の手紙――といふのは卽ち戀の手紙であるが――を書き送つた。見知らぬ此古い都は私にとつてまるで墓地の如き感じがする。私はさながら幽靈の如くに群衆の中をさ迷ひ歩いた。と、突然私の空想が動き出して、此寂寞境を人を以て充し始めた。私は此死せるが如き周圍の中へマリアを持來す爲めに、一の詩的な物語を空想に描いた。と忽ち、建物や人間等の不活潑な物質が總べて皆生きて動き出した！　私は私のマリアが豪い歌手になつたと想像して見る。尙も此夢を實現せんが爲めに、而して此美しい都を彼女の活動する舞臺と爲さんが爲めに、私は音樂學校の校長を訪ねたり、劇場なぞは大嫌ひになつた世離れのした自分の樣な男が毎晩の樣にオペラやコンサートへ通ふ樣になつた。私が見た有らゆる物を、私が聞いた有らゆる物をマリアに報ずる時、非常な興味が私に湧起つた。オペラから歸ると私は直ぐに私の机に向つて、今夜は何々孃が如何に歌つたかを詳しく彼女に書いて送つた、其際總べてがマリアに有利なる樣に比較せられるのであつた。

畫廊の繪を見に行つても、私は至る處にマリアを見た。ベルヴェデーレの宮殿では、グィドー・レニィのヴィーナスの前に小一時間も佇んで居た――それは渴仰する我が妻に恐しく似通つて居るので。

遂に私は彼女の身體を戀ふる鄕愁に捕へられてしまつた、そして行李を引からげて、最大急行で彼女の許へ歸つて行つた。私は既に此女の魔の手に捕へられて居るのだ、到底それから脫け出すべき術は無い！

歸り行くのは善いものだ！

私の愛の手紙がマリアの熱情を煽つたらしい。私は庭に立つて私を迎へた彼女に飛び付いた、そして狂人の様にキッスを浴せた。私は彼女の頭を兩手に抱いて、云つた。――

『お前は一體魔法を使ふのかい、小さな魔女さん！』

『まあ、何ですつて？……あなたはあたしから逃げ出したんでせう？』

『さうだ、逃げ出さうとしたんだ！　けれどお前の方が僕よりは餘程強い……僕はもう降參する！』

私の部屋の机の上に赤薔薇の花束が載つて居た。

『それぢやお前まだいくらか僕を愛してるんだね？』

すると彼女はまるで處女の如くにはにかんで、顏を眞赤に染めた……もう私は駄目だ、私の名譽も駄目だ、彼女の束縛から身を脫せんとする有らゆる努力も駄目だ――一度其束縛から脫れると同時に、私は却つてそれが戀しくなつて來る様な男なのだ！

……

それからまる一ケ月といふものは、我々はまるで魔術の春の中に暮した――我々は椋鳥の如くに囀り、限りも無く相愛し、何時解けるとも無き抱擁に醉うた。我々はピアノに伴れて合唱をやり、一緒に雙陸（すごろく）もやつた。最近五ケ年間の最も甘美なる日と雖も此時には及ばなかつた！

我々の結婚生活の秋の中に奇しくも甦れる春よ！　我々は其間に冬の忍び寄れるを思はなかつたのだらうか？

×　×　×

それ以來私は又も彼女の桎梏の中に長い辛抱をしなければならなかつた。

マリアは私が彼女の戀の甘酒に新たに醉ひしれて居るといふ事を知悉して居る、そして再びもとの無關心に歸つてしまつた。彼女は最早なりふりに關はず、私がいくら願つても、自分の身をなるべく美しく見せやうとする様な身だしなみをしない、その結果は、如何に抵抗するも、夫に對する冷淡となつて現れるだらうといふことを私は恐れたのである。のみならず彼女の例の同性愛の癖癖さへも再び現れて來た、然し此度は今までよりももつと危險で悲ず可き傾向であつた、といふのは此度は、彼女は年少の者に目を付け出したからである。

或る晩私は要塞司令官と、その十四になる娘と、我々の宿の主婦とその十五になる娘と、及びもう一人の同じ年頃の娘をさゝやかな晩餐に招待して、音樂をやつたりダンスをやつたりした。

十二時近くになつて――私は今でも尙恐怖の爲めに戰く――少し醉つてゐるマリアが娘達を自分のぐるりに集めて、××××××××××××、×××××××××××××××××××××××××××××××××××××。

客間の小暗い影の一隅から此樣子をじつと眺めて居た司令官は、此時彼女の振舞のどんな事であるかを確めたらしく、今にも飛びかゝらんとする氣勢を示した。私はもう心の中に監禁や懲役や再びどうする事も出來無い汚辱をはつきりと見た……私は直ちに私の妻と娘達との集りの中へ飛込んで、娘達をダンスに誘ひ出した。

其夜二人切りになると、私はマリアを自分の前に引据ゑた。烈しい云合ひが朝に至るまで繼續した。彼女は醉の爲めに自分の欲する以上に內心を打明けた、そして私が未だ曾て夢想する事も出來なかつた樣な恐しい事をも平氣で自白した。

激怒に捕へられて私は私の有らゆる詰責と疑惑とを繰返した、そして私自身でさへもよく考へて見れば少し大袈裟過ぎると思はれる此疑をも附加へた。——

『そして僕の此奇體な病氣も……』と私は叫び出した。『こんなひどい頭痛を起すあの病氣も矢張り……』

『まあ、そんならあなたは其病氣もあたしから傳染したのだとおつしやるの！』

……さういふ意味で云つたんじや無かつたんだ！　私は只自分の中に認めたチアンカリ中毒の徵候に就いて云はうと思つただけなのだ。

此瞬間一つの記憶が私の頭に閃いた——それは殆ど私の想想には痕跡をも殘さなかつた程に其當時の私には有り得可からざる事の樣に考へられた或る事を思ひ出したのである。

私の疑惑は銳くなつた、そして、あの訴訟事件の後間も無く私が受取つた或る無名の手紙の一つの文句と突然結び付けられた——其手紙に於てマリアは「ゼーデルテルエの淫賣婦」と呼ばれて居たのだ！

一體それはどういふ意味だらう？　私は其當時色々に考へをめぐらしても見たが、何の結論に到達する事も出來なかつた。今こそ何か新しい事實が嗅出されるに相違無い。

彼女の先夫なる男爵が初めてゼーデルテルエでマリアを見知つた時には、彼女はあまり健康で無い一人の少尉と半ば婚約の仲であつた。それたからあはれなグスターフは、態のいゝお人好しの役目を演じさせられたのだ！……マリアが離婚後にも猶男爵に向つて抱いて居たあの感謝の念はそもそも玆に由來するものである、卽ち彼女は私に『あの人があたしを危險から救ひ出してくれたのです。』と話して聞かした事が有つた。然し、どんな危險からか……それは云はうとしなかつた。

然し、「ゼーデルテルエの淫賣婦」？　私には思ひあたつた——あの若い男爵夫妻が送らなければならなかつた引込勝ちな生活、交際も無く、招待といふ樣な事も無い孤獨な暮し……彼等は確に彼等の屬せる階級から擯斥せられて居たのだ！

恐らくあのマリアの母が——前身は平民出身の家庭教師で、マリアの父なるフィンランドの男爵を

誘惑し、揚句の果てには、首も廻らぬ借金から免れる爲めにシュヴェーデンさして逃げて來たといふ曰く附きのあの女が――その貧窮を人目にかくす事の上手なあの寡婦が、その娘の身體をゼーデルテルエで金に代へる樣な屈辱をも敢てしたものだらうか？

六十歳にして猶コケットであつた此老婦人は私をして只反感と憐憫の情とを催さしめるばかりであつた、慾張りで、逸樂を好んで、冒險的の性質を多分に持つた彼女は、眞の「人食ひ女」として、有らゆる男を目するに捕獲の目的物を以てした。それで彼女は私には自分の妹の扶養の義務を負はせたし、初の聟なる男爵を欺いては、その債權者の詭計に由來するいかさま物の持參金を背負込ませてひどい目にあはせる樣な事をも敢てした。

あはれなるマリアよ！　此怪しげなる過去の中にこそ、その良心の苛責も、その不安も、その一切のどす黑い思ひも根ざして居るのだ。之等の遠い過去の出來事を私が親しく見聞した新しい出來事と比べて見ると、あの母子の間に屢々起つて、時には暴力にも訴へ兼ねまじき程の烈しさに達した爭論の由來を判斷し得ると思つた。マリアが、どうかすると自分の母の胸のあたりをしたゝかに蹴飛ばしてやりたくなつて仕方が無い、と云つたあの謎の如き言葉の意味もやうやく飲込めて來る。

彼女は無理にも母の口を緘しなければならなかつたのだらうか？　恐らくはさうであつたらう。何故なれば、母は一切を打まけて我々の結婚を破つてしまふぞと脅したのだ。

それから母に對するマリアのあの反感……男爵はマリアの母を何時でも「下司女奴」と呼んで居た――それは全く、マリアの母はその娘に夫を掌中に丸め込む爲めの有らゆる手管を傳授したのだといふ男爵の告白に依つて說明するしか仕方が無い樣なひどい惡口である。

それ等の悉くが寄集つて、いよ〳〵逃げ出さうといふ私の決心を堅くした。私は自分の名も名譽も擧げてその手中に委した此女の素性に就いて出來得る限りの詮索をする爲めに、コーペンハーゲンをさして旅立つた。

× × ×

年を經て故國の人々にめぐり逢つた私は、彼等は既に私に就いては一の定見を持たされてしまつたといふ事に氣が付いた、マリア及び彼女の仲間の熱心な努力は遂に成功して、彼等をすつかり手に入れてしまつたのだ。マリアは神聖な殉教者で、私は、妻に欺かれたといふ妄想を抱いて居る狂人だ、と思はれて居るのだ！

詮索をする？　まるで壁を相手にして打つかる樣なものだ！　人々は私の話を聞いて、にこ〳〵ほゝゑんで、まるで珍しい動物でも見る樣に私の顏を眺める。私は一言の說明をも得る事が出來無かつた、有らゆる人々に見棄てられた、殊に、私を陷れて自ら高きに登らんとする羨望者達に依つ

て私は再び暗い牢獄へと何の得る所も無くすご〳〵歸つて來た。マリアは明かに見え透いた不安を以て私を迎へた。私は彼女のさうした顏色を見たばかりで、私の憐むべき全旅行中に知り得たよりも遙に多くのものを知る事が出來たのであつた。

二ケ月の間私は勘忍のならぬ勘忍に堪へた。それから私は四度逃げ出した。夏の最中、今度はスウィスへ。然し悲しいかな、私の身體を繫ぐ鎖は鐵の鎖では無かつた。私はどんな力を振つてもそれを斷ち切る事は出來なかつたのだ！　それは、どこまでも伸びて行くゴムの纖であつた。それはより長くより強く引張られる程一層烈しく出發點へと私を彈き返すのであつた。

もう一度私は歸つて來た、今度は彼女はおほつぴらに私を輕侮して居る、今度逃出したら、それは私に死をもたらすだらうといふ事を彼女は確信して居る、そしてそれこそは彼女の唯一の希望なのだ！

私は病氣になつた、もう死期が近付いたと自ら信じた程にひどく病氣になつた、そして、死ぬ前に自分の一切の過去の生涯を書いて殘さうと決心した。私は一の吸血鬼に騙され通して來たといふ事を玆に至つてはつきりと發見した。此女の爲めに塗付けられた一切の汚辱を自分の身から洗ひ清めるまではどうしても生きなければならない、彼女の不貞の確證を至る處に蒐集して復讐する爲めに、再び生に歸らなければならない。

憎惡が私の中に燃えた、それは無頓着よりも一層不幸なものだ。何故なれば、それは愛の反面であるから。私は今此定理を立てなければならない——「余は彼女を愛すればこそ、彼女を憎む。」

或る日曜日、庭の四阿で食事をして居た時の事であつた。十年間蓄積せる電流が遂に放電した。どうした事情が導火線になつたのかは解らなかつた。私は此時初めて彼女を擲つた。私は急激の如くに彼女の横面を掌で張り飛ばした、そして彼女が抵抗しやうとすると、彼女の手頸を捻り上げて、そこに膝を突かせた。彼女は恐しい叫を發した。と、私が其際に感じた瞬間的の滿足は直ちに恐怖に變つてしまつた——そこに居た子供達が恐しさに夢中になつて、火が付くやうにわつと泣き出したのである。それは正に私の無殘な生涯の中でも最も苦しい瞬間であつた。妻を、子等の母を打擲するといふ事は、一の罪惡、一の殺人、一の不自然な犯罪とも云ふ可きであろ！　しかも子供達の居る所で！　太陽もかゝる光景を照してはならない……！

此世に生きる事は私にはたまらなくなつて來た！

然しそれにも係はらず、暴風の後の如き靜けさが、義務を果し得たる後の如き滿足感が私の心に忍び入つた！　私は此行爲を悲しみはしたけれど、敢て後悔はしなかつた。原因に從つて結果は有る！

其日の晩、マリアが月光の下を散歩して居た。私は彼女を迎へてキッスを浴せた。彼女は敢て私を

突退けない、そしてさめ〴〵と泣き出した。我々は一寸した事を話し合つた。それから彼女は私の部屋へ一緒にやつて來て、夜半に至るまで互に戀を味つた。

何といふ不思議な結婚！　畫、私は彼女を擲つた。そして夜は二人添臥して寢る！

何といふ不思議な女！――彼女を擲つた男を滿身の愛を納めてキッスするとは！

何故私はもつと早く此秘密を悟らなかつたのだらう？　若し彼女を十年前にも此樣に擲つたら、私は世の中の夫の中の最も幸福な夫であり得たらうのに！

扨て之れは一つの忠告である。私の兄弟よ、諸君若し妻に欺かれたなら、此事を思出して考へて見てくれ給へ！

然し彼女は復讐を準備した！　それから四五日經つてから彼女は私の部屋へやつて來て、長い前置きと面倒臭い、廻りくどい云ひまはしの後に、彼女はこれまで一度、唯一度フィンランドの旅行中、他の男から「辱められ」た事が有るといふ事を白狀した。

私の紀問はいよ〳〵確められたのである！

彼女は必死に私に哀訴して、こんな事が幾度も有つた事だとはどうぞ思つてくれぬやうに、それ以外にもつと情夫が有つたらうなどゝ疑つてはくれぬやうにと泣きすがつた。

これは詰り――幾度も有つた、幾人も有つた、といふ意味になるのだ！

「そんならお前は僕を騙したんだな、そして世間の目をくらます爲めに、僕の發狂の作り話を云觸したんだな！　自分の罪跡を一層うまくかくす爲めに、僕が死んでしまふまで僕を苦め通さうといふのだらう。お前は立派な罪人だ。今ではもう解り過ぎる位によく解つてる。僕達は別れる事にしやう！」

彼女は私の足下に泣伏して、熱い涙を流しながら宥してくれと願ふ。――

「それはいゝよ、僕は宥してやるよ。然しともかく僕達は別れる事としやう！」

×　×　×

其翌日にはもう彼女は平靜に返つた、二日目には再び立上つた。そしてあのカタストローフの後三日目に至つては、けろりとして、まるで何の罪も無い女の樣に平氣に振舞つた。

「あたし何も彼も殘らず懺悔してしまつた以上は、何も非難せられる覺えは有りはしませんわ！」

彼女は單に「罪が無い」だけでは無い、もう立派な殉教者に成り澄して居る、そして私を遇するに輕蔑的、お情的の態度を以てする。

彼女は自分の犯した罪の結果を意識しない故に、私の立つて居るデレンマの苦境を解する事が出來無い。若し此まゝに止まつて居れば、私は欺かれたる夫として永久に世間の物笑ひになるばかり

だ。彼女から去つてしまつても、私は此不幸を變ずる事が出來無い――どの道、私は亡びたる人間である。

二三回の打擲と唯一日流した涙とに對して十年間の忍び難き苦患――たしかに公平な沙汰では無い！

いよ〳〵今度こそは最後だといふ覺悟を決めて家を出た、子供達に別れを告げる勇氣は私に無いので、こつそりとである。

それはよく晴れた日曜日の正午頃であつた。私はコンスタンツ行きの汽船に乘込んだ――フランスに居る私の友達を訪ね、其處で直ぐに、此無性的女性の時代の眞の代表的タイプなる此女を小說に書かうといふ覺悟を以て。

最後の瞬間にマリアは汽船の上に現れた、目を泣腫して、昂奮して、熱を病む者の如くに――其上私の爲めには不幸にも、再び私をして背後を振返らせる程に美しく。けれども私は冷淡に、何の感情も無く默り込んで突立つたまゝであつた、そして彼女の眞無きキッスを受けたばかりで、それを返さうともしなかつた。

『せめてあたし達はお友達だとだけでも云つて下さいな！』

『仇同士だよ――生きて居る間は！』

我々は別れなければならない！

汽船が動き出すと、彼女が波止場に添うて走るのが船の上から見えた、十年の間私を欺き終せたあの眸の魅力を以て最後の瞬間に私を繫ぎ止めやうとあせりながら！　彼女は主人に見棄てられた犬の如くにあちこちと走り廻る――厭ふ可き牝犬！　そして私は、彼女が絶望して水に飛込む刹那を待つ――私も彼女のあとを慕つて飛込まう、そして最後の抱擁のまゝに溺れ死なう！……然し彼女は水に飛込みはせずに背を向けて、彼女の蠱惑的な表情を私の心に刻み付けたまゝ横町へ姿を消してしまふ、それから私が十年間一つの聲をさへ發せずに自分の胸を足蹴にさせて居たあの小さな足の印象を私に殘して。唯私の書く作品の中に於てのみ私は自分の感情を洩す事が有つた。然し其場合に於ても猶、その作者に依つて常に崇拜せられて居た此女のまことの罪をば包みかくして讀者を欺くのを常としたのである。

私は堪へ難い苦悶に抵抗する爲めに、直ちに汽船のサロンへ降りて行つた。私は食卓に就いた、然し最初の皿が出た時にもう私はしやくり上げて來て呼吸が止りさうになつた、それで私は止むを得ず食卓から起上つて、再び甲板へ登つて行つた。

と、目の前に綠の岳が見える、そして其上に綠色の窓の戸を閉した白い小さな家が。あすこに私の子供達が住んで居るのだ――見棄てられた家に、彼等を見護つてくれる者も養つてくれる者も無

く。氷の如き苦痛が私を捕へる、そして私の心臓を貫く。

私の身はさながら、大きな蒸汽機關に依つて徐々に糸をほぐされて行く蠶の蛹の樣な氣がした。ピストンの一回轉毎に私の身は痩せ細つて行く、そしてほぐされた糸が伸びるに從つて、冷さが身に沁みて應へて來る。

近付いて來る者は、死である！

私の身は、さながら時期に先立つて臍の緒を切られた胎兒の如きものである。家族といふ者は、何といふ完全な生きたる有機體であらう！

我れ自ら恐れ戰き、殆ど死ぬ程の後悔に責められたあの第一の離婚以來、私は既にそれを豫想して居たのだ。然しあの女は——姦婦、殺人女はいさゝかもそれを恐れなかつた！

コンスタンツで私はバーゼル行きの汽車に乘込んだ！　何といふ日曜の午後！

神天にましますとせば、私は不倶戴天の敵にすらもかゝる苦悶の時間をば與へ給はざらん事を神に祈つたであらう！

先には船の蒸汽機關に依つて散々に苛まれたのが、今度は私の腸や腦髓や神經や血管や內臓を紡ぎ取つて、まるで骸骨の如き姿となつてバーゼルに着かせたものは、機關車である。

バーゼルに來ると私は、曾て我々が滯在したスウィスの有らゆる場所を再び見度いといふ突然の

熱情に捉へられた——マリア或は子供達が私に殘した思出に十分浸り切る爲めに。

私はジェネヴァに一週間、ウーシーに一週間といふ風に、なつかしい思出に驅られつゝ、休息も無く、安靜も無く、まるで追放せられたる罪人の如く、永遠のユデア人の如くに、ホテルからホテルへと渡り歩いた。

私は幾夜を涙に泣き明し、至る處で幼き者達のいたいけな姿を思ひ出させられた、そして彼等が行つた場所には洩れ無く出かけて行つた、ジェネヴァ湖上の「彼等の」鷗にはパンのかけらを投げてやつた——影の如くによろめき迷ひつゝ。

私はマリアからの手紙が今日は來るか明日は來るかと、毎日待焦れた、然し遂に一本も來はしない。彼女は當の敵の手に書いた證據を渡す樣なへまをやるには餘りに意地が惡いのである。そして私は、何も彼も一切を宥してやるといふ愛の手紙を彼女に宛てゝ書く——日に四五回も……然し、それを出しはしないのだ。

洵に、私を裁く人々よ、若し私が狂亂に陷る可き運命に在るものとすれば、かゝる最高の懊惱と最深の煩悶との此時にこそそれは起らなければならなかつたのだ。

私の抵抗力は將に盡きんとして居る、マリアのあの告白は、私から逃出して他の男と——彼の神祕的な情人と、或は最も惡い場合には、彼のデンマルク人なる同性の戀人との共同生活を始めんが

爲めの僞りに過ぎなかつたのではあるまいか、といふ想像をすら抱く樣になつた。私は「繼父」の手に、或は「繼母」の毒牙に落ちた私の子供達が目に見えるやうな氣がする。彼奴等は私の全集の收入で甘い汁を吸ふだらう、そして、私の妻を奪ひ去つた半陰陽的の女の目を以て眺めた私の生涯の傳記を書くのだらう。と、私の自己保存の本能が猛然と目ざめた。私は遂に一計を案出した。私は自分の家族の側に居なければ仕事をする事が全然不可能となつてしまつた故に、再び彼等の許へ戻つて、マリアの罪を殘らず並べ立てた長篇の小說を書き上げるまで彼等の側に止まつて居やうと決心したのだ。此方法に依つて私は、彼女に氣付かれずに彼女を利用する事が出來るのである。斯くして彼女は私の復讐の道具となる。そして一旦使用してしまへばそれを投り出してしまふばかりだ。

此目的の爲めに私は何等の感傷をも交へない事務的の電報を彼女に打つてやつた——我々の離婚の申請は却下せられた、彼女は私に全權を委任しなければならない、それでボーデン湖の此方の岸なるロマンスホルンで會見の必要が有る——さういふ風に云つてやつた。

× × ×

此電信を發してしまふと、私はホッとして再び生き返つた。翌日私は汽車に乘つて定刻に出かけて行つた。懊惱の一週間は綺麗に忘れ去られた——地平線の彼方に、私の愛兒達が住んで居る對岸の岳を望む時、私の心臟は常の如くに鼓動し、私の目は輝き、私の胸は脹れる。汽船は近付いた、然しマリアの姿は未だ見えない。遂に彼女の姿が甲板の上に現れた、その顏は憂苦にやつれて十年位も老けて見える。若き妻の俄に斯くも老いたるを見るのは、私にとつて何といふ打擊だらう！彼女の足どりは引ずる樣に重々しく、彼女の目は眞赤に泣き腫れ、彼女の頰は凹み、彼女の頸は垂れて居る。

此刹那、哀憐の情が憎惡と反感の有らゆる感情を押退けた。私は將に腕を擴げて彼女を抱かんとした——と私はハッとして飛びすさつて、氣を取直し、何か罐曳にでもやつて來た大膽な男の樣な何げ無い樣子をした。私はマリアを近く、精密に觀察するに及んで、電光の如くに、ある發見に打たれた——彼女は例のデンマルク人なる女の友達と驚く可き酷似を持つて居る。そこには有らゆる類似が見出される——顏も、姿勢も、動作も、髮の結振りから顏面表情に至るまで！　あの同性愛の女は私に最後の惡戲をしたのだらうか？　マリアは彼女の戀人の腕から此處へ來たのだらうか？

私は此夏の初の出來事で此臆測を確める樣な二つの事件を思ひ出した。或時彼女が隣の下宿の主人に、部屋が一つ明いて居ないかと訊ねて居るところへ、丁度私が行き合せたのである。

誰の爲めの部屋だらう！

それから彼女は夜ピアノをやる爲めに此隣の下宿へ行つてもいゝかと私に訊ねた。……

逃れ難き證據を提供するものでは無いが、之等の出來事が私を警戒する、私はマリアをホテルに連れて行つて、私が演ずべき役を繰返した。

彼女は意氣銷沈して惱ましげに見えて居たが、その冷靜な落付きは失はなかつた。彼女は離婚の手續に就いてはき〳〵と氣の利いた質問を浴せた。そして私がそれに際して些の憂色をも示さないのを見て取ると、直ぐに心配相な顏色の假面をかなぐり棄て、出來るだけ上手な態度に出でて、私を輕くあしらはうとかゝつた。

かうして話を交して居る間に、彼女の樣子には又も烈しく例の女友達を思ひ起させるものが有つた、それで私はあの女は今どうして居るのかを訊ねて見やうかといふ氣にすらなつた。殊にあのテーブルに手を突きながらやる悲劇女優じみたあのポーズは、あの女が好んでする姿勢の一つなのだが……あゝ！

私は彼女の爲めに葡萄酒を云付けた。彼女はそれを一息に飲干して、俄に感傷的になつて來た。

私は此機會を利用して、子供達はどうして居るかと訊ねて見た。すると彼女は俄にすゝり泣き始めて、此一週間實に辛い目を見せられたと自白した、朝から晩まで子供達は彼等のパパのあとを慕つて彼女を困らせたのだといふ、そして彼女は私無しには到底生きて行けさうも無い、と云ふ。

私の婚約の指輪が私の指にはまつて居ない。彼女はそれを見付けて、ひどくうろたへた。

「あなたの指輪は？」と彼女は私に訊ねる。

「ジェネヴァで賣つてしまつたよ。そして其金で女を一人……一寸の間だけでもお前と平衡を得る爲めにね。」

彼女の顏はサツと蒼ざめた。

「そんならあたし達はもうおしまひなのね。又新しく出直したらどうでせう？」

「お前の所謂公平といふのはさうした意味だね！　お前のやつた行は、家族全體にとつて、此上も無い恐しい結果を及ぼしてしまつたんだ、僕はもう自分の子供達がほんとうに自分の子かどうかを疑はなければならない羽目に陷つたんだからね。お前の罪は、即ち一家の血統を亂したといふ事に在るのだ。お前は四人の人間から生涯の名譽を奪つてしまつた——三人の子供達は私生兒扱ひにせられるし、お前の夫は欺かれたる夫として世間の物笑ひになつてしまふ。何も彼もみんなお前の行爲のおかげなんだよ！　之れに反して僕の行爲は一體どんな結果を及ぼした事になるんだらう？」

彼女は泣き出す。私は彼女に、離婚は離婚で事を運んで居る間に彼女は私の愛人として一緒に居る事にしたらどうだと相談した。そして子供達は遺言に依つて私の子とすることにしやう。……

「さうしたら丁度お前の夢想して居る樣な自由な結合といふことになるんじや無いかね？　お前はいつでも結婚といふ事を呪つて居たんだから。」

彼女は一瞬間考へ込む。此提議は彼女の氣に入らないのである。

『お前はいつか僕に云つた事が有つたね、何處かの鰥夫の家へ家庭教師として入り度いつて！　ここにお前の求めて居る鰥夫が居るよ！』

『それはなほ考へて見なけりやなりませんわ……もう少し待つて頂かなけりや……あたし達は屹度……其間にあなたは又あたし達のところへお歸りになつて？』

『お前が呼んでくれるなら。』

『只來てさへ下されば。』

かくして六たび私は私の家族へ歸つて行つた、然し此度は、私に未だ殘されてある時間の全部を例の小説の完成に利用し、此不可思議な物語の詳述に依つて堅く自分の身を武裝しやうといふ確乎たる決心を抱いて……

奥　書

ペンを手にして机に向つたまゝ私は引くりかへつた、熱の發作が私を床の上に叩き付けたのだ。私は殆んど十五年前から病氣らしい病氣をした事が無かつたので、此折惡しき突然の發病はひどく私を面喰はせた。決して私は死を怖れたといふ譯では無かつた。死の恐怖からは私は解脱した積りで居たのだ。然し乍ら、私は生れて玆に三十八年、激しい動搖の舊生涯を今終へて將に新生涯に入らんとする時に立つて、然も未だ私の最後の言葉を發せず、青年時代の有らゆる約束を未だ解決せず、而して將來の計畫に充ち〳〵て居るのだ——此際突如生命の結び目を切斷せられる事は私にとつて少からず迷惑な事であつた。四年前から妻と子供とを携へて半ば自ら招ける流竄の中に生活して居た私は、遂に有らゆる彈藥を使ひ盡して或る小さなバイエルンの町に立籠つて居た。其少し以前には法廷に立たされて、私の著書の一つは沒收せられた、我々はまるで陸を追はれて水の中へ投げ込まれたのである。病の床に就かなければならなくなつた彼の瞬間、唯一つの感情——復讐！——が私の滿身に溢れた。

一の苦鬪が私の中に進行した、助けを呼ぶ力さへ私には無かつた。人が羽根布團を搖るが如くに

熱が私の身體をゆすり、將に私を窒息せしめんとするかの如くに、私の咽喉を扼する、私の頭は熱の爲めに灼付けられて、眼球が眼窩から飛出しさうになる。疑も無くそつと忍び寄つて私の不意を襲つた此「死」と唯二人切り、私は屋根裏の部屋でもがき苦んだ。

然し私は死にたくは無かつた。私は死に對して敢て抵抗する、それで惡戰苦鬪はます〳〵殘酷なものになつて來た。私の神經の力は弛み、血は血管の中を狂人の樣に駈け廻る。私の腦はまるで酢の中に投げ込んだ水蛭の如くにひく〳〵と痙攣する。忽ち私は此死の舞踏に於て遂にかなはないといふ諦めの確信に到達した、それで私は身を退いて、どつと後に倒れてしまつたまゝ、深く怪物の恐しき抱擁に身を委ねてしまつた。

と間もなく、名狀し難い安靜が私を捉へた。氣持の善い弛緩が私の頭から足の爪尖までをさつと走つて、勞苦の幾年の間に必要な休養を全然缺いて居た私の身心を完全なる平和がふうわりと抱き取つた。

之れこそ死といふもので有れかし、と私は其時如何に熱心に祈つたことであらう！　生きんとする意志は追々と私から遠ざかり薄れて、私は見る事を止め、感ずる事を止め、考へることを一切止めた。遂に私は意識を失つた、そして名狀し難き苦痛と惱亂と未知なる物に對する不安とがかき消す如くに無くなつて生じた其空間を、虛無の尊い感じが充してしまつた。

ふと目がさめて見ると、私の妻が寢臺の枕頭に坐つて、うろたへた目付でじつと私の目の中を見据ゑて居た。

『どうなすつたの、あなた？』と彼女は云つた。

『何でも無いよ、病氣なんだ！』と私は答へた。『病氣になるのも惡く無い事もあるよ。』

『何を云つてらつしやるの？　まさか本氣じや無いでせう？』

『之れでもういよ〳〵おしまひだよ……少くともさうであればいゝと思つてるよ。』

『あゝ神樣、どうぞあたし達をこんなみじめな狀態にお見棄てなされませぬやうに……』と彼女は叫び出した。『まあ、あたし達はどうなるんでせう、こんな見知らぬ土地で、友達も無く、お金も無く！』

『然し僕の生命保險の金を殘して行くよ。』と私は彼女を慰めやうとした。『無論大した金じや無いさ、けれど國へ歸る位は出來るだらう。』

此生命保險の事は彼女の考へに無かつたものらしい。それで彼女はいくらか安堵したらしく、又言葉を進めた。——

『けれどもあなた、只かうして寢ていらつしやる譯にも行きませんわ、醫者を呼びにやりませう。』

『いや、僕は醫者には逢ひたくは無いよ。』

『おや、何故？……』
『何故でも……僕は逢ひたく無いから。』
二人が交した視線の中には、口に出しては云はない言葉が殘らず閃いて居た。
『僕は死にたいんだ！』と私はいやな會話を早く打切りにする爲めに云つた。『此世の中がつく〳〵いやでたまらなくなつたんだ、僕の過去の生活は、まるでほどく事の出來無いもつれ糸の束の様な氣がするよ。早く僕の眼は瞑つてくれゝばいゝ、早く幕が降りてくれゝばいゝ……！』
此尊い、男氣有る告白を聞かされても彼女は何の感じも無い様な顔をして居た。
『あなたの例の疑が……今でも持つていらつしやるの？』と彼女は云つた。
『さうだ、相變らず持つて居る！　どうぞ此幽靈を追拂つてくれ！　それの出來るのはお前だけだつたんだから！』
いつものやり方で彼女はその柔い手を私の額に置いた、そして以前の如くに「小さなママさん」の役を演つた。――
『かうするといくらか樂になつて？』
『あゝ、樂になるよ！』
それは實際に効果が有つた、あんなに重苦しく私の運命を壓迫した彼女の輕い手を一寸觸れるば

かりで、黒い幽靈は追拂はれ、心の中のなやみはかき消されるのであつた。
又も高熱が私を襲ひ來つた、今度は以前よりももつと烈しく。妻は早速立上つて、接骨木の煎藥をこしらへて來る爲めに出て行つた。
一人に成ると私は床の上に起直つて、寢臺の側にある窓から外を眺めて見た。それはトリプテコン型の大きな窓で、外の方には葡萄の蔓がからまつて居るが、その青い葉の間からは景色の一部が見られた。前景には一本のまるめろの樹が蒼黒い葉の蔭に眞紅の果實をゆすつて居た、其向ふには青い芝生の上の林檎の樹や、小さな敎會の鐘樓や、ボーデン湖面の碧い一片や……それから遠い背景にはテロールアルプスの連山が遙に眺め渡された。
折しも丁度眞夏の事で、傾く午後の光の中に、全體がさながら一幅の美しい繪の如くに輝いて居た。
下の方からは、葡萄の木の支柱に止つて居る椋鳥の囀りや、ひよつ子のぴよ〳〵鳴く聲や、蟋蟀の囁や、水晶の如くに朗かな牝牛の鈴の音等が聞えて來る、そして此明るい自然のコンサートの中へ、子供達の笑ひさゞめきや、私の病氣に就いて園丁の女房に指圖をして居る私の妻の聲などが交る。
すると私は再び生の喜びを取返した。そして虚無に歸する事の恐怖が私をしつかりと捉まへてし

まつた。さうだ、私は死に度くは無いのだ、斷じて死んではならない！　私は果すべき義務をあまりに多く持つて居る、拂ふべき負擔をあまりに多く持つて居る。良心の責に苦められて、私は私の生涯を懺悔したいといふ烈しい欲求を感じた――私の爲した所行に對し有らゆる人類の宥しを乞ふ爲めに、そして何人の前にも自ら屈して頭を下げんが爲めに。私の良心は何かしら知られぬ犯罪に依つて苛まれた故に、私は自ら罪有るものと感じた、私は自分の空想上の罪を殘らず告白してしまつて重荷をおろしてしまひたいといふ熱望に燃えた。

先天的の怯懦に由來する此心弱さの發作に襲はれて居る際に、妻が煎藥を持つて入つて來た。私が何時か彼女に毒を呑ませられたといふ妄想を一寸抱いたことが有るのにあてつけて、彼女はそれを私に差出す前に、自ら味つて見た。

『安心しておあがりなさいた！』と彼女はほゝゑみながら云つた。『毒なんか入つてやしませんから。』

私は恥ぢた。私はどう云つて返事をしたらいゝか解らなかつた。私は彼女に申譯をする樣な心持で、コップを一息に飲干した。

睡を催させる此接骨木の煎藥の匂はふと私の故鄕を思ひ出させた――そこでは此神祕的な灌木は人民に神聖視せられて居る――、そして私はひどくセンチメンタルな氣分になつて、自分の悔恨の情を打明けてしまつた。

『ねえ、よく聽いておくれ、僕はもう直き死んでしまふんだから。僕はこれまで微頭微尾エゴイストとして生きて來たといふことを今こそ認めてもいゝよ。僕は自分の詩人としての名聲を得る爲めに、お前の女優としての前途は犧牲にしてしまつたんだ……今こそ僕は殘らず白狀する、どうぞ宥しておくれ……』

彼女が私を慰める爲めに何か云出さうとした時に、私は彼女を遮つて、言葉を續けた。――

『お前の希望で僕達は嫁資設定制度に從つて結婚したのだつたね。それにもかゝはらず僕は、自分が輕卒に引受けた保證の償の爲めに、お前の持參金を消費してしまつた。然し今さしあたつて僕の心を一番苦めるのは、僕が死んでもお前は僕の著作の收入を手に入れる事が出來無いといふ事だ。だから今直ぐに公證人をこゝへ呼んでおくれ、僕の名義上或は實際上の財產は殘らずお前が遺產相續する事にして置くからね……それから最後に、お前は僕の爲めに、一旦棄てた藝術へ又歸つて行くやうに約束をしておくれ！』

然し彼女はそんな話には耳を傾けやうとはせずに、冗談にしてしまはうとした、そして少しゆつくり休むやうにと私に云つて、何も彼も又よくなるだらう、そんなに無造作に死ねるものでは無いと保證した。

私は疲勞の極に達してしまつて、どうぞ睡入るまで私の側に居てくれるやうにと彼女に願つた。そして私が彼女に向つて爲した有らゆる惡事を宥してくれるやうにと今一度願ひながら、彼女の小さな手を自分の手に執つた、と、尊い睡氣が私の眼瞼の上に下つた。私の身は無限の柔し味を表白する彼女の大きな目の輝きの下に、恰も氷の如くに溶け行くのを感じた。私の燃える額に彼女のキッスが冷い封印の如くに押された、そして私は直ちに云現し難き幸福の深みへ沈んで行つた。

× × ×

私が此昏睡から目がさめた時には、明るい日が照つて居た。太陽は理想鄕の風景の大きな畫面を火の樣に燃した。下の方から聞えて來る朝の物音から判斷すると、今は五時頃に違無い。私は夢も見ず、目覺めもせずに、一夜を睡り通したのだ。

寢臺の側の小卓の上には煎藥を入れたコップが未だ在つた、そして妻の椅子も未だもとの位置に立つて居た。私の上には彼女の狐の皮のマンテルが被せてあつた、其毛皮は甘えかゝる樣にやはらかに私の頸をくすぐつた。私は此十年の間まるで一睡もしなかつたのかしらと思つた、過勞に疲れ切つた私の頭は、此睡りに依つてそれ程によく休まり、且つ新鮮に感じた。以前には秩序も無くめちやめちやに壞けめぐつた私の思想は、廢頽せる人間の肉體的弱點の徵候たる彼の病的な悔恨の發作に備へる爲めに、恰もよく整頓區分せられた强力な軍隊の如くに、秩序整然と集中せられた。

其時直ぐに私の意識の表面に浮んだものは、昨日自分の最後の懺悔として私の妻に打明けたあの私の生涯の二つの暗い斑點であつた——此二つの暗い影こそ多年の間、最後の瞬間に至るまでも私の心を惱ましゝ續けたものであつた。

それで私は、之れまで何等の吟味も無く其まゝに受入れて來た此二つの告白をよく探究して見やうと早速決心した、どうもあの二つはほんとうのものでは無かつたといふ事が證明せられさうな豫感がぼんやり私には有つたので。

『そんならよく調べて見やう！』と私は獨言を云つた。『おれは、自分の虛榮心の爲めに妻の藝術家としての前途を犧牲にした卑怯なエゴイストだと自ら思つて居るとは、一體どんな罪を犯したからだらう？　少しの感傷をも交へずに、有りのまゝの事件の眞相を考へ直して見やう。』——

先づ我々が婚約を發表した頃、彼女はほんの端役しか演つて居なかつた。最初の出演は成程成功ではあつたが、其後二度目の出演で、女優としての才能も態度も特質も全然缺けて居るといふ事が分つてしまつたのだから、それからの彼女の藝術家としての位置は至つて低いものであつた。詰り舞臺の上で必要な物は何も彼も彼女には缺けて居たのである。我々の婚禮の前日にも彼女は舞臺に立つて居た、それは或る愚劣な芝居中の社交婦人で、たつた二言しか臺詞を云はない樣な詰らない

役であつた。

如何に多くの涙と、如何に多くの腹立たしさとを――彼女の言葉に依れば――我々の結婚は持來したことであらう！　此結婚は女優としての魅力をすつかり彼女から奪つてしつた――單に藝術に對する神聖な愛好の爲めのみから離婚をも敢てしたる男爵夫人としての彼女は、あれ程に人を魅する力があつたのに！

成程此凋落に就いては私も全然責任が無いでは無かつた、そしてそのどん詰りは、だん〳〵惡くばかりなつて行く役の爲めに二年の間散々涙を流した揚句、遂にすげ無く再契約を斷られるといふ結果に立至つたのである。

恰も彼女の契約滿期に達した其頃、私は小說家としての成功を、確實なる成功を博した。それより先私はあまり大した物では無い二三の小戲曲を舞臺に上せた經驗があつた。それで此際眞先に私の取る可き途は、目に物見せてくれる樣な脚本を一つ書いてやらうといふ事であつた、それは私が最愛の妻の爲めに再び望通りに劇場との再契約を出來してやらうといふ特別の目的を以て書下された、人目を惹く樣な華々しい脚本で無ければならない。私はいや〳〵ながら此仕事にとりかゝつた。私は長い間戲曲藝術の必然的革新といふ事を夢見て居た。然るに私は此戲曲を書くに當つて、あらゆる文學的の理想や確信を放棄しなければならなかつた。私は厭がる觀客に私の妻をむりやり押付

けてやらなければならなかつた、其藝術の有らん限りの技巧を盡して彼女を彼等の頭上に投げ付けて强制的に見物の同情と喝采とを得やうといふのであつた。然し駄目であつた。

此芝居は見事に失敗した。一度離婚して又再婚したる婦人に對しては最早何等の同情も持たぬ觀客の前には、どんな善い役を演つて見せても成功は望まれなかつた。劇場の支配人は早速駈け付けて來て、少しの利益をも得難い此契約を解いてくれと云出した。……

『だからそれがおれの罪なんだらうか？』と私は、此第一の內省に依つて自ら滿足を感じて、ベッドの上に長々と身體を伸しながら、自分の心に問うて見た。『自ら省みてやましからぬ良心を持つといふ事は何といふ善い事だらう……』

私はすつかり輕い、明るい心持になつて、尙も先へ考を推進めて行つた。――

待設けた女の兒が生れ出た喜びは有つたにもかゝはらず、うら悲しい、暗澹たる一年が涙の中に過ぎて行つた。

突然私の妻の舞臺熱の發作が之れまでに無かつた程の烈しさで突發した。我々はあちこちの周旋人に走つたり、劇場支配人の鎖されたる扉を破れんばかりに叩き廻つたり、誇大な宣傳をやつたりした――而して至る處で我々は失敗した、何處へ行つても我々は撥付けられた、誰も彼れもお斷りを食はせた。

私の脚本の失敗に失望して、且つ今後の自分の名を科學界に於て爲さんと決心して、或一人の女優の身體にはめて脚本を書下すといふ樣な眞似は今後斷然やりはしない、と自ら堅く誓つた。それにまたそんな事に對する興味も失はれた。そして彼女のほんの一時の氣紛れを滿足させる爲めに一度結んだ家庭を解き棄てやうといふ樣な氣には到底なれないので、私は此癒し難い悲みの分前を潔く擔つて辛抱して行く事に諦めた。

然し遂に有らゆる忍耐も私の力には餘つて來た。それで私はフィンランドの或る劇場に少しの關係が有るのを利用して、私の妻に旅興行の契約をしてやる事に成功した。

それは即ち我れと我が身體を鞭つ如き結果となつた。彼女の留守の一ケ月間、私は鰥夫で、獨身男で、家長で、おまけに料理人頭であつた。そして其御褒美は——彼女がお土產に持込んだ二つの大箱に一杯の花輪と花束とであつた。

私は直ちに再契約の請求をフィンランドへ向けて發した程に、彼女は幸福で、若くて、そして美しかつた。

記せよ——私はそれに依つて私の故國と私の親友と私の位置と私の出版屋をさへ棄て去らうとしたのだ……何の爲めに？　一人の女の御機嫌を取結ぶ爲めに……然し、さうしたものなんだ！　人は、愛して居るか、或は居ないかだ。

然し私の爲めにはもつけの幸にも、上演曲目の無い女優は遂に一座の中へ屈ひ入れられる譯には行かなかつた。

それが此おれの罪ででもあつたといふのだらうか？——さう思ひめぐらして見た私は嬉しさの餘り床上に轉輾した。英國人がよくやるといふ樣に、時々自ら內省し、自ら我が心に訊問して見るといふ事は實に善い事だ。それは眞に心を輕くする、そして私は餓に若やいだ樣な氣持になつた。

然し尙之を續けて行かう。——短い間に子供がどん〳〵出來た——一人、二人、三人……種は可なりに厚く蒔かれた！

そして其間にも彼女の例の舞臺熱は時々現れた。我々はもとの計畫を押通すばかりだ！　丁度其頃新しい劇場が競爭的に開かれた！　極く効果の有る婦人の役が入つて居て、當時流行の婦人問題を取扱つて居る樣な、センセーショナルな新しい脚本を持込みさへすれば譯の無い事では無いか！

「云つた、爲た！」何故なれば既に云つて置いた如く、「人は愛して居るか、或は居ないかである！」

其脚本は上演せられた——美しい女の役、無論びか〳〵する衣裳、搖籃、月光、敵役の惡黨、妻に溺れて尻に敷かれてゐる臆病な夫（それは私であつた）、身持女（それは舞臺の上では珍しかつたのだ）、僧院の內部……等、と云つた道具立てである。

女優にとつては素晴しい成功であつた、そして詩人にとつては、失敗——ひどい失敗であつた……

殘念乍ら、それに相違無かつた！

彼女は救はれた。之れに反して私は失はれた、滅された。そして有らゆる手段を盡したにも係はらず、支配人に一人頭百クローネンの晩餐を御馳走したにも係はらず、深夜周旋屋の門を叩いて怒鳴つた爲めに五十クローネンの罰金を出させられたにも係はらず――有らゆる努力も空しく、彼女は遂に契約を得る事が出來なかつた。

總べてさうした成行に就いて、私はいさゝかの罪を持つて居るのでも無かつた。恐らく此私こそ殉教者であり、犠牲であつた！　然し有らゆる尊敬すべき婦人達の目にも、私は勿論怪物として映じた、何故なれば、私は妻の前途を葬つてしまつたからだといふ！　數年以來私は其事に就いて良心に責められ通して來た、一生の最後の幕を平和に閉ぢることさへも許されぬ程の苛責に逢つて來た。

如何に屢々私に對して公衆の面前で此辛い非難が浴せかけられたことであらう！　常に私のみが罪人であつた！　事實は全く正反對であつたのだといふ事などは、誰が氣にするものが有らう！　彼女の前途が滅びてしまつたといふ事は事實に相違無かつた！　然し一體如何なる前途が、誰の爲めに滅されたといふのだ？

唯の一人も事件を正しい光に照して辯護してくれやうといふ人も無く、後世は私を以て之等のすべてに罪有る責任者と決定してしまふのかも知れないといふ事を思ふ時、私の暗い猜忌は頭をもたげ、私の皮肉な嗤笑は自らに脣頭洩れる。

× × ×

妻の持參金を費消したといふ罪が未だ殘つて居る。

私は曾て『持參金蕩盡者』といふ見出しで或る新聞に書かれた事を思ひ出す。それから又私は妻の「脛を嚙つて居る」男として面と向つて嘲笑せられた事も有るのをはつきりと覺えて居る。私のピストルに彈丸を六發籠めさせるに至つた程に實に善い言葉だ！

我々は事實をよく吟味して見やう、それが望まれてゐるのだから。そして宣告を下さう、人はそれを正しきものと思つて居るのだから。抑も私の妻が結婚の際に持參して來た物は、怪しげな株券で一萬クローネンの額に上つて居た、私は其れを私の名義で或る抵當銀行へ、其額面の五十パーセントの借入金額に對する抵當に入れた。すると思掛も無く經濟界一般の恐慌時代がやつて來た。我々は其株券を適當の際に賣拂つてしまはなかつたものだから、これは殆ど反古同樣になつた。それで私の銀行から借り入れた金の總額即ち額面の五十パーセントを現金で拂はなければならぬ事に立至つた。後に私の妻の株券の所有者は、彼女の要求の二十五パーセントを支拂つた、それだけは債權

者が銀行の破産から救ひ得たのであつた。

ところで算術の問題になるが、私が不當に消費した金額は結局幾何か？

私がひそかに考へる所に依れば、一文も消費して居ない！　賣物にならない株券はその所有者にその實際の價値だけの金を取返し得た。然るに私は私自身の保證に依つて其株券に二十五パーセントの餘剰價値を與へてやつたといふ次第なのであるから。

まことに、此事件に於ても私は、他の場合と同じく全然罪が無いのである！

そしてあの悔恨と絶望と、あんなに屢々計畫せられた自殺の企て！　疑惑と昔ながらの猜忌と殘忍なる疑ひとが又も甦る！　自分はもう少しの事で憎むべき惡漢と思はれたまゝ死んで行くところであつたと思つて見るばかりでも、私は狂人になりさうであつた！　憂愁に閉され、間斷無き勞働に追はれて、私は此無數の風説にも、暗いあてこすりにも、眞綿に針を包んだ樣な冷罵の刺にも、何等の注意を拂ふ遑さへ無かつたのである。私が斯くして日々の仕事に追はれて何の氣も付かずにうかうか暮して居る間に、例の作り話は追々はつきりした形を取つて發展して行つた、無論それは私を妬ねする者の言葉やカフェーの無駄話にのみ根據を持つて居る樣な風説にしか過ぎなかつたのだが。一切の世間を信じてしかも自分だけは信じなかつた私は何といふ馬鹿だらう！　あゝ！……

私は實際に狂人でも無く、病人でも無く、廢頽せる人間でも無かつたのか？　私は單に自分を騙

す女を夢中に崇拜して居る痴人に過ぎなかつたのか？　其女の裁縫鋏は、シムソンが日々の仕事と彼女及び子供達の爲めの暗い心遣ひに疲れ切つて重い頭を枕に横へる時、彼れの髪の毛をちよきんちよきんとはさみ切つてしまつたのだ！　何等の疑惑を抱く事も無く全然信頼し切つて、此魔女の兩腕に抱かれたる十年間の長い睡りに於て、彼れはその名譽も、その男性的の力も、その生きんとする意志も、その精神も、その五官も、果ては、悲むべき事には、それ以上の物をも殘らず失つてしまふところであつたのだ！

恐らくは――私はそれを終まで考へ通す事を恥ぢる――私がいつからか幽靈の如くに生きた此雲霧の中に於てひそかに一の犯罪が行はれたのだらうか！　それは全く一つの小さな罪だ、力を欲する定かならぬ願望に依つて、結婚と稱する雌雄間の決闘に於て雄を打負さんとする雌の祕められた傾向に依つて引起された無意識の犯罪である。

最早何の疑も無い、私は立派な痴人であつた！　最初人妻に依つて誘惑せられ、次に彼女の姪娘を聖（きよ）め彼女の女優としての經歴を救ふ爲めに結婚に强ひられ、嫁資設定制度と、各が生活費の半ばを負擔するといふ條件の下に結婚したのが、十年の後には既に滅亡のどん底に陷れられ、淨も殘らぬ程に絞り取られてしまつたのだ――我々の結婚生活の財政上の重荷はひとり私の肩にのみかゝつたのだから。

恰も此瞬間に於て――私の妻が私を我々の共同生活に於て必要なる物を充す事さへも不可能なのらくら者として空飛ばし、又私を彼女の例の曖昧な財産の浪費者として罵る此瞬間に於て、我々の結婚の日の口約に依れば、彼女の負擔として實に四萬クローネンを私から借りて居る事になつて居るのである。

彼女こそ私に對して債務を負へる者である！

× × ×

今こそ一切を知らうと決心して、私は身體を起した、そして夢の中で持つて居ると信じた松葉杖を投り出す痲痺せる者の如くに、ベッドから跳起きた。着物を着てから、妻に逢ふ爲めに階下へ降りて行つた。

半ば開いたドーアの隙間から私の恍惚とせる目が美しい一場の光景を見た。

彼女はベッドの上に寢そべつて、可愛い頭を白い枕に埋め、小麥の如き金茶色の髮の毛が房々と波打つて居た、肩は美しい襯衣からあらはに、處女の如き胸はレースの蔭からちら〳〵光つた、しなやかな、なよ〳〵した身體の線は、白と紅との縞模樣の柔い布團の下にうねつた、足は素足であつた――小さな、圓味のある、缺點の無い足――薔薇色の指尖には透通る樣な瑕の無い爪が生えて居

た。――古代の大理石像の形に倣つて人間の肉を以て作られたる、眞に完全なる傑作――私の妻は私にとつて斯くの如き物に見えた。

何の苦も無さゝうにほゝゑみながら、純潔なる母性の姿を以て、彼女は三人の子供達を見守つて居た――幼き者共は花模樣の羽毛枕の間を、まるで摘取つたばかりの花に埋もれて戯れるやうに、攀ぢたり、もぐり込んだりして遊んで居た。

此床しい光景を眺めて、私の張詰めた勇氣は意氣地も無く挫けてしまつた。然し私は内心に思つた――『用心しろ、牝豹が仔達と遊んで居るのだ！』

母性の威嚴に制せられて、私は若い學生の如くにおど〳〵しながら入つて行つた。

『まあ、あなた、もうお起きになつて？』彼女は驚いて私を迎へた、然し私の豫期程には喜びの色を見せなかつた。

私は困つた樣に口籠りながら説明した、母をキッスする爲めに屈んだ時に私の背に飛付いて來た子供達に息を塞がれながら。

『何だつて？　之れが罪の女だらうか？』と私は再び出て行く時に自ら問うた、此崇高な美の武器と、曾て一度も僞に汚されたとも思はれぬ此口元の朗かな微笑に打勝たれて。『否々、千度も、否！』……

私は來た時とは反對の確信を抱きつゝ、ひそかに出て行つた。

然し烈しい不安が一緒に私に從いて來た。

私の此意外に早い恢復を見ても、何故彼女はあんなに冷淡なのだらう？　何故彼女は熱の經過に就いて詳しく私に訊ねないのだらう？　何故彼女は昨夜の容態に就いて詳しい質問をしやうとはしないのだらう？　私が回復して元氣のいゝのを見た時の彼女のうろたへたあの顏付と、あの殆ど腹立たしげな樣子とは如何に說明したものだらう？　それからあの勝誇つて居る樣な、人を見下す樣な嘲りの微笑は？　彼女は、朝起きて見ると私が死んで居てくれゝばいゝといふ樣な希望をこれまでも持つて居たものだらうか？——絕間無く彼女の生活を堪へ難くした此狂人から早く解放せられる爲めに！　彼女は私が死んで數千クローネンの生命保險金を手に入れることを希望してゞも居たものだらうか——其金さへ有れは、彼女の新しい目的の爲めの新しい道を拓く事も出來る！……否々、千度も否！……

然しそれにも係はらず矢張り疑は私の裡に殘つた——有らゆる物に對する疑、妻の貞操に對する疑、子供の出生に關する疑、私の精神力は果して何の障害をも受けて居ない健全なものだらうかといふ疑、絕間無く情容赦も無く私を襲つて來るあの疑……

何はともあれ今こそ斷案を下して、此空しき思想の流れをせき止める可き時だ！　私は確實な物

を摑みたい、それで無ければいつそ死にたい！　犯罪は人知れずひそかに行はれたものだらう、それで無ければ私は狂人だ！　眞實が暴露せられなければならない！

妻に欺かれたる夫である！——そんな事が此私にとつて何の苦にならう、只それがはつきり分つてさへ居れば！　分りさへすれば！　それに就いて眞先に心地善げに打笑ふ者は此私であらう。一體此世の中に、我れこそ我が妻を所有する唯一人の人間だと確信を以て名告り得る男が一人でも有るだらうか？　事實其物は決して恐しい事では無い、はつきり知る事の出來無いのが恐しいのだ！

今日結婚して居る私の青年時代の友達に一わたり目を通して見ると、多少その妻に欺かれて居ない男を私は唯の一人も見出す事が出來無い！　而して幸福なる者達よ、彼等はちつとも氣が付いて居ないのだ！　けち〳〵してはいけない！　自分一人だけであらうと、二人有らうと、どうでもいい事じや無いか？　然し、御存じ無しといふこと——それはたまらない悶笑事だ！　それだけが肝腎なのだ——どうしてもそれを知らなければならない！

而して凡そ世の夫たる者たとひ百年の壽を保つと雖も、その妻の眞の存在に就いては少しも知る所無いのだ！　而してたとひ彼れが人間を知り、無限の宇宙を知るとも、その生と生とが離れ難く結び付けられて居る筈の彼れの妻の眞相に至つては、遂にこれを明かにする道が無いのだ。之れ彼のあはれなるボヴァリー氏が有らゆる幸福なる夫達の愉快なる思出の中に生くる所以である。

私は然しながら――私は眞を欲する！　私は知り度いのだ！　復讐の爲めに？　何の馬鹿な事を！　誰に復讐をしようといふのか？　彼女に選ばれたる男遂に？　何の、彼等は彼等の男としての權利を利用したに過ぎないのだ！　そんなら、私の妻に？　私は今、けち〳〵してはならないと云つたばかりじや無いか！　それに、私の小さき天使達の母親の髮の毛一本でもむしる――そんな事が出來るものか？

私の爲す可き事は、精密に知るといふ事のみに限られる。而して其目的の爲めに私は私の生涯を根本的に、巧妙に、科學的に探究しよう。最新精神科學の有らゆる方法を利用しよう――暗示法も讀心術も、精神的拷問法も、一も閑却してはならない、闖入、竊盜、信書押收、署名僞書等の一般に知られたる舊式の方法と雖もこれを輕蔑してはならない――私は一切を試して見よう。

之れは偏執狂だらうか、狂人の怒の發作だらうか？　そんなことを自ら判斷して居る必要は無い。賢明なる讀者は、善き信念を以て書かれたる此書を精讀し終れる後に、最後の審判を下してくれるだらう。恐らく讀者は此書中に、戀愛生理學の要素、靈魂の病理學の解明、及び犯罪の哲學の注目すべき斷片をすら見出すであらう。

一八八七年九月――一八八八年三月

跋

作者の跋

之れは恐しい書物である。私は何等の異議も無く之れを承認する、何故なれば、私はそれを書くに至つた事を大いに悲んで居るのだ。

それは如何にして成立したか？

私は私の屍を永遠に柩の中へ横へる前に、それを洗ひ清むべく餘儀無くせられたのである。

私は思ひ出す、今から四年前私の友達なる著作家で「無分別」――但し他人の――の公然の敵なる或る男が、談たま〳〵私の結婚生活の事に及んだ時に、こんな言葉を洩した。――

『ねえ君、其奴は恰度僕が書いて見たいと思つて居る小説の材料だよ！』

此瞬間私は此小説を自らペンを取つて書かうと決心した、此友達の承認を得ることは容易な事であつたから。

そんな譯だから、親愛なる友よ、最初の所有者としての私が此好材料を使つてしまつたといふ事を怒らないでくれ！

尙思ひ出す事が有る、今からもう十二年も昔の事である、私の未來の妻の母が私の耳に囁いた、

其時私は、若い男達大勢に取卷かれて御幾嫌を取られて居る彼女をじつと見詰めて居たのである。

――

「あなたには丁度お誂へ向きの小説の女主人公じやありませんか？」

「何と云ふ題にしませう？」

「火の様な女！」

恰度善い時に亡くなつた幸福な母よ、こゝに私はあなたの希望を充した。小説が出來上つた。私はもう何時死んでもいゝ。

――佛語原稿、一八八八年三月――

× × ×

私は近頃此小説の主人公に再びめぐり逢つた。彼れの第一の結婚の物語を公にする樣に私を動かした事に對して、私は彼れに盛な非難を浴せかけた。今では彼れは再婚して、可愛らしい女の兒の父親となり、年よりは十位も若く見える。

「いやあなた！」と彼れは私の非難に對して答へた。「此本が初めて公にせられた時に此本の女主人公の得た同情に依つて、私はもう有らゆる責任から解除せられて居る筈ですがね。私の愛は如何に素ばらしい力を持つて居たかといふ事があの本の中から察する事が出來た筈です――私の愛はあれ程にひどい亂暴に堪へ忍び、のみならず、讀者にまでも自らを傳へた程なんですからね。然しそれでも或るフランスの學士會員が、私の妻の野卑と移氣と不誠實とに比較して、私の愛の持續をば一の弱點と云ひ、子供達をも籠めた私の家族に對する私の變らぬ誠實を下劣だと難するのを防ぐ事は遂に出來ませんでしたよ。此男は、單にカセリオがそのメスをカルノーの身體に突刺したといふ理由のみに依つて、取るにも足らぬカセリオを有名なカルノーよりも優れた人間だとでも思ふのでせうか？（註――一八九四年六月廿五日フランス大統領カルノ、リオンにて無政府主義者カセリオに暗殺せらる。）

それにまた、あなたが書かうとなすつた此本は、實は或る織物の解ほどかれた緯（たてと）にしか過ぎないのです――其織物の完全な美しさは、戀の惱みに少しも煩されること無しに戀の惱みと平行して發展して行つた私の文學者としての經歷をよく知つて居る私の鄕國の人々にしか解らないものなんです。

無論私は此恐しい戰場を見棄てゝ退却する事も出來無くは無かつたのです。それにもかゝはらず私は頑强に私の持場に踏止まつて居りました。そして敵に對して戰ひ續けました、家庭に於て、ベッドに於て、それは男氣といふものでは無いだらうか、と私は敢て問ひたいのです。「自ら防禦する術も無きあはれな女」がスカンデナヴィア四ケ國に號令を下して、唯一人の病める、孤獨なる、見棄て

られたる男を屈服せしめんが爲めに、澤山の味方を手馴付けたのです――其男の卓越せる知力が所謂自由思想家なる者の最後の一つ手前の迷信なる婦人崇拜運動に反對して起つたといふ理由で、彼等は寄つて集つて其男を癲狂院に打込まうとしたのです！

あまり猛烈では無い復讐を「神の如き正義」の美名の下に蔽はんとするいくらか人情の有る人々は私が彼女の第一の結婚の夫を陷れたといふ事を何等根據も無い證據に依つて主張して、私の「告白」を彼等の復讐の女神の名に於て判決したのでした。さうしたお方々には此書中のあのシーンをもう一度是非讀んで見て貰ひたいんです――夫に見棄てられた妻に對する私の罪の無い戀心を夫に打明けた時、其夫自らが自分の妻を私の腕の中へ放り込んだあのシーンをです――其時の私の手は有らゆる神々に誓つて、清かつたのですから！　それからまた、彼れの士官としての位置とその子供の將來を救つてやる爲めに、一切の過失の重荷を若い私の双肩にのみ引受けたといふあの重要な事實をも記憶して貰ひたいのです。それらの事を考へて見てから、自己犠牲の行爲を罰することは、復讐の論理にはまるかどうかを彼等に答へて貰ひたいんです。

『私がやつた樣なあんな眞似をするには、若くつて、それに馬鹿で無ければ出來無い仕事です、それは私も認めて居ます。然しもう二度とはそんな事は無いでせう、それは私が保證します……然しながら……いや、もう止しませう！　それからまた……いや……左樣なら！』

彼れは無條件なる正直さの印象を私に殘して、あわたゞしく立去つてしまつた。

私は、今や世間と文壇から姿を消してしまつた此理想主義者の小說を書いたことを最早後悔はしない。之れに反して、『痴愚なる女の告白』を書かうと思つた私の初の計畫は放棄する積りである、何故なれば、罪を犯せる女に自由な發言を許して、その犠牲となれる男を陷れる樣な證言を公然と爲さしめるといふことは、あまりに健全なる人間の理性に背馳する事だからである。

――佛語版、一八九四年十月――

獨譯者の跋

一八九三年にベルリンに於て出版せられた『告白』の最初のドイツ語版は、ストリンドベルクに對して一の罪を――三重の罪を犯せるものであつた。第一に、其飜譯は原文を不具なものにしてしまつた杜撰極まる拙譯で、無數の箇所に於て原作者の眞意を誤解せしめる樣な不條理を發生せしめ、且つ甚だ卑俗な言葉を使用したものであつた。第二に、一般の批評は、此ドイツ語譯の亂暴な缺陷をば看過して、原作者がまるで書いた覺えも無い其等の不條理をそつくり其まゝ彼れの罪に歸してしまつた程に盲目であつた。第三に、プロシアの檢事は、此野卑なる譯語に迷はされて、此書を以て不道德の書と思ひ込み、彼の匿名の譯者に對してゞは無く、原作者に對して訴訟を起したのであつた。

此新しい出版は、出來得る限り之等の罪を償はうとするものである。私の飜譯は原文を不具にする樣な不完全なものでは無い、決して馬鹿氣た不條理を含まない、而して又、成るべく高尚な言葉を使用して居る。今や如何なる批評家と雖も、原作者の深刻なる憎惡の蔭には最も博大なる愛の潛めることを否定し得ないであらう。また如何なる檢事と雖も今や此書の高き道義觀念を確信せしめられない譯には行かぬだらう。

『告白』の一般的價値の存する所は――玆に、一人の精神的に勞働する男子が性の隷屬から――彼れ自身の其れ及び一婦人の其れから解脫する所に在る――尤も此婦人は彼女だけが特別に惡い女だといふ譯では無く、むしろ、性としては何等の價値も無い婦人達の種屬の典型的代表者なのである。精神的に勞働する男子の幾千萬は、彼等自身の性の桎梏の下に、及びかゝる婦人の其れの下に繫がれて居る、かゝる人々にとつて此書は一の解脫であるだらう。

ストリンドベルクは此『告白』及びこれに續く『父』、『債鬼』、『仲間』等の戲曲に於て、此性の隷屬からの解脫の問題を、彼れ自らが體驗せるがまゝに個人的に取扱へる間に、それと同時にフランスに於ては、ベラダンが此同じ解脫の問題を、傳統に結び付けて、彼れの三部作小說『女性の好奇心』『女性奉崇』、『藝術家の妻』に於て、組織的に叙述した――尤も此二人の詩人は互に何の知る所も無かつたのである。而して此性的解脫の兩大家は互に相補充する。――ストリンドベルクは原始的自然である、ベラダンは完成せられたる藝術である。

『告白』に於て描かれたる女主人公は、作者が彼女の上に加へられたる峻嚴なる審判に對して既に既に感謝の意を表しても善かつた筈である。正に彼女は裁かれたればこそ、その罪を贖ひ得たのである。此裁き無くば、彼女は永遠に昔あつた如き彼女に止まつたであらう。然し乍ら今や、彼女は

その刑罰を受け終つて、その罪も亦消滅したのである！

而して此結婚から生れ出た子供達も、生長の後には此『告白』に於て、性的生活の恐しさを彼等に戒むる一つの遺書を得ることゝなるであらう。

ストリンドベルクは果して裁く權利が有つたか？　然り！　彼れは『告白』に於て彼れの妻をして煉獄の淨めの火を通過せしめた如くに、彼れ自ら後年『地獄』に於て自身を淨め、鍛へなければならなかつた。

彼れの此勞作を個性的なるものより典型的なるものにまで高める爲めに、ストリンドベルクは之れを從來の殆ど總べての他の作物の如くにシュウェーデンの母國語を以て書かずに、困難を犯して、之れをフランス語で書いた。此書のシュウェーデン語の出版をば彼れは今日に至るまで遂に公にせしめなかつた。

ストリンドベルクの一つの祕密は、彼れはその人格を分離し得る能力を有つといふ事である。『告白』の主人公アクセルは、ストリンドベルクの全部では無くて、之れは『或る魂の發展』のヨハンに依つて初めて完全なるものにせられ得るのである。此兩書とも一八七五――一八八七年に亘る同一時代を描く、而して前者は、愛のストリンドベルクを、後者は勞作の彼れを現す。

自分の人格を分離し得るといふ此能力有るが爲めに、ストリンドベルクは『地獄』に於て能く發狂を免れることが出來たのである。其當時は一方のストリンドベルクのみが病み、他の一方のストリンドベルクは全然健康に、さながら醫師の如くに、病めるストリンドベルクを見護つたのである。

『告白』に依つてストリンドベルクの自叙傳は完成する。『女中の子』、『或る魂の發展』、『獨人の告白』、『地獄――傳說』、『分離――孤獨』の五卷は、誕生より五十歲に至るまでのストリンドベルクの生涯を物語る。同時に其れは一八五〇年頃より一九〇〇年頃に至る半世紀間の思潮を反映する。

一九一〇年の夏、瑞西にて

エミール・シェーリング

——『廚人の告白』了——

大正十三年六月一日印刷
大正十三年六月七日發行

（定價參圓）

◀廚人の告白▶

飜譯者　三井光彌
發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮
發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話牛込（局）八〇六番　八〇七番　八〇八番　八八〇九番
振替（東京）一七四二番

印刷所　東京市小石川區西江戸川町　電話小石川五九二一番　富士印刷株式會社
印刷者　佐々木俊一

「ストリンドベルク小說全集」內容

第一卷 ■女中の子
第二卷 ■或る魂の發展
（自叙傳小說）
第三卷 ■痴人の告白
第四卷 ■地獄、傳說
第五卷 ■不和、孤獨

第六卷 ■赤い部屋
第七卷 ■島の農夫
（長編小說）
第八卷 ■大洋の岸にて
第九卷 ■ゴシックの部屋
第十卷 ■黑い旗

近刊 □不和、孤獨（印刷中）伊藤武雄譯
近刊 □或る魂の發展 秦豐吉譯

「ストリンドベルク戲曲全集」內容（訂正）

第一卷 史劇二部作と傳奇劇 マイステル・オローフ——グスターフ・ワサ——組合の祕密——マルギット夫人（騎士ベンゲトの妻）
第二卷 自然主義戲曲（二部作と一幕物の十一）（新刊） 父親——なかま同士——ジュリー嬢——債鬼——賤民（パリア）——熱風（サムウム）——より強いもの——きづな——火いたづら——死の前に——最初の警告——借と貸——母の愛
第三卷 ダマスクスへ 外二篇（既刊） ダマスクス（第一部、第二部、第三部——夢の戲曲——白鳥姫
第四卷 死の舞踏 外二篇 死の舞踏、第一部、第二部——熱醉——ヘムゼーの人々
第五卷 祝祭曲と小劇場曲（近刊） 降臨祭——復活祭——仲夏祭——稻妻——燒跡——幽靈ソナータ——ペリカン
第六卷 童話劇と韻文曲 幸福なペーテル——天國の鍵——冠の花嫁——アブ・カセムの上靴——クリスマスおめでたし——街道
第七卷 遺稿と習作戲曲 ソクラテス——世界史劇——三つの一幕物——四十八年

女優 ファンニイ・ファルクネル著 秦豐吉氏譯

ストリンドベルクの 最後の戀

菊半截判
特製最美本
定價壹圓
送料六錢

極めて興味多き書

寫眞目次 十九歳の著者。三十一歳の著者。白鳥姫に扮せる著者。二度目の夫人。三度目の夫人。六十歳のストリンドベルク。

「私の妻とは、私の美しい囚人看守だ。」とストリンドベルクは、「地獄」の中で呪ひ乍ら、猶ほ三十歳にして結婚して別れ、四十歳にして二たび娶つて去らしめ、五十歳にして三度迎へて捨てられたのである。此の悲痛なる結婚生活は、各種の作品によつて世人の熟知するところであるが、既に白髮を戴いた六十歳のストリンドベルクが、僅に十九歳の少女たりし著者を戀して、これを其膝に抱いたことは全く世に知られてゐない。而も悲むべき餘りの年齡の相違が、此の可憐の少女をして彼と肉慾に陷るを躊躇せしめた關係は、此の書によつて初めて世間に暴露されたのである。此の老文豪が、如何にして少女を口說いたかといふ好色生活の一面に、如何に子供を愛する好老爺であつたかといふ彼の日常生活は勿論、晩年の交友、性癖、臨終に至るまで、未だ世に現れなかつた極めて興味多き消息は、今猶ほ三十餘歳の現存せる當時の戀人によつて、詳細に、率直に、赤裸々に叙述された。ストリンドベルクの人間としての生活——この老文豪の好色生活は、本書によつて、讀者を驚倒せしめ、且つ涙ぐましめるに堪ひない。書は、最近瑞逸で公にされ非常に評判になつたもので、秦氏はその歸朝土産として譯出されたのである。

Fanny Falkner

昇曙夢氏編 ■第一期刊行三十册の豫定

■新ロシヤ・パンフレット

新四六判紙裝
一册定價八拾錢
郵送料一册六錢

新ロシヤ生活のリズムとテンポとの表現である文學、演劇、舞踊、美術、宗教、教育、哲學等の文化戰線に於ける創造的活動とその驚く可き收穫とに至つては、我邦には全然閉された寶庫である。この深祕の扉を開放して、新文化の創造に向つて新しき衝動を與へんとするのが、本叢書發行の目的である

■第一編 赤露見たまゝの記 新刊發賣

著者は昨夏親しくモスクヴアに入つて、若きロシヤの潑溂たる姿に接し、平素の研究を實地に照らして判斷するの機會を得た。本篇は其の見聞記である「我が眼に映ぜるロシヤの實情」、「新興國を象る博覽會」、「教育と文化施設の現狀」、「ロシヤ文壇印象記」、「モスクヴア劇壇の印象」等の數章に分ち、何等の傾向にも囚はれざる一個の研究者として、極めて自由なる立場から、新ロシヤ生活の縮圖を描き、その心理と空氣とを叙した。以下續出する三十册のパンフレットの背景となり、序說となるものである。

挿畫 二十餘面

■第二編 革命期の演劇と舞踊 新刊發賣

新ロシヤの藝術中、最も革命的眞特色を發揮せるものは演劇と舞踊とである。此の兩者は藝術革命の先驅として、いかに警拔なる新容を示しつゝあるかは、まさしく想像の外で、すべては劃期的であり、一切は創造そのものである。本篇は、著者の最も力を用ゐられたもので、「革命期のロシヤ演劇」、「舞臺裝置の革命」、「新劇運動の三權威」、「演劇革命の跡を顧みて」、「ロシヤ最近の舞踊」以下數章、最近の舞臺藝術の進歩を語る二十數面の寫眞と相待つて讀者の知らんとし、聞かんとするものを與へて剩さない。

挿畫 二十餘面

吉江喬松氏監選

現代佛蘭西文藝叢書

新四六判特製　一册壹圓四拾錢　送料拾錢

第一編 狹き門　アンドレエ・ジイド作　山内義雄氏譯

作者は現代佛文壇の重鎭、『狹き門』は最も廣く讀まれてゐる其の代表作である。妹に戀を讓つて修道院で死んだ少女アリサの生涯を描いたもので、戀愛心理の解剖は深刻を極め、技巧の精妙は眞に無比、永井荷風氏が現代小說の範として推したのでも一斑が分らう。

第二編 我が友の書　アナトオル・フランス作　小林龍雄氏譯

作者が幼年時代を描ける、その最大の傑作の一つである。淸澄にして色彩ある文體は、美くしき眞珠の光を見るが如く、加ふるに全篇に橫溢せる詩味と、聰明なる觀智と、且つ嫣曲なる皮肉と、溫和なる同情とは、何人をも思はず微笑せしめずには措かないであらう。

第三編 ラマンチョオ　ピエエル・ロティ作　和田傳氏譯

牛未開兒ラマンチョオを主人公として、放縱なる異敎徒の血と、敬虔なる基督敎徒の魂との相剋と闘爭とを描ける此篇は、謂ゆる「信仰なき順禮」たる彼れ自身の惱みの告白である。そこに憧憬の頌歌あり、ノスタルジイの祈禱あり、夢は華かに亂れ、幻は遠く誘ふ。

第四編 白き石の上にて　アナトオル・フランス作　平林初之輔氏譯

此の小說位大きな問題に僅かな紙數で手際よく取扱つたものはない。それは人間の過去と現在と未來との批評である。「基督敎文明に對する一流の皮肉な批評である。科學文明の發達史である。更に、科學的社會主義のプログラムから描き出されたユウトピアの物語である。

第五編 夜ひらく　ポオル・モオラン作　堀口大學氏譯

戰後の佛文壇に現はれた最初の旭日である。最近四五年に亘る歐洲各國の政治問題を背景となし、戰後歐洲人の狂ほしい生活狀態を描くに、此の作者獨得の率直な、而も生々しい色彩のきらびやかな、感じ易い繪畫的な文章を以てした、眞に稀有の傑作である。

海外文學新選

早稻田大學及び東京外國語學校諸敎授を中心とせる譯壇の權威十二家の編纂に成る、近代及び現代の世界文學の精華を集めた一大シリーズである。編纂者自ら飜譯に當たらるゝは勿論、篤學の新人に囑して譯せしめたものを一々査閲し、完璧と認めた上で始めて公刊するのである。卽ち編纂者が飜譯の全責任を負はるゝので、斯くの如き用意の下に成れる飜譯書は眞に空前であることを特筆せねばならぬ。一册百五六十頁の**パンフレット**型。定價の至廉も亦本叢書の一特色である。

第一期刊行百五十册　毎月(約)三册發行　一册六拾錢　送料各六錢

(1) 小說 死刑をくふ女　(西班牙) ブラスコ・イバニェス　永田寬定氏譯
(2) 戲曲 チャッテルトン　(佛蘭西) アルフレット・ウィニイ　小林龍雄氏譯
(3) 小說 イスカリオテのユダ　(露西亞) アンドレエフ　米川正夫氏譯
(4) 戲曲 勝利者と敗北者　(英吉利) ゴルズワージー　山田松太郎氏譯
(5) 小說 影の彌撒　(佛蘭西) アナトール・フランス　山内義雄氏譯
(6) 戲曲 ハムレット　(英吉利) ドリンクウオター　横山有策氏譯
(7) 小說 彼女は眠れり　(露西亞) ドウイモフ　梅田寬氏譯
(8) 小說 三分間のローマンス　(獨逸) ハインリッヒ・マン　青木武雄氏譯
(9) 戲曲 長い歸の船路　(米國) ユージン・オニイル　北村喜八氏譯
(10) 小說 盲人國　(英吉利) エチ・ジー・ウエルズ　石井眞峰氏譯

K 220
トエ/C-2P

□飜譯書類□

ロマンロオラン	ジャン・クリストフ	豐島與志雄譯	全四冊 一冊貳圓五拾錢 送料一冊拾貳錢
トルストイ	戰爭と平和	昇曙夢 米川正夫譯	全四冊 一冊貳圓五拾錢 送料一冊拾貳錢
同	アンナ・カレニナ	原久一郎譯	全三冊 一冊貳圓參拾錢 送料一冊拾貳錢
ドストエフスキイ	カラマゾフの兄弟	米川正夫譯	全四冊 一冊壹圓八拾錢 送料一冊拾貳錢
同	罪と罰	中村白葉譯	全二冊 一冊壹圓八拾錢 送料一冊拾貳錢
ユーゴー	レ・ミゼラブル	豐島與志雄譯	全四冊 一冊貳圓 送料一冊拾貳錢
ルッソオ	懺悔錄	生田長江 大杉榮譯	全二冊 一冊壹圓五拾錢 送料一冊拾錢
ダンヌンツイオ	死の勝利	生田長江譯	定價壹圓五拾錢 送料拾錢
ゾラ	ナナ	宇高伸一譯	定價貳圓五拾錢 送料拾貳錢
ショウ	ショウ一幕物全集	市川又彥譯	定價貳圓五拾錢 送料拾貳錢
シング	シング戲曲全集	松村みね子譯	定價貳圓 送料拾貳錢

終